

国引の集ひ



講話集

国引の集ひ

第二十回神道講演全国研修大会
島根大会

御挨拶

神社本廳総長 矢田部正巳

第二十回神道講演全国研修大会・島根大会の開講式にあたり、一言ご挨拶申し上げます。
神道講演全国協議会の皆様には、平素より神社本庁の諸施策に対し、格別なるお力添へを戴き厚く御礼申し上げます。

さて、本研修大会は、長きに亘り神道講演を通じて斯道の興隆に御尽力戴いた石井寿夫先生・佐古幸嬰先生の御志を受け継ぎ、修練と同志結集の場として、昭和四十六年八月の第一回の開催より回を重ねて此の度第二十回の節目の大会を迎へられました。洵に意義深く、改めてお慶び申上げる次第です。

会員の皆様が本研修大会において地道に研修を重ね、会員相互の研鑽を続けてこられた成果は、奉仕神社における社頭講話を始めとした教化活動の大きな糧となつてゐることと信じて疑ひません。かうした着実な活動は、斯界にとりまして実に心強い限りであり、たゆみない研鑽に対し、深く敬意を表するものであります。

ところで、公德心の一片も見られない自己中心的な犯罪が頻発する昨今、祖先から受継いできた古来の伝統的価値観を見直す氣運が生じつつあるのを感じます。かかる状況において、神道の精神をわかりやすい言葉で氏子崇敬者に説き聞かせ、正しい志を伝えてゆかうとする神道講演全国協議会の活動意義は、弥が上にも増すものと確信してをります。

どうか会員の皆様には、教化活動の第一線に立つとの自覚のもと、本研修大会の成果を広く斯界に伝へ、伝統精神継承のために、尚一層のご挺身を賜りますやう切に願ひ申上げる次第です。

終はりに、本研修大会にあたり、永年にわたる連続受講の故をもって表彰の榮に浴されます方々の熱意と御功績に対し深甚なる敬意を表しますと共に、貴会のご隆昌と、参加各位の益々のご活躍をお祈りしまして、開講式にあたってのご挨拶と致します。

序

第一回目の神道講演研修会が開催されましたのが、終戦から間もない昭和二十五年とお伺いいたしております。斯界を取り巻く厳しい情勢の中、神社神道の本義を見極めんと、早くから教化活動の重要性を認識され、祖先の祈りの道を語り継がれてこられました諸先輩方の御努力に先ず以て深く敬意を表します。

その先人の心を引き継ぐ意味でも、本大会は村田会長を始め、運営に携わる方々のご尽力と、参加者の熱心な取り組みにより、意義深い大会になったことと存じます。

さて、天皇陛下・皇后陛下には平成十五年秋、出雲大社を御親拝あそばされ、皇后陛下より「出雲大社に詣でて」との御題で、

國譲り祀られましし大神の

奇しき御業を偲びて止まず

の御歌を賜りました。

この御歌は、大國主大神様が天の下の國づくりをなさり、生きとし生けるものの幸せの

縁を「産^む霊^す」ばれた御神業をお詠みになられ、その御神業を「奇しき御業」と尊崇敬拝なされます、皇室の究まりのない「お祈り」の御心と拝察申し上げます。大國主大神さまの御神縁に生かされ、ムスビの御霊力によつて、この大会に「御縁」を結ばれた皆様が、皇統無窮の尊崇敬拝の大御心を奉行なされ、それぞれのお仕える御社にて、この大会の成果を存分に發揮なさいますよう心から祈念申し上げます、講話集刊行にあたってのご挨拶とさせていただきます。

島根大会会長・出雲大社宮司 千家尊祐

目次

御挨拶

序

第二十回神道講演全国研修大会・島根大会

出雲の神様に祈り続けて――六十年延命の大靈験――
柱

日本の誇り・神道

古代祭祀を仰ぐ

古文書にみる親子の情愛

過疎地域の神社の役割

御神馬建立

熱田神宮の信仰について（小学生高学年から中学生を対象に）

自分を信じる

算賀祭について

子どもと遊び

伊勢神宮式年遷宮の意識昂揚について

神社本廳 総長 矢田部正巳

出雲大社 宮司 千家尊祐

相原牧雄 2

村田和弘 7

畠田明彦 10

生寫經和 14

大澤邦彦 19

小深田二大 23

松吉宣和 26

宮川一穂 31

水無瀬努 36

井手潔人 40

中木屋豊 44

石塚智康 48

お伽話の意味

お伊勢さん

日本人の主食に想う

お祭りの後で

還暦を迎えて

戦いの神

真の祈り

全員参加の楽しい地鎮祭

我が家の子供教育

二十四時間年中夢中

水神祭（子供祭）を終えて

神代の時代むかしのジェンダーフリー

「の」と「と」

—— “出来ちゃった結婚” の教へ子二人の、新しく門出するに際して——

英霊への祈り

熊谷房重 52

西村純子 57

高尾宗嗣 61

伊藤ヒサヨ 65

武智輝子 69

村田佳子 71

牟禮照子 77

日下雅史 80

稲葉政信 84

芦原大記 89

白澤徹也 93

秦和憲 97

野上正紘 102

山崎一夫 107

みたま祭りと私たちの生活

日本について

今、日本の教育に必要なもの

半世紀のリズム

伝えていきたい日本の心

相互理解

合掌も違反!?

いま、家庭でなすべきこと

隠身かくりみ(神さま)が見える

あなたの家に神棚を

人生長いか、短いか

八百万神々に守られて

家族

よみがえれ日本の魂―映画「ラスト・サムライ」を観て―

心に残るあの一言

古瀬光治 111

宗宮和史 115

神山貴 122

高橋光男 127

大島守彦 132

河野誠 136

田代壽興 140

川崎太久美 145

木下鏌二 150

寺本正徳 155

渡邊知宣 160

木下久榮 166

原茂子 172

大野康孝 176

河本文夫 181

私と木食仏海

伝えよう古里の文化伝統

死 道 反

明治天皇と神宮大麻奉斎

親孝行したい時に親はなし

神道講演構成法

島根大会の記録

神道講演全国協議会役員名簿

あとがき

島根大会実行委員長

村
田
和
之

井
上
忠
衡

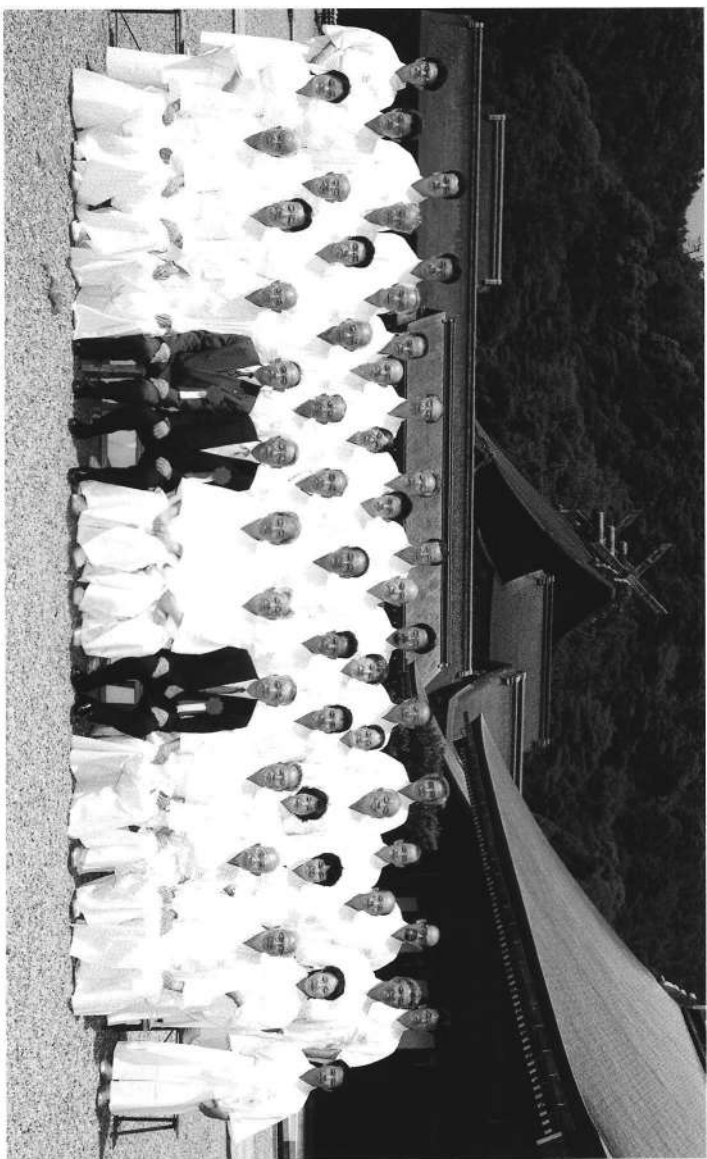
村
田
和
之

山
本
行
恭

芦
原
高
穂

佐
古
一
洌

222 221 218 214 208 199 195 191 187



第20回 神道講演全国研修大会 島根大会

平成16年7月13日

第二十回 神道講演全国研修大会 島根大会

とき 平成十六年七月十三日～十五日
ところ 島根県 出雲大社

出雲の神様に祈り続けて

—六十年延命の大靈驗—

相原牧雄

先日、七十才年輩の紳士が来訪されて、「貴殿あなたは、神様の御神徳ごしんとくを沢山に戴いておられますが・・・自分は一度もございませぬ。その理由わけをお尋ねに参りました。」と、言われるのです。

私は克よくく考えまして、三十六年前に拝聴はいちやうして、感動した実話と、私の体験とを申し上げました。三十六年前のその日は、昭和四十三年八月で、「広島県神社関係者大会」でした。

私は一時間二十分も早く入場しました。既に八十才以上とお見受けする品格ある御老人が、お一人だけ着席しておられます。私はお近づきして「何卒、健康で長生きの秘訣を教えてくださいませ。」と、お願いしました。

にっこり笑って語られたのが次の実話です。

「私は上田と申します。祖父の上田正信は明治の人間です。広島県の最も北で山奥の百姓でした。まだ若いのに、過労で体調を崩し、骨と皮になりました。お医者さんも―あと数日の命―と診断。その重病人が、突然、『庭に出してくれよ』と、せがむので仕方なく、皆で庭まで出してあげました。

衰^{みの}を敷いた上に坐らせてもらった祖父は、北の方を伏し拝み、泣きながら、か細い声でお願いを申し上げていました。よく聞くと、『出雲の神様、出雲の大神様！どうか、どうか助けてくださいませ。私はまだ三十五才であります。子供が五人おります。私が死にますと、上田の家は全滅します。どうか、どうか、お助け下さいませ！』とむせび泣きながら―懸命^{いのちかけ}のお祈りを、くり返し、くり返し続けてのお願いです。それは二時間をこえました。遂に、精も根もつき果てました。『家の内に・・・』との言葉に、皆してそろり、そろりと元の病床に寝かせました。

あーら、不思議にも！その日から食欲が湧き、次第に健康を取り戻し、やがて、毎日の仕事にも精出し、村人もびっくり仰天しました。そして九十五才まで長生きさせて頂き、素晴しい！生涯を閉じました。

父も祖父と同じく九十五まで元気でした。

お蔭様で、この私も八十五才です。今朝も午前三時に自宅を出発し、徒歩・バス・汽車を乗り継いでの一歩乗りでした。有り難いことに、祖父・父・私と三代続いて、神社総代長を務めさせて戴いております。」と。

この上田様の尊いお話に、私は感涙！にむせび、この実話を肝に銘じ、体験を重ねました。お蔭様で数多くの特別なご神徳を戴き！感泣！が続いております。

大靈験を戴く条件は

第一に 神様を ひたすら敬うこと。

第二に 常に正直 純真なこと。

第三に 神様がみておられることを露だに疑わず いかなる時も信じ切ること。

第四に 御祈りは真心そのものであること。

第五に 続けて続けてお祈りすること。即ち「継続祈願！」であること。

と、確く信じております。第五の「継続祈願」の重要なことは、上田正信様が良い実例

ですが、私は、誰でも分りやすい一つの実験をやってみました。

自宅の台所のガスコンロで二リットルの水道水を沸かしてみました。・・・三分・・・五分、なんのこともありません。・・・十二分でヤカンの口から湯気が吹き始めまし

た。・・・十五分、湯気の勢いが強くなり、十六分、熱湯が吹き出し、やっと沸騰点に達しました。

水も五分や六分の火では沸騰しません。御祈願も少しの間の御願いでは「格別の御霊験が無い」のが当然です。人様から「気が狂った」と思われるほど、御祈願に燃えに燃えて、燃え続けておれば、必ず広大な霊験！有難い御神徳！を頂戴できるのであります。

そもそも、神様の世界におかれましても、人間界でも、約十五分間が、時間的な一単位との仰せであります。それは人間の心臓が、およそ千回動く時間と承っております。

あの上田正信様は瀕死の重病ながら、二時間以上も、生命がけでお祈りを続けられました。実に、八単位をこえる熱願でした。

出雲の神様も、その熱意に御感心遊ばされ、六十年もの長生きをお恵み戴いたのです。御参考までに、私自身（相原牧雄）の、継続祈願のことを申し上げます。

昭和二十年八月十五日、終戦の大詔を陸軍軍人として拝したのは、中国の南京でした。

あの敗戦の日から泣き続け、祈り続け、夜も昼も絶ゆることなく、アマテラスオホミカミ・・・アマテラスオホミカミ・・・と、日本再建！世界維新！の道を祈りに祈りました。漸く、十月二十三日早朝、南京郊外の桃島の中で、歴史的な大神示を拝受して、再生するこ

とができました。七十日間、まさに一心不乱！死に物狂いの継続祈願！でした。（拙者の謹著『あなたも神様になれる』第三章に詳述）

その敗戦の日から二十三年後、奇しくも明治維新百年記念の「広島県神社関係者大会」の会場で、上田様のお話に感動共鳴した私でありました。思わず、私の口より奔り出した拙詠を吟じて、結びといたします。

かくばかり祈り続けて祈るとき

神の助けのなど無からめや

ひとすじに祈り続けて祈るとき

神の助けのなど無からめや

（広島県 切幡神社 宮司）

柱

村田和弘

出雲大社の建物は皆さんもご存じの通り、日本最古の神社建築物です。社殿の高さは二十四メートルの大社造りの建物です。しかし、今でこそこの高さの社殿ですが実はその大昔社殿の高さは九十六メートルというケタ違いの高さの神社建築物でした。今でこそ近代化して色々な高さの建築物がありますが、その当時はとうてい無理に近い建物だと私自身も思っていました。しかしそれが實在の建物だったと、出雲国造千家伝承の「金輪造営差図」に残されていただけだったらしいですが、この残された差図を裏付ける衝撃的な出来事が今から四年前の四月、平成十二年の四月に見つかったのです。一本、直径一三五センチの巨木を三本束ねて一本の御柱とした状態で本殿と拝殿の間から現れ、一三五センチの丸太を束ねる「カスガイ」と一緒に発掘されたのです。この柱の出現によって高さ九メートルの御本殿が昔は存在したという事です。

柱といっても、この出雲大社の様に大きい柱もあれば普通の家の柱もあります。柱、柱

と言っても建物だけの柱が柱ではないと思います。

プロ野球の解説者の人達も「柱」と言う言葉をよく使っているところを耳にします。

「今年の○○チームは三本柱で行く、四本柱で行く……」色々な本数の柱を聞きますが皆さんもご存じの通りそのチームのピッチャーの人数を言うのです。

今の、教育にも「育」という柱が存在すると思います。「知育」・「徳育」・「体育」の三本柱だと思います。やはり、これらの根底となる基礎は「食育」食べる事だと思います。何故なら食えることをしなければ何も次に進まないと思うのです。ただ食えるだけではこれ又駄目です。この食べ物には何が含まれ、どの様に作られそれを口に入れたら自分自身の心や身体にどう影響するのかしっかりと理解し又他の人にしっかりと教える必要があるのではないのでしょうか。

野球の「柱」ピッチャーで言えばストライクが入らなければ野球の試合にならないし、建物の「柱」にしても存在しなければ棟が上がらず屋根ができないし、一家の「大黒柱」がなければ家族はバラバラになってしまうのではないのでしょうか。

今の日本、これからの日本の将来を考えてみても「柱」は必要不可欠なものだと思います。その柱は神社神道と言っても過言ではないと思います。

その為にも、大神様の雄大な心を学び、社会や家庭の中で自分の果たすべき役割を自覚して価値ある必要な存在となる努力をしなければならないのではないのでしょうか。

(広島県 長束神社 禰宜)

日本の誇り・神道

畠田明彦

去る平成十二年二月、私は神道国際友好会宗教事情視察団に参加し、キューバの首都ハバナのカテドラル（大聖堂）、メキシコのグアダルーペ寺院とミッシヨンスクールを訪れ、初めてキリスト教に接しました。テレビや映画で見るイメージ以上に荘嚴な教会内は、まさに癒しの空間であり、世界中の人々を魅了する所以を体感致しました。

まず、このキリスト教について少しお話をさせていただきます。

宗教は創唱宗教と民族宗教に大別されます。前者の代表的なものはキリスト教・イスラム教・仏教で世界三大宗教と言われております。後者はユダヤ教・道教・神道等です。この世界三大宗教の中でもキリスト教はその信者数においては圧倒的で、世界中に全ての宗派を合わせ約十八億人と言われております。数が全てではありませんが、これほど多くの人々が信仰するキリスト教の魅力とはいったいどこにあるのでしょうか。

キリスト教は言うまでもなくイエス・キリストによって約二千年前に創始されました。

イエスは父ヨセフ、母マリアの子として生まれ、三十歳の頃、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受け、荒野での修行の後、エルサレムに入り、病人を癒したり、死者を蘇らすなどの奇跡をなしたとされています。又同時にユダヤの律法を学び、それを批判し独自の新しい教えを説きました。これに対しユダヤ教の指導者は脅威を感じ、やがて弟子のユダの裏切りによりゴルゴダの丘にて処刑されます。

その後十二使徒の筆頭ペテロがエルサレム教会を組織し、弟子パウロの伝道により各地へ広まり、西暦三九二年、ローマの国教となります。これがローマ・カトリックです。しかし時が移りカトリックはローマ・カトリックと東方正教会に分裂。そして十六世紀にはカトリックへの批判が高まりプロテスタントが誕生するのです。

次にキリスト教の教典である聖書についてですが、ご存知のとおり聖書には旧約聖書と新約聖書があります。旧約聖書は元々ユダヤ教の聖典であり、キリスト教も聖典と考えています。一方イエスの言行録「福音書」や弟子たちの手紙、預言書「ヨハネの黙示録」から成る新約聖書はキリスト教だけの聖典です。

キリスト教の魅力、それはこの「聖書」の言葉にあると思います。旧約聖書『出エジプト記二十章三節』のモーゼと十戒のひとつに「わたしのほかに、ほかの神々があつてはな

らない」とあり、又『イザヤ書四十五章五節』には「わたしが主である。わたしのほかに神はいない」とあります。このように、聖書に書かれている言葉は、非常にダイレクトな表現で人の心を惹きつけるものがあります。人は「唯一」或いは「絶対」という言葉にある種の安心感を覚えるのでしょう。

ここで神道とキリスト教を比較して、一神教と多神教の違い以外に決定的な違いを挙げるとすれば、それは祖先崇拜でしょう。キリスト教では祖先崇拜と言う觀念が全くありません。キリスト教の葬式は死者のために行うのではなく、遺族のために行うのです。お墓は死者のメモリアル、記念碑であります。死者の遺徳を偲ぶことはあっても、死者を神として崇める事はありません。それは「唯一の神」以外のものを崇めることになるので禁止されています。死者の魂は「神」の御手に委ねられるので、死後の事は全て「神」に任せてしまふのです。

祖先を神として崇め、その御心をお和めする「慰霊」の念を重んじる私たち日本人にとつては理解しがたい事がありますが、ここで私はキリスト教を批判するつもりはありません。キリスト教は「救いと癒しの教え」をもつて世界最大の信者数を誇っていますが、そこには、その中心を支える強固な柱がないように思えます。しかし、神道には一本の太い

柱があります。それが皇室であります。ローマ・カトリックにもローマ法王がいますが、失礼ながらそれは単なる最高指導者であり、柱とは言えないでしょう。

神道の「道」とは、神々のご事跡に習う道、神々が我々のために示された道、日本人が歩んできた、そして歩んで行くべき道であります。天皇はその道を率先して歩まれているのです。昭和天皇が身を挺してその道と、我々国民をお守り下さいました事は皆さんご存知の通りです。

「唯一」「絶対」には大きな陥穽があります。唯一絶対故に他を認めない。だから紛争が生じるのです。自然を、そして祖先を神と崇める心は、日本人の懐の広さ、大きさ、そして優しさの現れであります。キリスト教は確かに偉大な宗教であります。しかし神道にはそれを超越した寛大な精神があるのです。

「大御心をいただきてむつび和らぎ、国の隆昌と世界の共存共栄とを祈ること」

神道は単なる宗教ではない、日本人の魂そのものであり、日本が世界に誇れる至宝であると思います。

(京都府 松尾大社 権禰宜)

古代祭祀を仰ぐ

生 嶋 經 和

「千早振る松の尾山のかげみれば 今日ぞ千歳の始めなりける」

平安時代の後拾遺和歌集所載の、源兼澄が一条天皇の松尾行幸に供奉した際に詠われた和歌であります。目前に聳える松尾山の神々しい姿を仰ぎ見て、大御代の千代萬代の御栄えを思う心が伝わってまいります。

このように、多くの和歌を始めとして、松尾大社に関する文学作品の中には、特に松尾山を取り上げたものが、数多く見受けられます。このお山に対する畏敬の心こそが、悠久の昔から現代にいたる松尾信仰の根本をなすものではないかと思っております。

古代の人々は、自分たちの生活する村や里から日々仰ぎ見ることのできる秀麗な山や丘などを、神々の鎮まり坐すところとして崇敬してまいりました。神社の原初的な姿は、山自体をご神体として、あるいは山中の巨石を磐座として崇拜し、祭祀を行ってきたことに求められます。

それでは、山と人々の生活とは、どのような関係があるのでしょうか。山からは清らかな水が流れ出ます。その水が田を養い、そして稲を育てます。「稲」とは「命の根」の意味であるといえます。その稲の実が「米」であり、「米」こそは命を籠めるもの、神霊の籠めるものであるといわれています。

私達日本人の祖先は、米を主食として身体を作り、精神と肉体の力を培ってまいりました。つまり、ものを考える力、働く力とは、米を食することを元としているといえます。山―水―田―米―人間の活動。この繰り返しがすなわち、人間の働きの根本をなすものであるといえます。このように見てまいりますと、人間の活動の基は、「山」であることがわかります。

千三百年前の大宝元年、秦忌寸都理が、勅命によって現在の場所に社殿を造営したと伝えられております。それ以前は、松尾の神は、奥の松尾山の頂に近い磐座を御神座として祀られてきたといわれます。

松尾二柱の神といわれるように、大山咋神、市杵島姫命の二神が祀られていますが、古い時代には大山咋神が主神であったと想像されます。この神は『古事記』には別名を「山末大主神」ともいわれ、「大山咋」の神名については、いろいろな説があります。「大」は

美称で、「偉大なる」の意味、「山」は「お山」であるわけですが、「昨」（くひ）は、清い流れ、すなわち山から流れ出る清水の意で、山麓に住む人々にとっては、飲み水としてはもちろんのこと、樹木を養い、米を始めとして穀物や他の食料を育んでくれる命の基であるため、それを生活の守護神として仰いだともいわれます。また打つ「杭」という意から、山にくい込む、標識を意味し、山の端から端までを守り治めた地主神としての性格をもち、そして山の高所に祭場を設け山の神霊を祀るため、麓からはそこが山霊の標識として仰がれるために起こった名であるとも言われています。

ともあれ、今日の京都盆地が一面の沼沢地であつた古代に、人々は周囲の山麓に居住したと思われるため、西山・嵐山連峰はその麓一帯に生活をする人たちにとっては、自分たちの生みの親であり、育ての親であつたので、その主峰である松尾山の頂上に近い大杉谷の上部に、巨石を磐座として神を祀り、生活の守護神としたのが、京都最古といわれる松尾大社の創祀ではなかつたかと思われまふ。

松尾山は、標高二百二十三メートル、決して高い山ではありませんが、以前は禁足地として、磐座への登拝の道は、今にも崩れかからんばかりの岩石が急斜面に張り出し、容易に人を近づけ難い地勢のなかにありました。この松尾山に一般の氏子崇敬者の人たちに気

輕に登ってもらい、松尾信仰の原点ともいうべき磐座を拝し神氣に触れてもらうのも、これからの教化の一方法ではないかと、昨年の夏から、この登拝の道の整備を、我々神職の手で始めてまいりました。四季折々の山の姿を眺めながら、資材運びに、作業に、汗を流し、ようやく一応の竣功をみたのが、つい先日のことでありました。

「松尾」は、正しくは「マツノヲ」というのが、古い言い方であつたと思われます。実は「マツノヲ」は「マツリヲ」であつて、「祭りの尾根」ということであります。樹木の「松」の字を書いています、日本語としては、「マツリ」（祭）の語源のひとつになつてゐる、神の降臨をお待ち申上げる意味の「マツ」（待つ）が本来の意味であるといえます。七月十日に、「山開き祭」を行いました、文字通り古代の祭祀が、現代に甦つた思いがし、「祭りの尾根」・「祭りの山」という意味を鮮明に感じることができました。

社殿祭祀の始まつた千三百年前、いやそれ以前から、周辺の様相は激変していても、松尾山は古代の姿そのままであらうかと思われず。「社」という字は、もともと「杜」を意味しました。この神の杜、緑に溢れた美しい山や森が、人間にとっていかに大切なものかはいふまでもありません。地球の温暖化、都市化・開発の波の中、急速に失われつつある自然環境に対して、神社の緑は破壊を防ぐ防波堤として大きな役割を果たしています。そ

れは、なによりも神の坐す山や森として、人々の心の拠り所として厳然と存在しているからにほかなりません。

この混沌とした現代にあつて、松尾山がまた神々の坐す山や杜が、今の世の人たちにも、大きくご神威を感じられるよう、守り伝えていくことの必要性を強く感じております。

(京都府 松尾大社 権宮司)

古文書にみる親子の情愛

大澤邦彦

皆さんこんにちは。今日はご多忙の中ようこそお集り下さいました。昨今大変暑い毎日でございますが、お変わりございませんでしょうか。玆今日は会長さんよりご連絡がございました、日々の社務奉仕また保護司としての活動の中で何か話をとのご依頼でございます。少し時間を頂戴し、駄弁を勞することをお許し願いたいと存じます。

私事で恐縮でございますが、今年の五月に私は二人の孫に恵まれました。ところがちょうど孫が生まれる一ヶ月程前に、一寸不思議な一通の手紙と巡り合いました。と申しますのも私は三十年程前より古文書を読む会の講師として県内の各地を廻り、江戸時代のミミズの這った様な文字の解説や書かれている内容を通じ、掘り下げて地域の歴史を皆さんといっしょに研究しております。そんな関係がございまして、私の所には古くなって使用出来ない襖や屏風が沢山持込まれております。

この古い襖や屏風の上紙を剥がしますと、その下に大正・明治期の古い新聞が張つてあり、更にその新聞を剥がしますと、その下には江戸時代の文書がびっしりと張つてありま

す。中には三百年から三百五十年位昔の文書が発見されます。中には地域の歴史を見直す様な貴重な文書も発見されます。

扱今皆さんのお手許に配布致しております古文書は、襖の中から発見された数百枚の中の一枚でございます。普通この様な文書類は不用になると処分される訳で有りますが、たまたま襖に張って有りましたので廃棄処分を免れた訳であります。そして二百二十年の眠りから目覚め、今私達と対面した訳です。

古文書原本

- ① 一筆啓上 いっぺんきじょう 仕候 しこう 先以 ますもて
- ② 追々冷氣 おひもれ 相催 あひもれ 候処 ところ
- ③ 弥 いよいよ 御勇健二 ごようけん 被遊御座 ござあそばされ
- ④ 目出度 めいど 奉存 ぞんじたてまつりぞう 候然者 しからは
- ⑤ おとき儀今日十三日二
- ⑥ 安々と安産 やすと 仕 し 親子共 おなごども
- ⑦ 至 いた 而志やうふ二 に 而候間御安心 に

それでは急いで朗読してみます。こうした手紙文は特に読みにくいものがございます。行の上に番号をつけておりますので、その順番に読んで参ります。一行目から四行目までは時候の挨拶で、一筆差し上げます。だんだん寒くなって参りましたが、弥 いよいよ 元氣でお過しのこと、存じ何よりでございます。

扱その次、五行目からが本題であります。即ちおときさんなる方が十三日に安々と安産

⑧ 可被遣候 尤 生出之子女子二

⑨ 候間左様思召可被遣候 右

⑩ 得貴意度 如此御座候

⑪ 恐惶謹言

⑫ 国藤孫左衛門

され、しかも親子共元気で、生まれた子供は女の子であったというのが直接の意味です。また国藤孫左衛門なる方は当地方の大庄屋さん、さしずめ現在の町長さんに相当する役職の人です。

私はこの一枚の古ぼけた古文書と対面し、幾度となく読み続けている内に、これは発見されるべくして出現した文書の様に思えて来ました。差出人の国藤孫左衛門さんの娘おとささんの出産を通じて、私達が今忘れかけている一番大切なもの、血の通った人の心、家族の愛情、絆等改めて教えられた様な気が致します。それから二百年以上の歳月が経ちました。しかし乍ら現在の日本の社会はどうでしょう。日本各地で想像すら出来ない様な犯罪が起っています。しかも社会の、世の中の一番基本の単位である筈の家庭が崩壊しつつあり、しかも低年齢の子供達が凶悪な犯罪を起しています。これだけ物余り飽食の時代と言われて久しい訳ですが、皆さんこの現実をどう思われますか。

扱皆さん、やがて当神社では夏祭りを迎えます。今年もまた子供御輿をかつぎ、屋台の

前で楽しそうに踊る子供達の可愛い笑顔が見られます。私は最近この祭りの中にとっても大切な事が隠されている様な気がしております。昨今は近所隣りも疎遠となり、名前も顔も判らない。そこで祭りを通じて隣近所助け合い、手を添え心を一つにする、そこに心のふれ合いが生まれ、ぬくもりのある地域社会の絆が生まれて来るのではないでしょうか。

そして祭りを通じて培った心の中には、故郷や友達を思い親を思う心の栄養がいっぱい蓄積されて来ると思います。成長に従って著しく変化し、多感な年頃を迎える青少年期に、心の中が空っぽに渴いていたのでは健全な成長はあまり期待出来ないと思います。もう一度申し上げますが、額いっぱい汗し心を一つにしてみこしを担ぐ。わっしょい、わっしょい、わっしょい。皆さん、このわっしょいの掛け声をどう解釈されますか？私は次の様に解釈しています。つまり心を一つにして和をシヨウ（かつぐ・・・肩などに乗せる）、皆で豊かな心をつくる。それはとりも直さず神様からのすばらしいまごころと言う心のうるおいを頂くことに繋がると思います。二人の孫の誕生と、奇しくも孫の誕生を喜々として知らせる二百年も前の先達に心洗われ、一言申し述べた次第でございます。どうも本日はご苦勞様でございました。

過疎地域の神社の役割

小深田 二大

講演に入る前におことわりを申し上げます。実は私、はじめてで原稿を用意していません。ですから私が今直面している過疎地域の神職の苦悩を訴えて、皆さんがどうしているのか何かのヒントを得たいと思いますので、お聞かしい点が多くあるかと思いますが宜しくお願いします。

私は去る三月末に会社を定年退職いたしました。これまでは、祭日に祭典を務めるお祭り神職でして、前に講演なさったお二人のように、「古代祭祀を仰ぐ」とか「古文書にみる親子の情愛」といった勉強ができていません。しかも隣村の宮司が亡くなり十一社の宮司をも押しつけられてしまいました。宮司に後継者がなかったのであります。急に十数社の宮司になって祭典の日程の調整に追われ、落ち着いて神明奉仕が出来てないのが現状で神様には、申し訳なく思っている次第です。

さて、過疎の状況ですが、私もこれで町の名士でございます。ですが結婚式によばれる

ことがない。どうしてもだか分りますか、実はね、結婚式が無いに等しいんですよ。で、鯉のぼりが上がらない。農業漁業の不振、高齢者の増加で神輿を担ぐ人がいない。里樂師がいなくなる。祭典が諸々簡略化されており、これからどのような方向へ指導して行けばいいのか思案している所であり、皆さんのご意見をお寄せいただきたい点でもございます。

そうは言っても現状を嘆いていても仕方がない訳で、前向きに取組んで行かねばなりません。そこで稲作りに取組み、しかも無農薬米を合鴨を使ってこ、十年になります。氏子の人々と同じレベルで会話が出来るように同じ体験をした上で、これから先、どのように指導してゆくべきか模索しています。そんな中で日本の国はどうなつてゆくのだろうかと考えた事がある。最近日本会議が出したビデオを買い、イギリスのサッチャー元首相が断行したイギリスの教育改革の様子を見て、鉄の女といわれたサッチャー首相の「すごさ」を感じた次第で日本の現状を思う時、サッチャーのような首相は出てこないのか、憲法改正と同時に、日本の教育改革を国家の責任でやってもらえないものか。日本の国家観をはつきりさせ、それに添った教育基本法を改正して、美わしき、清々しい日本を指し示して欲しいものだと感じているところで、神道の精神が、家庭教育、学校教育、社会教育に生かされた教育基本法の柱に据えてもらいたいと感じるところで、そうした全体像をしっか

りとらえて、神社経営をし、氏子を引っぱり、神社の再生、神社を通して地域づくりをして行く覚悟であります。

(大分県 八坂社 宮司)

御神馬建立

松吉宣和

乃木將軍御夫妻殉死九十年を迎え、名馬壽号の霊前で年祭、私は年一回の御霊祭りに参拝ですが、皆様方は、毎日櫛をお供えして参拝し、「壽号の御霊」は、皆さんと日々過ごすことに感謝し、幸せな明るい家庭を見守っていると思います。昨年壽号祭りの席で、崎郷土史会員より、記念事業に、「壽号」建立の話があり、参列者と協議し賛同を得、下関市乃木神社に建立されている、乃木將軍御夫妻銅像横に、建立する事に決定。

建立材質は、名馬壽号は、アラビア産の白馬で、御影石を使用する事になり、徳山市黒髮島の御影石二十二トンを使用、切り出した後、御神体になる御影石の御霊鎮め清祓いの為、ビデオ作成者、工事社が参列、現地で祭典。製作地は、石材店が中国に石材工場を経営、中国四社の石彫刻店に、「壽号」の写真を渡し、ミニチュア（五十センチ）、を作成、その中で一番実物に近い、中国福建省惠安県龍西ソウプの会社へ発注。

徳山港で船積み、十日間で現地到着、二ヶ月間の工期で作成、その間、建立地の清祓、

工事安全祈願を関係者参列し祭典。

最終仕上げは、下関市の石材店で行い、乃木將軍御夫妻横に、十四トン台座に、八トンの勇壮な姿、御神馬を設置、工事関係者、崇敬者が見守る中完成。四月十一日、午前十一時、春季大祭、名馬壽号建立竣工報告祭、除幕式、多くの参列者と共に盛大に祭典、直会、伊勢より小泉美智子先生の講演、腹話術「伊勢ちゃん」が会場を賑やかにした。長府城下町に、新名所が出来、乃木將軍御夫妻の遺徳を感謝し、地域の活性化に、みんなで取り組み事を確認。

壽号と乃木大将

日露戦争で、第三軍を率いて旅順で激戦を繰り返した、乃木希典陸軍大将が、旅順陥落後に、露西亞軍要塞司令官ステッセル將軍と水師營で会見、明治三十八年一月五日午前十一時三十分、天気は快晴、会見後、ステッセル將軍は、乃木大将に、「私が乗ってまいりました馬は、アラビア産牡の名馬です、今日の記念に、閣下に献上したいと存じます。お受け下されば、無上の喜びであります」と、申し出られた。乃木將軍は、深く其の厚意に感謝し、正式な手続きを踏んでから、ご厚意を受け、永く愛養すべき事を約束。

ステッセル將軍の頭文字をとり、この馬を「壽号」（すこう）と名付け、凱旋後、払い下

げを受け、品位ある名馬の血統を絶やすことは惜しい、ステッセル將軍の厚意に酬いるためにも、日本馬の改良に役立てたいと思い、軍馬補充本部長に相談、明治三十九年の末、鳥取県赤崎の富豪家で、熱心な愛馬者、佐伯友文氏に種馬として、壽号の履歴を添えて、乃木將軍は贈呈した。略伝に、「壽号の天寿を全うセシメン事を願うに、佐伯友文氏は、馬に熱心にして、且つ壽号を熱望せられるを聞き、大蔵中將を介して、種馬として、ここに之を贈る為にその略を手記す。明治三十九年十二月七日、於、東京赤坂、乃木希典（華押）」
こうして、佐伯友文氏に愛育された壽号は、八年間大山の麓に広がる佐伯牧場で自由に走り、その間に八十頭の仔馬を得、産馬会社の優等賞を受けた。

壽号と崎

大正三年夏、佐伯氏は、隠岐産馬事業視察に出かけ、隠岐の環境が馬にとって最高であることを知り、隠岐の馬改良にと、壽号を隠岐の島司、村上寿夫氏に贈呈した。

大正四年五月十三日、壽号は、隠岐の島で生活が始まり、村上島司は、飼育管理を、隠岐産牛馬組合に委託、責任者を中之島海士村崎の陸軍三等獣医、渡辺諄三氏を指名。こうして壽号は、昭和天皇が皇太子のとき、大正六年七月七日、海士村の村上寿夫邸で、殿下の台覧を賜った。

住民から「壽号さん、壽号さん」と慕われ、崎での生活四年間、十頭の仔馬を得たが、病気で大正八年五月二十七日（海軍記念日）に享年二十三歳で、波乱の生涯を、海士村崎の地で終えた。

名馬壽号の亡骸は、渡辺氏、崎住民の手で、海士町崎、奥の堂丘に、懇ろに葬られた。昭和十一年二月、崎区有志による、建碑改修工事完成、碑文に「名馬壽号之墓」、記文は、陸軍大將正三位勲一等功三級、井上幾太郎の謹書、渡辺諄三氏は、壽号が息を引き取る前に、「たてがみ」をきり、村上島司に贈った。村上寿夫氏は、これを京都の工房に依頼、「払子」を作らせ、家宝として大切に保存し、その後、村上家は、乃木神社に奉納。

「名馬壽号」は、アラビヤで生まれ、シベリア大陸、中国大陸、日本の大地で生活、戦火に明け、戦火に暮れ、一国の將軍から一国の將軍へ贈られ、国際親善の大役を全うし、日本馬品質改良に貢献し、数奇な運命をたどった。

今、隠岐の島海士町、最南端の地、崎に眠っている。

平成十四年五月二十七日、「名馬壽号之墓」の碑が建立され、死後八十年にして初めて慰霊祭を、下関市より五十名参列し、崎郷土史研究会との共催で、盛大に壽号祭りの幟を立てて奉仕。

「名馬壽号」御神馬建立の献歌

乃木大将 身みかくし給ひ 九十年 貴き心 偲^{ママ}のび奉り
大君の みあとしたひて われはゆく 詠み給ひしも かなしきおもい^{ママ}
ことのぞみ 身をかくし給ふ ますらをの 雄心身にしみ 忘らえぬかな
まめやかに 仕え奉^{ママ}らむ 大君したひ こころいつかし

(山口県 乃木神社 宮司)

熱田神宮の信仰について（小学生高学年から中学生を対象に）

宮川 一穂

はじめに

皆さん、今日は熱田神宮に良く来てくれました。皆さんは、学校の総合的な学習の時間に、来て頂いたということですね。

それでは、境内を案内しながらご説明しましょう。

熱田神宮の境内は約十九万平方メートルです。

この広い境内には全部合わせて四十五のお社があり、また、主なお祭りだけでも年間約七十回ほどの数になります。

大楠

境内のほぼ中央に立っているのがこの大楠で、幹周りは約十メートル、樹齢は約千年と云われています。

境内には名古屋市で一番古く大きな木と、三番目に大きな木、これらも木の種類は楠です。そして四番目がこの「大楠」です。ちなみに、名古屋市内の巨木ベストテンの内七本が当神宮にあるそうです。

熱田の杜

樹齡千年の木というのは、日本全体でみたらあまり珍しいものではないかもしれませんが。でも、この大都会名古屋にあるとなれば話は違ってきます。

皆さんがこの境内から一步踏み出せば、見渡す限りコンクリートやアスファルトで覆われた人工的な世界です。そんなところにこれだけの大きな森が残され、古い木々が生い茂っているということは、大昔からこの土地が人々に大切にされてきたことのあかしになるでしょう。

熱田神宮は古くから「蓬が島」「蓬莱宮」とも呼ばれています。「蓬莱」というのは不老長寿の仙人が住む理想郷のことです。このことから、この地が古くから緑ゆたかであったとが想像できます。

ちなみに、名古屋城のことを「蓬左城」ということがあります。これは、名古屋城が京

都から見て、蓬萊の宮である熱田の左に位置することから生じた呼び名です。

熱田神宮も名古屋城も名古屋の重要な史跡ですが、このふたつには大きなちがいがひとつあります。それは、名古屋城にはお侍がいらない、本来の役割を果たしていないという点です。

熱田神宮にかぎらず、神社やお寺には昔と変わらず神主さんやお坊さんがいて、お参りの人が絶えません。いわば「生きて」いるのです。

熱田神宮の始まり

ご本殿につきました。ちなみに江戸時代までは朱塗りの建物で、場所ももう少し東に建っていました。この場所にこの姿で作られたのは明治時代になってからです。

それでは、熱田神宮の始まりについてお話ししましょう。

時代は第十二代景行天皇の御代に遡ります。今の天皇さまが百二十五代目です。皆さんは自分のおじいさん・おばあさんを知っていますか？それではひいおじいさん・おばあさんはどうですか？そう考えると、どれだけ大昔のことかだいたい想像がつくと思います。

景行天皇さまの息子さんに日本武尊という方がいらっしゃいました。尊さまはお父様の

命を受けて、あちこちへ遠征に出かけられます。

一つの遠征が終わってもまたすぐに次の遠征を命ぜられ、なかなか故郷の大和の国へ帰れません。尊さまは疲れきつて、倭姫命さまのところに立ち寄り、そこで草薙神剣を授けられます。

尊さまは剣の力で難関を切り抜けて見事に目的をはたし、この熱田から南へ十キロほど離れたところにある、大高というところで、この地方を治めていた乎止與命さまの娘さんである宮簀媛命さまと結婚され、やつと幸せな日々を送ることができました。

ところが、伊吹山に悪事をはたらく者がいると聞き、これを懲らしめにいくことになります。

尊さまは、このときは剣はおいで向かわれました。そして、途中で病気にかかり、そのまま亡くなってしまうのです。

残された宮簀媛命さまは、大切な剣をここ熱田の地にお祀りになられました。

それはおよそ千九百年程前のことだと云われています。

これが熱田神宮の始まりです。

草薙神劍について

では、この草薙神劍は、そもそもどういうものなのでしょうか。

時代はもつともつと昔、神代の時代にまで遡ります。

さて、草薙神劍は、乱暴が過ぎて神様の国を追いつた素盞鳴尊さまという神様が、八岐大蛇という巨大な蛇を退治したとき、その体から出たと伝えられる劍です。

素盞鳴尊さまは、天照大神さまという、一番大切な神様の弟に当ります。

草薙神劍は、天照大神さまのお孫さんが、神様の国からこの地上に降りてこられたときに、その証しとして、お持ちになったものです。

そして現在、劍は目の前にある御本殿にお祀りされているのです。

これで、今日のお話はおしまいです。

みんなそろってお参りしましょう。

(愛知県 熱田神宮 宮掌)

自分を信じる

水無瀬 努

私は日々三島郡島本町というところにあります水無瀬神宮でご奉仕を致しております。ここの土地は大阪と京都の境でまだまだ田舎ですが、近年は大阪京都の通勤に便利ということでベットタウンとして発展し、新興住宅やマンションなどが少し目立つようになりました。古来はたいそう風光明媚な土地であったようで、当宮のご祭神「後鳥羽天皇」もこの地に離宮を建立され、歌会や狩、蹴鞠などに興じておられたようです。現在でも北に天王山、南に淀川と多くの自然に囲まれ、この島本町の一般住宅の九割が地下水でまかなわれているほど水の恵が豊富で清らかであり、大阪では水道水をそのまま飲める数少ない地域です。

水に関しては当宮も深い関係があり、境内には大阪府では唯一、環境庁指定の名水「離宮の水」という地下水が湧いており、毎日多くの方が喜んで汲んで帰られます。この水でお米を炊くとおいしい、お茶の味が違うなど、生活に使われる声が多かったのですが、近

年アトピー性皮膚炎が治まった、ぜんそくが楽になったなどの声が聞こえるようになります。医学的なことは私にもよくわからないのですが、「自然にある状態に近い水を体内に入れることにより自分の本来持っている抵抗力を高めているのでは」と考えております。しかし参拝者からは「本当にアトピー性皮膚炎が治るのですか?」「ぜんそくがなおるのですか?」と聞かれる方が多く、あたかも自分以外の何かが自分のことを治してくれる、助けてくれると思えるような発言に聞こえ、少し寂しいといえますが違和感を感じておりません。そんな方々には「確かに様々な病気が治った声はよく耳にしますし、御礼に来られる方も多いです。加工してないよい水を体内に入れることは良い事でしょうが、水が皆さんの体を治しているのではなく、自分自身の本来持った抵抗力を引き出す手助けになっているのだと思いますよ。その大切な体をくれたのは皆さんの両親であり、その両親にも親御さんがいて、それをずっとたどると神代の世界になるのです。あなた自身にもその親御さんから受け継いだ体の中に神様からの血液が流れているのです。水の力に頼る前に自分自身を大切にし、両親を大切にし、感謝する気持ちをお願いして欲しい。そして自分の周りに当たり前のように在る様々な恵み、両親の恵、友人の恵、生命の営みの源、太陽の恵み、水の恵、空気の恵、自分自身を生かしてくれているありとあらゆる恵みに目を向け、感じ

取り、感謝して欲しい。そうすれば必ずや大神様は温かく見守り、導き、力を与えてくれるのです。」とこのようにお答えし、もつと自分自身にある力を感じ、信じていただきたいと話しております。

しかし最近はお自分の力も信じる事が出来ず、多くの恵がある中でそれを感じることが出来ない人が多いようで、新聞やニュースで今まででは考えられないような事件があったことを知ります。親が子供を、子が親を、または子供同士が傷つけあったり本当に悲惨な事件が続いております。私の考えですが自分自身を好きになれない、つまり信じる事ができないのでは、自分を信じられないから他人を信じる事ができない、そんな気がしております。

日本の神話といわれる古事記、日本書紀は八百万と言われるほど多くの神々が存在しております。その神々は全知全能の神ではなく、非常に人間味の在る存在として描かれています。それは日本人の古くからの意識の中に唯一絶対のものを求めるのではなく、多くの人々と協力して何かを成す、そんな意味が込められているのではないのでしょうか。

自分自身全知全能を求めるのではなく、他人に出来ない何か、いわゆる「天命」をもって生まれた存在であり長所も短所もすべて受け入れる。そしてそれは自分だけではなく他人

も同じであり、他人の短所に目をやるのではなく、長所を理解してあげる。自分にある「天命」を理解し他人の「天命」も尊いものと受け止める。そして家族、親族や周りの人々、多くの恵を与えてくれる自然などと共存共栄の元に自分の生活、幸せがあることを知り、日々感謝する気持ちで生活して頂きたい。その根本にあるのが自分を信じることで、自分の存在を肯定できることであろうと思っております。

私も時に感謝する気持ちを忘れ不平不満を口にすることもあるのですが、自分にしか出来ない天命があることを忘れる事無く、自分自身、周りの人々を大切にし、我々を育ててくれている多くの恵に感謝し、日々を過ごして行きたいと思っております。どうぞ皆様も不平不満が出そうなとき、少し周りを見渡してください。そこには多くの恵にあふれ様々なものに生かされている自分自身を見つけることが出来ると思います。そして皆さん一人一人には自分しか出来ない天命が必ずあります。そんな自分自身を大切にし、親から受け継いだ体、神代から続き体内を流れる血を信じてください。そして家族や友人だけでなく自分と同じく天命を持った他人も大切にし、周りの人々との協調の下に自分自身の生活、幸福があることを感じていただければありがたいと思います。

算賀祭について

井手 潔人

今日ここに還暦、古稀、喜寿、傘寿、米寿をお迎えの方おめでとうございます。

さて、平成十四年厚生労働省発表によりますと、日本人の平均寿命が女性は初めて八十五才を越えて八五・二三才になって男性は七八・三三才になったそうです。

今日の六月一日は古い時代から「算賀祭」と言い、日本では人の寿命を加え行く年の区切りを慶び祝う風習がありまして、この祝いを年賀とも算賀とも申すわけでございます。算は年を数える事から年齢を意味します。或いは「賀の祝い」と称することもあります。算賀祭は年賀の祝宴を催すに先立ち、神祇に対して行う奉告祭であります。即ちその過ぎ来し方を顧みて、無事息災を伊奘諾伊奘冉二神並びに産土神に感謝するとともに更にこれから先の長寿安泰を祈請するのであります。

昔から比べるとなんと長生きすようになったものだと思いますが、でも落とし穴があるわけでございます。平均寿命は延びても寝たきりの一人暮らしが多いことと、驚いたこと

には平均六年間は寝たきりだそうですよ。核家族で子供達は家を出て寂しい人生を送っておられるご老人が意外に多いのです。

病気というものは避けられないものもありますが、ほとんどがストレス等精神的なものが多いのです。ですから神社にお参りする人は殆んど元気な方が多いものです。まだまだ長生きして充実した人生を送ってもらいたいものです。

そこで元気な皆さんには大事な役目があるのですよ。何故ならば、大東亜戦争に敗戦しました昭和二十年十二月一日、アメリカ軍GHQにより神道指令が発令されて日本の精神はどうしようもなく衰退しました。終戦の昭和二十年当時二十才の人が現在では七十九才で丁度ここに来ておられる傘寿の人です。

終戦後、学校教育がおざなりになり日本人の大和魂、武士道精神が欠けているわけでございます。しかし外国人は日本のよさを良く知っています。今年話題になった映画「ラストサムライ」ではトム・クルーズ・渡辺謙が武士道精神の奥深さを見事に演じてアメリカで絶賛されたし、フランスのジャック・シラク大統領は日本の相撲の大ファンで、来日の度に見学し日本相撲協会の北の湖理事長も舌を巻くほど詳しいようですよ。ロシアのプーチン大統領は柔道の有段者です。これからもわかるように、外国人は日本のよさが歴

史・文化・精神面で卓越しているのを知っているのです。

ヨーロッパにおいては文化・遺跡・建物を大事にしております。特にイタリアの大都市では何百年昔の建物に今でも住んでおり、外観を変えることは法律で禁止されているのです。

ヨーロッパは石の文化、日本は紙と木の文化ではありますが、その昔のよさを知っている人はここに来ておられる皆さんだけなのです。昔の日本のよさ、日本にも沢山いいところがありながら気がついていない。それどころか昔は軍国主義で悪かった、昔に返ることは戦争に結びつく、戦争が始まる等といっておられる方が多くなつたのです。

皆さんにしか後継者を育てることができないのです。それでは何をやればいいのかといえ、簡単なことからやればいいのです。

皆さんの一番かわいなお孫さんの躰からやればいいのです。自分の子供はもう大きくなり今から躰は難しいと思いますので、おじいちゃんおばあちゃんを慕ってくるお孫さんにしっかりと躰をやってもらいたいと思います。お父さんお母さんは現在仕事、生活に一生懸命です。

ゆとりのあるおじいちゃんおばあちゃんの出番が来ましたよ。

かわいいお孫さんに将来の日本を託すのです。

それはすばらしいことなのです。

現在新しいことがドンドンできてなかなかついていけませんよね。新しいことに挑戦することは大事なことでありますが、「ほんなもん」が、それは昔からの文化、伝統なのです。うわべだけではそこらそんじょにいる人等と一緒になのです。

どうぞ若い人達と積極的に接触して日本のよさをじっくり教えてやって欲しいのです。

そしてすばらしい日本を造って欲しいのです。

そして私達がそれを受け継いで頑張ります。

最後に明治天皇の御製を詠って終わりにします。

『わがくには神のすゑなり

神まつる昔のてぶりわするなよゆめ』

(熊本県 小一領神社 欄宜)

子どもと遊び

中木屋 豊

本日の勸学祭への参加ご苦勞様です。いよいよ入学の時を迎えられ、親子共々喜びで一杯のことでしょう。本当におめでとうございます。

さて、昨今子どもをめぐる痛ましい事件が相次いでいます。子どもが子どもを殺す事件、我が子を虐待したり殺したりする事件も、今や珍しくありません。世の中何時何処からおかしくなったのでしょうか。

実は、昭和四十五年夏、次々子ごろしが起きました。当時九月六日の朝日新聞の社説で、「親から子に、子から孫に生命の流れを伝えてゆく、それが人間の歴史であり、その流れを自分の手で断切る、一種の自殺行為である。そこに人間を駆り立てるのは、狂気としか言いようがない。普通狂気とは理性の喪失を言うが、むしろ本能の喪失に由来しているのではないか。子どもがかわいなのは母性本能、子どもが母を慕うのも本能と信じられてきたが、それも疑わしくなった。教育ママは、子どもに反対給付を期待しているし、無償の愛

が忘れ去られようとしている。切羽詰ったとき子どもはお母さんの変わりに誰を呼べばいいのか、精神的な意味も含めて子殺し、親殺しの系譜は、自分の存在理由さえ見失った人間のうごめく、荒涼たる未来を予見される。」と伝えていきます。まさにそんな状況ではないでしょうか。

高度経済成長が続いていた頃から、物やお金に固執する傾向が蔓延してきました。日本はその時期からおかしくなってきたのではないのでしょうか。

有名大学、有名企業への就職を目指す教育ママは、知能や偏差値ばかりを気にして、勉強だけをしていれば良い、家事の手伝いなどはしなくて良い。そんな風潮でした。

これも古い話ですが、昭和四十三年二月に大阪教育研究所に、「天才児あらわる。二歳十一ヶ月の男の子が漢字二百五十字も読む。」と言うので、ある実験が行なわれました。赤と白のボールを用意して、赤いボールは赤と書いた籠に、白いボールは白と書いた籠に入れると言うものでした。結果は両方の籠に交じってボールは入れられました。「赤」はあかと呼ぶものの、「白」はしろと呼ぶ物でしかなく、色を認識したのではなく、少し物覚えの良い男の子でしかなかったのです。男の子は父親の書いてくれた、漢字帳を首から掛けて毎日覚えたのだそうです。遊びの時も食事の時も離さなかったそうです。

さて本題に入らなくてはなりません、子どもにとって「遊び」とは何になるのでしょうか。おぎゃーと生まれた赤ん坊は、一人で生きて行く術を持ちません。何かと面倒を見なくてはなりません、寝ていない時には、しきりに手足を動かします。それはやがて寝返りを打ったり、ハイハイをしたりするための準備です。そのハイハイも、やがて歩くための準備行動です。これらは親が代わって出来ることではありません。自らの体験でなくてはなりません。やがて、外で遊べるようになります。最初は、母親から離れないという人見知りの状況は、信頼関係ができたことを表わします。そして色々なものに興味を示したり、走ったり跳んだりします。自然のうちに筋力をつけていきます。昼間全身を使った子どもは、疲れて夜早く寝ます。寝る子は育つと言われるように、夜寝ている間に成長ホルモンが出て、本当に育つのです。しかし最近の子どもは、親と一緒に夜遅く寝る習慣が多いそうです。保育園では、そうした子どもは昼食まで持たないで寝るそうです。つまりきちんと、食事もできないのだそうです。小学生にも夜型人間が多く、ボーとした集中力のない児童が増えているそうです。

遊びの発達も、最初の一人遊び、集団の中の一人遊び、集団遊び、組織だった集団遊びの順に変わってきます。そうした遊びを通じて社会性が培われるのです。社会性が育つて

いない、自己中心的な大人も、確実に増えてきていると言われます。ゲームや一人遊びばかりをしてきた結果でしょうか。

「遊ぶ」と言う言葉を考えてみましょう。勤勉な国民にとっては良い響きではありません。しかし、日常的な生活から心身を解放する。別天地に身をゆだねる意。転じて神事・神楽を發して、それに伴う音楽・舞踊・神楽などを指しています。

ではどんな目的で神楽は行なわれるのでしょうか。宮中では、清暑堂の御神楽、これは大嘗祭豊樂殿の節会の後、御一代に一度行なわれます。内侍所御神楽、これは毎年十二月恒例で行なわれます。いずれも天皇陛下の鎮魂を目的に行なわれます。では鎮魂とは何でしょうか。不思議な靈力を、身に付けていただくことなのです。

子どもが遊びを通じて、体力・筋力・社会性を身に付けることと、相通じるものであることを感じます。知的發達は、豊かな感性を育みます。バランス良く健全に育つことを願って勸学祭を終了いたします。

(鹿児島県 稲荷神社 宮司)

伊勢神宮式年遷宮の意識昂揚について

石塚智康

全国八萬の神社の本宗と仰ぐ伊勢の神宮、「何事の居はしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」西行法師が伊勢の神嘗祭に聖域の清々しい厳かな雰囲氣に浸り詠んだ和歌と伝えられています。伊勢の神宮は天照大御神様をお祀りする皇大神宮「内宮」と、豊受大御神様をお祀りする豊受大神宮「外宮」とからなる両正宮と、別宮・摂社・末社・所管社合わせて一二五の神社が付属していて、総称して伊勢神宮となっています。さて神宮には式年遷宮の制度があります。

二十年に一度、正宮神殿は勿論、別宮以下摂社末社所管社の社殿・神宝や装束、橋も鳥居も全部造り替えられ神様に新しい宮殿へお遷り頂くお祭りのことであります。

式年遷宮の制度は天武天皇によって二十年に一度と定められ、第一回の遷宮は持統天皇四年（西暦六九〇年）に斎行され以後一三〇〇年続いています。

最近では第六十一回式年遷宮が平成五年に執り行われました。

建物の耐久年数は二十年よりずっと長いのですが、木が朽ちて美観を損なう前に建築や神宝の工芸技術を次の世代に伝えるためにも二十年に一度が丁度良い年数だそうです。

解体されたご用材は最上の檜ですから古材でもカンナを掛ければ忽ちに香ばしい白木に甦ります。これを全国各地の神社に払い下げられ社殿が建造され何十年も立派に建っている神社もあります。

二十年に一度と言いますと長いように思われますが、正宮の遷宮の後には別宮の遷宮が行われ、従来の社殿の解体もなされます。

次期式年遷宮の初めの祭、山口祭・木本祭は九年前から始まりますし、御用材の選定や技術者の人選等はそれより前に始められるそうです。そして遷宮準備委員会が設立され、いよいよ下準備に入ります。ですから遷宮諸行事の後始末が終ると間もなく次期式年遷宮の準備が始まり二十年はあつという間に巡り来るのです。

一月十九日北白川神宮大宮司様が天皇陛下に拝謁され「次期遷宮のご準備に大宮司以下よろしく」とのお言葉をいただかれ、それに依り遷宮の内容等お伺書（官庁で用る稟議書）をお上げした処、四月五日「御聴許」を賜られました。所謂天皇陛下から決裁、お許しが出たということです。

いよいよ第六十二回神宮式年遷宮は平成二十五年秋の斎行に向かって準備が始まりました。遷宮は皇室第一の重き行事で神宮最大の儀式でもあります。

第五十八回式年遷宮までは国費を以て社殿を造営し遷宮されていたのですが、戦後は国家監理を離れ国民奉賛で式年遷宮が齎行されています。

氏神神社においても、神宮大麻の全戸頒布運動を声大にしている処ですが、幸いに私の奉務神社は毎年全戸お受けいただいて喜んでいますが、特に都市部においては未だ頒布率が低い状態です。これは最近三世代同居家族の減少、核家族の増加と神棚の無い生活や無信仰人の増加、ライフスタイルの変化に依る地元協力の無関心傾向等理由は種々考えられ、対策は難しいのですが、皆様もご家庭でこの神宮大麻全戸頒布のお話をされまして、お知り合い又親戚等の方々にも、神宮大麻を全戸でお受けになられるようにお勧めくださるようお願い申し上げます。

また、神社本庁と伊勢神宮では国民総参宮運動を推奨しています。

我が鳥取県も県下七支部が伊勢参宮団を組織して毎年三月上旬、バスで出かけますので多くのの方々のご参加をお願い申し上げます。

また伊勢神宮新穀感謝祭という神宮での大きなお祭りが十二月上旬行なわれます。

このお祭りは国民総参宮の一つとして、その年の「米」を始め「穀物類」の豊かな実りに感謝申し上げ、皇室の弥栄を願うお祭りです。

近年の急激な世の移り行きは私たちの暮らしの大本であります食生活とその意識にも大きな変化をきたしております。「飽食の時代」という言葉に象徴される物の豊かさの中で食物に対する感謝の気持ちが薄れ、その一方では食糧の自給に対する不安が言われる今日にあって、五穀を始めとする食物の恵みとその限り無い御神恩に感謝の真心を捧げ、「瑞穂の国」と称えられた我が国柄に思いを新たにするとその神宮奉賛、国民総参宮の趣旨の下、年々全国津々浦々から賑々しくお祭りが齋行されております。この感謝祭は、次期式年遷宮の気運を盛り上げると共に、農業の振興という国民精神の昂揚をはかるうえにも極めて重要なお祭りであると捉えています。このお祭りの意義から氏子の皆様にも挙ってお初穂を奉献いただき、誘い会わせてこのお祭りにご参列されて奉賛の喜びを共に感じていただきたいと思います。そして御遷宮が無事齋行出来ますよう皆様と共に気運を盛り上げ、いづれ担当の神職役員が、ご寄附のお願いに上がりますから何分のご理解ご協力をよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

お伽話の意味

熊谷房重

長い時代を経て何百年も生き残って来たものには、理屈ぬきで価値がある。私は基本的に、そう考えている者であります。

そういうものの一つにお伽話もあります。昔から、母親から吾子に、おじいちゃんやおばあちゃんが孫に語り聞かせた「お伽噺」、私は今、このお伽噺の意味を、ちよつと深く考えてみて、お伽噺のすばらしさを見直していきたいと考えているのであります。

今日は、そのお伽話の中で「日本五大お伽噺」と折り紙つきの中の一つ「花咲か爺い」についてお話ししたいと思います。

ちなみに、日本五大お伽話というのは、桃太郎・舌切り雀・猿蟹合戦・かちかち山、そしてこの「花咲か爺い」であります。

御存知の通り「むかしむかしある所にお爺さんとお婆さんが住んでおりました。お爺さんは山へ柴刈りに、お婆さんは川へ洗濯に行きました。」という語り初めになっております。

そのお爺さんとお婆さんが、このお話の主人公であります。子供や孫や、若い者は登場しません。そして、隣の欲深な爺さん婆さんが登場して来ます。つまり、この物語は老人たちのお話なのであります。

「お婆あさんが川で洗濯をしていると、川上から大きな桃がドンブリコ〜と流れて来ました。」ここまでは桃太郎の話と全く同じであります。もつともお伽話は日本全国にいろいろな形で伝えられておりまして、その内容も少しずつ違うところがあります。川上から流れて来たのは桃ではなくて直接、犬であったり、白い子犬であったりします。しかし、古い形のお話では桃になっておりまして、桃から犬が生まれるのであります。

お爺さんとお婆さんは、シロという名を付けて吾子のように可愛いがります。そして、犬の恩返しです。ある日、シロが「おじいさん、私の背中に鞍を付けて、かますと鋏を乗せてわたしの後について来て下さい。」と言います。おじいさんは驚いて、「かわいいお前の背中にどうして鞍など付けらりようか、そして、そんな重い物を乗せらりようか。」とことわります。犬が「どうしても」と言うので、とう〜言う通りにします。そして「ここ掘れワンワン」となるのであります。大判小判がザクザク出て来ます。

その話を聞いて隣の爺さん・婆さんの登場です。この隣の欲深い悪い爺さん・婆さんの

登場によって、この話は急展開をして進んで行きます。そして、犬が殺され、それを埋めた所に差した柳の枝が、やがて大木となり、その木で作った臼が宝物を生み、そして臼が隣の夫婦によって焼かれてしまいます。その灰が花を咲かせるのであります。

善人の老人と、欲深い悪人の老人との、たくましいからみ合いで物語は前向きに進んで行きます。善人の爺さんも、悲しい過去にとらわれず前向き志向でたくましく生きて、悪い事を良い方向に考え、災を転じて福となすよう生きて行きます。これは考えようによっては一人の人間の中にある善意と悪意を描いてみせているようにも思われ、一人の人間の生活の中にある禍福を描いているとも思われます。

それとからんで、犬という動物が命を断たれ、大木という植物に変わり、その植物が切られて臼という生活用具として生かされ、しかも宝物を生み出します。さらに、それが焼かれて無機質の灰となってしまうますが、その灰が最後に見事に、枯木に花を咲かせるのであります。生命の連鎖そして、死と再生という、我が神道のテーマの一つであります。

そして桜の花は、日本人の心に合致した、待ちに待った春を告げる日本の代表的な花であります。

「敷島の大和心を人とはば朝日に匂ふ山桜花」

誰でも知っている本居宣長翁の歌であります。花の美しさ、特に散りぎわの美しさ、潔さを歌ったと言われ「花は桜木、人は武士」などと言われたりします。ただ「花」と言えば桜を意味するように、桜は日本人にとってその心を表わすテーマとして短い時間では語り尽くせないほどの物語を持っております。

この「花咲か爺い」のお伽噺も、枯木に満開の花を咲かせるという強烈なイメージで終わる強いインパクトを持ったお伽話であります。

以上、私はこのお伽話の中で、①老人の生き方、②命のつながり（連鎖）・死と再生、③善と悪とのからみ、④日本人と桜などのテーマを掘り起こして考えてみました。

ところで、先日、うちにやってまいりました五才の孫娘に、このお話をしましたところ、途中で、「犬がものを言うかな。」とつぶやきました。

そもそも、爺さんが犬の言う事を聞いたという所から、この話は急展開をしたのであります。動物の声を聞いたり理解したりして、それが成功のヒントとなる昔話はたくさんあります。そして動物の声を理解するのは老人とか子供が多いようです。若者や壮年の大人は人間世界の事に忙しすぎて動物の声など聞いているひまはありません。老人になったら若い者と同じ次元に立って負けずに頑張ろうなどという事はせずに、ゆつくりと構えて、

若い者には聞こえない動物や植物の声に耳を傾けたいと思います。きっと、神様の声も聞こえてくるにちがいありません。

この花咲か爺のように、動物の声に従ったり、思いがけない不幸をそのまゝ受け入れて、その流れに従って進んで行く。こゝに老人らしさがあり、老人の知恵があるのだと思います。物事を進めて行く原動力を自分の意志に置くのではなく、犬の意志や隣の爺さんの行為の結果などに置いている。こんな我をすてた生き方が神ながらの道にかなない最後にめでたしくとなるのだと思います。

お伽話は、単なる子供のためのお話ではありません。それを語る大人自身の生き方を考えさせられる物語でもあるのです。

本当にお伽話は、豊かな意味あいを持つ私どもの歴史的な宝物でありまして、大いに語り伝えて行かなければならないものだと思います。

(福岡県 八幡古表神社 宮司)

お伊勢さん

西村純子

お伊勢さん、お伊勢さま、伊勢神宮といろいろ親しみのある呼び名ですが、みなさまは何とお呼びしていますか？

正式名称は「神宮」とお呼びします。

皆様ご存知のように、内宮では天照坐皇大御神さまをおまつりし、外宮では豊受大御神さまをおまつりし、両正宮を中心に、別宮、攝社、末社など合わせて、百二十五社のお社からなり、皇室の「御祖神」、日本人の總氏神さまとして、尊ばれ、広く国民に親しまれて、最高に貴いお宮であります。

さて、二十年に一度の「神宮式年遷宮」が執り行われます。それは御社殿、御神宝、御装束に至るまで、新しく造り替え、大御神さまにお遷りいただき、千三百年の伝統があり最高の祭典でございます。

平成五年に第六十一回「神宮式年遷宮」が執り行われ、次回は平成二十五年の第六十二

回の「神宮式年遷宮」となるわけでございます。

それには、今年春より遷宮の準備が始まっています。

わずか限られた時間ですので、何もかも、くわしく掘り下げてお話ができませんが、遷宮までに、色々の祭典、行事がございます。

御造営にあたり、御造営用材を伐採する最初に執り行われる祭儀である「山口祭」から「御木曳行事^{ひき}」、完成した御正殿が建つ御敷地に敷く、白石を奉獻する「お白石持行事」など十八回位の祭典がございます。

私も幸い平成五年の第六十一回「神宮式年遷宮」お白石持行事に、生名八幡神社の總代たちと十名位で「一日神領民」として参加し、ありがたい有意義な体験をさせていただきました。

皆様方も体験できる機会が与えられれば、進んで参加なさることが、素晴らしいです。

さて皆様、神宮大麻、神宮のお札のことですが、全国頒布になって百三十周年を記念し、「いのち清^{さや}かに」というビデオが、平成十四年に製作されました。ご覧になりましたか？

神宮の普段見ることのできない、様子がよくわかります。日別^{ひごと}、朝夕の「大御饌祭」といって、外宮の御饌殿で朝夕二度行う祭りで、先ず忌火^{いみび}を起します。それには堅い木をす

り合わせて火を起すわけで、マッチとか、ライター等使用しません。昔からそっくりそのまま、今日まで続いているわけでして、朝と夕に大御神様にお食事を差し上げるわけです。

神饌は御飯、神酒、魚二種、海菜、野菜、果物、塩、水の九品目で、素焼の土器を使用いたします。

神宮大麻の「大麻」とは本来「おおぬさ」と読み、「ぬさ」とは神々への捧げ物、お祓いの際に用いられる、木綿、麻などのことで、今日でも神社で使われるお祓いの用具を、「大麻」といいます。そこから嚴重なお祓いを経て、授けられるお神札を「大麻」と呼ぶようになったと言われています。

お宅の神棚に神宮の「大麻」と氏神さまの「お札」と崇敬神社の「お札」おまつりしていますか？

氏子の宅へ伺い、ご家族と一緒に神棚をおがんでいる所がビデオに出ています。

見てやって下さい。皆さん一緒に手を合わせましょう。

最後に本居宣長先生のお歌、

「内宮」

たなつもの百の本草もあまてらす

日の大神のめぐみえてこそ

「外宮」

朝よひに物くふごとに豊受の

神のめぐみを思へ世の人

(愛媛県 生名八幡神社 宮司)

日本人の主食に想う

高尾宗嗣

日本の國肇め、天孫降臨の折に、神々が五穀の種子を國造りの使命を受けられた神々に授けられて、「この種子を育てて、稔らせ國を護り繁榮する様に」と仰せられた、と私が子供の頃歴史科目の中で教わったことでした。國肇め頃の現実には知る由も無きことですが、当時の田畑の開拓は並大抵なものでは無く大変な苦勞を重ね、今日とは較べ様もない歳月の結果、緑豊かな田畑が今日に続いております。永い戦乱の歴史にあって各地区の城主である武將達はお互いに領土内の田畑を護る事に心を致し、田畑の作物の成長期、収穫期を避けて戦ったと言われております。

五穀は実に大切であり、特にお米はそれぞれの城下の宝である筈であり、お宝の語源には「田から」戴く大切な主食である事を「寶」と表現されたと言われており、間違ひとは思えない様です。又日本の土地で育まれて今日に至った五穀の米、麥、粟、豆、黍は生れ稔って實を結び、米、麥、粟、豆、黍となり、米は藁を残し、麥粟等それぐに蘇る途を

たどり大地に溶け込んでゆく様ですが、藁は私等が幼い頃より目にして来た多くの人間生活に密着した道具として働き続けております。先ずは御社殿を護る注縄、正月には、飾りとなつて一年の始めを祝い、日常生活の中に現代では見ることは稀ですが雨蓑、私等の地方では「バンドリ」と申します。又荷担き蓑、藁の芯だけを揃えて作る雨避帽、草履、筵、^{かま}吹、縄、深靴など。今は生活形態が変わりましたが幼児の頃育て、貰つた「つうら」や「お櫃つうら」など数多くの道具が生活の助けとなつた歴史には大きな文化があるのでは無いでしょうか？それらの道具は長く活躍し、その任務を終えた時灰となり芽吹く作物の大きな力となつてゆく。

さて、主たる米、麥、粟、豆、黍は重要な食物であることは言うに及びませんが、亜細亜にあつても深く根差している食文化である事は周知の通りです。それぐより生れ出る麴、麴の力で生れる味噌、醤油等多種多様な力を發揮し麥は麥なりな食物となり、豆は萬能な食物に姿を替える。お豆腐に至つては何時の季節にも重要な一品である。黍もその昔から著名な副食物、粟は「名物おこし」としてその名を馳せて今日に至つており、いずれも無駄の無い大地から生れる天與の作物であります。その昔我が國にあつては、殿様の優劣は禄高で定められ、武士の価値は何俵何人扶持と言われ、武家政治の財はお米が重要な

役割を示しております。

明治時代となり世界の交流が深まるにつれて、他國文化の流入により、目覚ましい発展を遂げてまいりました。昭和の大戦后六十年、日本人の主食は消費減少の道に進んでいる様ですが・・・

お米造りの歴史は國の創世から二六六〇余年を經過して、近年の五十年余で食文化がこのような変わるものでありましようか。

日本民族は朝夕に神々様に豊穰を感謝祈願し、家庭にあつては神棚に日々の幸をお祈りし続ける姿が最も大切と信じている民族ではなかったでしょうか。お米は一粒なりと無駄にしてはならないのが私等の経験の中に刻まれた日々でした。天地の恵み、親先祖の恩、多くの人々の力によって作られたお米、苗代作りから八十八の工程を経て実ったのがお米だと言われています。今日では、烏が山ではなくて街で烏公害を起している姿は心外窮まり無きこと、言わねばなりません。世は正に飽食時代と言われ、外食産業の絶大な発展と言われておりますが、そこから発生する食事に對する謙虚さ、感謝報恩の念の薄れ行く世相感拭い切れないものがあるのでは無いでしょうか？昨今捨られる生ゴミの内四〇%以上が立派な食料品、それが街角のゴミ収集所に捨られるとのこと。昭和初期には、今日の

様なゴミの山は見當らなかつた筈だが、未だ遅くは無い。一粒のお米に祈り、藁の文化と先人の偉業に感謝し、一日一日を大切にの思いを忘れない事がこれからの重要な活し方と念じている一人です。

先日或る方の祝宴に招かれて御馳走になり、隣席のお方と話合う内

「大変に様々なご馳走を戴きますがやはり私等は日本人ですね。白い御飯と味噌汁、お漬物を戴くと本当に落着きます。有難いことです。」

と深々と額首こうべを垂れていらつしやいました。

それこそが日本の眞実なのだなとの思いに浸り五穀に感謝の念を深めました。

(富山県 大木白山社 宮司)

お祭りの後で

伊藤ヒサヨ

昨日は相渡八幡宮、本日は皇霊神社・護国神社の年に一度の秋の例祭に、遠く故郷を離れて街で生活されている皆様、崇敬者の皆様、氏子の皆様、多数参拝いただきまして誠に有難うございました。お祭りに当りまして、神社総代様を始め今年は西組神儀世話方御一行様、東組御興興護の皆様方には、色々と御準備くださいまして、盛大にお祭りが斎行できましたことを心より厚くお礼申し上げます。神儀奉納に向けてお盆が終ると同時に、毎週金曜日、土曜日の夕方六時三十分より約三時間、大世話方様を中心に手付役、頭打ち、鉦打ち、大鼓打ち、獅子舞、露弘の猿田彦命全員が、一丸となられましたの取りくみをされ、古く遠い昔から継承されてきた、太鼓と鉦の庭打ち道行き・・・と十九からなる演目、それに合せて、大鼓打ちはトンコロの付いたバイを両手に持ち、優雅に神儀舞を、そして厳肅な中にも激しく飛び跳ねたり、空高くバイを投げる一人舞。今年は新しく挑戦されました小学校二年生と三年生の二名の児童達、先輩の大鼓打ちの方と一緒に一生懸命、精一

杯に舞い飛び跳ねられるお姿を拝見致し、感動し惜しみない拍手を送らせていたゞきました。大変御苦勞様でした。衣裳も昔ながらの黒紋付に袴、黒の鼻緒の下駄は世話方手付役頭打ち、鉦打ち大鼓打は美しい長襦袢を五本のスコキでタスキがけをし、後ろで結んで垂し、金銀五色の紙垂をシャガマの後より垂らします。胸には紋鎧もんよろいを付け、背は大口と云う唐獅子牡丹や虎に竹の絵が美しい縫いししゅうがしてあるものを付け、頭には尾長鶏の尾羽根三百本をつけたシャガマをかむり、手甲をつけワラジをはいております。これら一つ一つがこの地独特な文化であり伝承芸能であります。この神儀は親から子へ、子から孫へと引き継がれて来たものです。近郷の神儀共演会に於いても相渡の神儀は優勝された実績がございます。高い価値あるものと今日参拝された皆様と共に再確認するところであります。神儀は本日より東組神儀世話方御一行様へとバトンタッチされました。「ヨーシッ！やるぞ！」との意気込みが伝って参ります。昔のままの文化伝承芸能を守り継ぐことは、大変な事で課題も多々ある訳でございますが、どうぞ相渡氏子総力をあげお守りをし、来年度の例祭は十一月十日に近い土曜日と日曜日でございます。この境内一杯に神儀奉納賜わりますよう御期待申し上げると共に、お世話に成りますが宜敷く御願致します。

さて、私達の先祖が神様のお祭りを続けてこられました事を考えますと一つには、自然

に對する畏敬の念から自然神信仰がございます。二つには、自分の生命が両親を通して結ばれているご先祖の靈に對する祖靈信仰であり、天地自然の神に對する感謝の心、両親を通してつながる祖先に對する感謝の心は、常に祈り祭る心から出てくるものであります。身近かなご家庭におかれましてはどうしたら良いでしょう。師走十二月お清めに全戸お伺いさせていたゞいていますが、どのご家庭にも立派な神棚をおまつりしてあります。朝コップ一杯のお水を向って左にお供えして下さい。カワラケイやお皿で結構です。一つまみのお塩を右にお供えいたゞきましょう。ご飯は一番最初の一盛をお水とお塩の後にお供えし、感謝の心で神前に向ってお祈りいたゞきましょう。お供えは神様のお食事です。日々健康に暮らせる事を感謝し、自分自身が美味しいと思う物をお供えし、又それをいたゞくことにより一層のお陰をいたゞくことが出来るのです。毎月一日や家族の誕生日、亡くなられた命日等にはお酒をお供えしたり、家庭菜園で採れた初物や、お土産にいたゞいた珍らしいもの等をお供えいたゞきましょう。朝、神様と對話しましょう。夜寝る前にも對話出来たら最高です。

神は人の敬によりて威を増し

人は神の徳によりて運を添ふ

私の大好きな句です。御成敗式目の中にあります。これからも相渡八幡宮、皇霊神社・護国神社の護持発展のため、いろいろとお世話に成りますが、どうぞ宜敷くお願い申し上げます。

本日は誠に有難うございました。

(広島県 相渡八幡宮 禰宜)

還暦を迎えて

武智輝子

今日も又歩き遍路の人に道を教えてあげました。氏子内に五十二番札所太山寺、五十三番札所円明寺があります。一昨年位から特に若者の歩き遍路の方によく出会います。学生さん、フリーターか、それともリストラに遭った方でしょうか。日本経済の後退、テレビ新聞等で報道されるイラク戦争、非人道的な拉致事件等、混沌とした今の世相に心の癒しを求めているのでしょうか。霊場の線香、ろうそくの煙は、雨が降っても消えることはありません。新しい物を求め、古い物を容赦なく捨てていく現代社会に相反するように思います。

さて、私事ですが、今年還暦を迎えました。数年前より長男家族と同居致しまして、これからは、旅行や、余裕を持って祭祀にいそしめると思っておりますが、急に主人が病気で亡くなりました。長男は今の所、勤めを辞めるつもりがなく、四月に新しい責任役員さんの就任を待って、私が宮司になりました。土、日曜日は、長男、二男が手伝ってくれ

ますが、普段は私がやらざるを得なくなりました。今迄は主人が神社を専業でやっており
ました。私はただ境内の掃除、直会の準備だけをしておりました。祝詞は主人の祝詞に仮
名を付けて読んでおりましたが、これではいけないと思い、六十の手習でお習字を習い始
めました。祭式の研修会も進んで出席するようになりました。人前に出て話す事が、大の
苦手なので、御祈祷、小中学生の故里探検、松山市の歴史巡り等、その度に冷汗をかいて
おります。子供達は、お母さん、あと二十年はがんばってと言っておりますが。

サラリーマンの一家庭より嫁ぎ来て、三十八年、義母を看取り、今迄仕事一途だったの
で趣味でも始めながら老後を送りたいと思っておりました。でも神様は、なか／＼私の思
い通りにはさせてはくれません。振り返ってあつと言う間の六十年でした。還暦とは、字
の如く元に戻りスタートという事です。

総代さんの御協力を得ながら、初心に還り、神様に奉仕を誓う今日この頃です。

俳句の町、松山から来ましたので

一句

「遙か来て 神話の国の 蟬しぐれ」

戦いの神

村田佳子

二〇〇〇年九月十一日にアメリカで起こった同時多発テロ事件、発生から二年以上の時を経て、今なお記憶に新しいことです。マスコミが特別番組を放映すると、殆どの場合、ニューヨークの世界貿易センタービルに飛行機が飛び込んでゆく様を見る事が出来ます。あの映像は何度見ても本当に衝撃的で、言葉にならない悲しみを覚えます。先日も病院の待ち合い室でテレビを見ていた折、ツインタワーに飛び込んでゆく映像が流れました。すると、隣に座って居られた大正生まれだという老人がこう述べられました。「ああやって、自分が燃料を持って、飛び込んで行く。みんな日本がした事のマネだなあ。」と。あの悲惨な事件、その攻撃の方法が、かつて日本がアメリカと戦争をした時のマネなのだろうか。しばらくはショックで何も考えられませんでした。しかし、改めて思うと「それは少し違う気がします。」と言えた気がします。日本人は決して、民間の飛行機を奪いとって、一緒に乗っている民間人もろとも、民間人のいるビルにつっ込んで行ったりはしませんでした。

戦闘員以外の普通の人達を皆殺しにしても平氣という感情は、持ち合わせていなかったはずです。

そう考えた時、現在中東で起こっている戦争が何かと考えずには居られませんでした。この戦争は、けして、一つの事が原因となつて起こつたものではありません。宗教的理由だけに限定して述べる事が、いかに危険であるか、理解した上で、今回は敢えて、宗教の例から考えてみたいのです。

この戦争が仮に、キリスト教とイスラームとの間のものであるとしたら、果たしてそれぞれの「神」は、戦争によつて同じ人間を容赦なく殺すという行為を許しているのでしょうか。この問題を考えます時、丁度『平和と宗教』という雑誌の二〇〇三年度No.二十二に「宗教にとって人を殺してよい正義はあるか」という特集に出会う事が出来ました。私自身、神道を学びはじめたばかりで、他の宗教に関しては一般的な知識しか持つておらず、この特集は非常にわかりやすく勉強になりました。

まずキリスト教ですが、坂本堯先生によれば、「カトリックの創立者、イエス・キリストは人類に平和をもたらし、殺人をなくすために平和の宗教を説き、武器を取ることを弟子に禁じた。初代教会の信者はその教えに忠実に従い、敵を許し、殉教の道を選んだ。し

かし、カトリックがローマ帝国の皇帝から信仰され、国教となると事態は一変し、異端異教を迫害し、ついに十字軍という征服戦争を自ら始めるにいたった”とあり、また“ローマ教皇アレキサンデル二世でイスラームに対して戦うものにすべての罪の赦しを布告した”
“ローマ教皇ウルバヌス二世は、聖地に向かう第一・十字軍出征者に対しクレルモンで十字軍大勅書を渙発して、罪の赦しの約束で多くの兵士を召集した”とあります。

これによって、キリスト教徒は、殺人を犯しても、ことにイスラームの人を殺しても、神に許されているはずだから平気という事になったようなのです。

一方、イスラームについてですが、私は中学生の頃、まだイスラームとは言わず、イスラム教と言っていました。が、授業の中で創始者であるマホメットは、右手に短刀、左手にコーランを持って布教してまわったのだと教えられました。つまり、イスラームの教えを信じない者は、殺す。ものすごい宗教だ、危険だ、と思ったものです。しかし、これはイスラームの一極面を教えられていたにすぎなかったのです。先生が学校で教えて下さる事は、確かな事ではありますが、「本当かな？」と思って、自分で探求する事の方がもっと重要であると思ひ知らされる思ひです。

イスラームについて、黒田壽郎先生はこう述べておられます。 “米国における同時多発

テロ事件以来、一部のイスラーム世界と外部の世界との間には国際的な軋轢が生じ、その点をめぐって明白な誤解を背景にした論議が展開されている。すこぶる政治的な出来事が、宗教的な問題と絡めて論議され、その誤解が解かれぬままの状態で、政治的な事件だけが急速な勢いで進行している。“また「ジハード」という語の本来の意味は、神の道に関わる（聖なる努力）」というものであり、宗教的義務の遂行をはじめとして、イスラームの維持、発展と関わるあらゆる事柄に対する努力を指し、中でもとりわけ重要であり困難なのは、自分の怠惰な心を戒める精神的な努力である。このジハードの一つの例に過ぎない外敵との戦いだけが誇張され”とされています。イスラームもまた、他を排除するだけではないのです。どの宗教を見ても「神」そのものが戦争を好むという事はまずありえないのです。何故なら「神」は人々の幸せを願うはずだからです。ただ、イスラームとキリスト教は唯一の「神」を信仰しなさいと神自身がおっしゃっている事、また、パレスチナという同じ地を聖地として最も重要な場所として捉えている事から、それらを信仰する人達がお互いを認め合うという精神を持つ事が難しいのです。

そこで大切な事に気がきます。私達の日本、この国の「神様」の考え方はどうでしょう。昨日の記念講演の折、千家和比古権宮司様からも貴重なお話をいただきました。『日本の

国のはじまりは、天津神と国津神との間で国譲りが行われた。それはけして戦い、殺し合うのではなく、平和的な話し合いによつて国譲りが行われた。”

何という幸せでしょう。日本の国のはじまりから、世界に誇る素晴らしい考え方を持っていたという事なのです。唯一の神を信じるキリスト教やイスラームは、最後の一人がいなくなるまで、敵を皆殺しにしてしまうかもしれない。しかし日本の国の“神様達”、八百万の神様は違った。この神様達からいただいた尊い精神は、戦国時代、武士の戦いにも見る事が出来るでしょう。何か問題が起きた時、大将同士の話し合いで、平和的な解決をする事が出来ます。また、どうしてもうまく話がつかず、戦いになった時は、その優劣がはっきりした時、大将や主だった人がその家臣達にかわり、全部の責任をとる事でことがおさまるのです。そしてまた、負けた方の武將を軽んずるという事をしませんでした。

私達日本人は神代から伝わる素晴らしい精神を持っています。自分以外の相手をうやまうというこの心を、世界の国の人々に伝えてゆくのも、やはり私達日本人の使命と思えてならないのです。

皆さん、世界の国の平和を実現出来るのは、この素晴らしい神様達の子として生まれた私達自身である事を、もつともつと自覚しようではありませんか。

(広島県 長束神社 権禰宜)

眞の祈り

牟禮照子

皆さん、二十世紀の後半に入つて、光より速く走る物質が発見された事を、ご存知ですか？。それを発見した人は、科学者ではありません。一人の信仰深き、市井の人でした。彼は、「このまゝでは、地球が減じる！。何とかして人類を救いたい！」と云う、厚い想いが、眞の祈りとなつて、神の啓示を受け、発見されました。光は一秒間に三十万km、地球を七廻り半しますが、その光より速く走る物質、それは、超光速粒子、タキオン、と云います。光より速く走る粒子が存在しますと、その粒子を使つて、宇宙の彼方にいる、知的生物と、殆んど瞬時に交信する事が出来るそうです。その粒子は、地球を取りまく大氣中を走るうちに、持っていた（一）^{エネルギー}のエネルギーを失つて、我々の常識に反して、速度が、ますます速く／＼なつて、大氣圏を脱出する時には、粒子は自分の持っているエネルギーを失つて無限大の速度となつて走つて行くそうです。無限大の速度で走る粒子には、時間は存在しませんから、超光速粒子は、宇宙の彼方の星に瞬時に到達するそうです。夢の様な

話ですが、これは正に、新しい科学であり、空間科学の分野として、SF的世界の実現として注目されています。夜空に煌めくスバル星座は、二千億の星があるそうですが、目に見えるのは、八千個です。大宇宙には、数千億の星がありますが、宇宙の主役は星ではありません。空間なのです。そしてその空間は真空であり、エネルギーが充満しております。これを宇宙エネルギーと云います。宇宙には、意識があり、宇宙空間には、或る種のエネルギーがあります。エネルギーは空間より補給されます。タキオンとは、この空間にある素粒子であり、無限大のエネルギー、であります。空間とは、空、であり、正に宗教で云う、空の世界であります。神様とは、どうゆう存在かと科学的に説明しますと、宇宙エネルギー、と答えられる方もおられると思います。神様を信じない階級の方々も、宇宙エネルギーだと申せばご納得、頂けるかと思ひます。人間は、心と体の二重構造によって、構成されておりますが、タキオンエネルギーこそ、四次元の世界を科学的に証明出来る、宇宙エネルギーなのです。タキオンエネルギーは無限の速さを持つ波動であり、私共が自然を見て美しさを感じるのも、宇宙の波動、つまり、ゆらぎがあるからで、又、生命にも波動（ゆらぎ）があります。何にでも波動があり、大きな変化は、ゆったりした波動、小さな変化は、小さき波動的な波動によって変化します。人体にも波動があります。宇宙にも大きな

な波動があります。人体は小宇宙であります。波動が変わると味覚も変わります。祈りも波動であり、真の祈りは、大きな波動となつて広がります。タキオン、それは、靈界にも通じる無限のエネルギーの波動であり、共鳴体であり、宇宙エネルギーと共鳴し、種々な宇宙の物質と共鳴出来ることを、理性として、理解することが出来る、超光速粒子であり、タキオン加工によつて、種々な製品に利用される様になりました。あらゆるエネルギーに共鳴し生命力を強め、自然治癒力、免疫力を増大していますが、私の云い度い事は、オリオン・ユースー、と云う一人の人の、真の祈りが、宇宙エネルギーに共鳴して、神は扉を開かれ、無限の慧智を人類に、授けて下さったのだと思います。無私になつて、真の祈りを捧げましょう。その波動が、宇宙エネルギーに、共鳴した時、神は大いなる恵となつて、無限のエネルギーを授けて下さいます。宇宙の扉をたたきましょう！、二十一世紀は、見えない世界を、未知の世界を科学的に證明することを可能にしてくれる時代に入りました。不可能を可能にする時代が拓かれて来たのです。真の祈りを捧げ、無私になつて、祈る時古代から連綿として受けつがれている神様の想いを感じる事が、出来る事でしよう。

(長野県 富士浅間神社 欄宜)

全員参加の楽しい地鎮祭

日下雅史

地鎮祭につきましては、主に一般住宅その他各種の建物の新築・増築の起工に際して土地の氏神様・敷地の守護神の神慮を和め、住む人の安全、工事に関わる人々の安全の祈願を目的としている事は言うまでもありません。

しかし、小さな子供を連れた若いご夫婦の方々の祈願を受ける事が多いのですが、地鎮祭は工事の安全、建築後の家内安全を祈願する事は、ほとんどの方は分かっておられるのですが、土地の神様に「この処を住居用にご利用したいので宜しくお願いします。」と承諾を得て土地の神様にお鎮まり願う儀式である事をご存知でない方が意外にいらつしやいます。その時は、祭典前に特に子供に対して「これから、この土地の神さまに家を建てさせて貰う事をお願いして、工事をする人に怪我も無く、新しい家で楽しく暮らして行ける様にお願ひするから、祭りの間、時々、お手伝いをしてくれますか。」と言う様にしております。

次第につきましては、修祓・降神・献饌・祝詞奏上・清祓・穿初め・鎮物・玉串奉奠・

撤饌・昇神・直会と巷で行われているのとはほぼ同じであります。一般住宅の建築や増築がほとんどである為、全員が気軽に参加し、厳肅な雰囲気の中にも時には気分がほぐれる様な地鎮祭を心掛けて参りました。

古い屋敷を壊して、同じ土地に新築の家を建てる場合にある事ですが、祭典の日にその場所に向った時に、そこは既にさら地になっているので「以前使っていた便所・風呂・井戸・池の跡等をつぶした時に、御霊あげのお祭りをしましたか。」と聞くと、「していません。」という答えが返って来る事があります。

しかし、井戸を例にとりますと、昔から人々の住む所には水が必要であり、水が無ければ生きて行く事が出来ませんし、農作物にも影響します。そこで井戸を掘るなどして日常生活に欠かす事の出来ない水を確保していたと思います。神道に於いては、自然の物（山・海・川・谷・木・岩等々）を神様として祀っていたので、井戸には水の神様、いわゆる水神さまがおいでになり、この水神さんの宿っている井戸のお蔭で長い年月に於いて、大切な役割を担い、住む家の人々に尊いご加護をもたらしたのです。しかし、これを何の断りもなく、何の感謝もなく埋めてしまつては、建築後の家内安全を願える筈ありません。

これは井戸に限らず、便所等についても同じ事だと思えます。本当の意味で「清浄」な土地にする為に、祭りの前には必ず以前の土地の状況について尋ねる事にしております。

子供達に、お手伝いの依頼をしましたが、どの行事に参加して貰うかといいますと、清祓・穿初め・玉串奉奠であります。清祓では、建設会社の責任者と一緒に、酒・塩・切麻等で、四方と中央を、又、元の屋敷をとり壊した場合であれば、便所・風呂・井戸・池の跡等があった所も、「祓へ給へ 清め給へ」と声をかけて清めて廻ります。続いての穿初め（仕事始め）の行事も施主・建設会社の代表者に続き、家族全員に行って貰います。小さなお子さんには両親と共に、小学生位の子供になりますと一人で貰いますが、最初はとても照れながらも喜んで掘っているのを両親や祖父母らが笑みを浮かべながらご覧になっておられます。玉串奉奠におきましては、自分からしたがる子もいれば、恐くて出来ないという子もいます。だいたいにおいては、両親又は祖父母と一緒に拝礼して貰っています。

何故、大人だけに限らず子供にも色々とお願いをするかといいますと、家族の一員として色々な所に宿っておられる神さまにお願いしているのだ。私も立派な家を建てるお手伝いをしているのだという自覚（とまでは言えませんが）を持ってもらいたい事と、二・三

歳位になりますと、自我も芽生え、物事にも興味を示し、「自分で、自分で。」とか、「〇〇もしたい。」と言つて何でもしたがる様にも（十人十色ですが。）なります。些細な事です、一つ一つある種の「経験」をさせ、心の片隅に残して貰いたい事。日々の生活を通じて神様・佛様に対して手を合わす、感謝をするといった事をして頂きたいのです。

神社や寺院へ行けば、拍手をしたり手を合わす事はどなたでもする事です、日々、家で神様・佛様に手を合わせるといふ事は、案外していない様に見受けられます。

人間は母親のお腹の中から生まれて来ますが、性別・いつ授かるかといった事等々、母も子もコントロール出来る訳ではありません。

自分の周りのあらゆる神様・佛様・先祖代々の皆様・周囲のあらゆる自然の物等のご加護があつて生かされているのだという気持ちを少しでも多く持つてもらえればと思います。色々な事を人々に伝える事により、逆に自分自身にも戒めていき、人の為に役立つ神職になりたいと思っています。

（広島県 白鳩神社 禰宜）

我が家の子供教育

稲葉政信

子供って可愛いですよ。親御さんなら皆、自分のお子さんをそのようにいとおしく思っていることと思います。でも、子育てで大変ですよ。何とか自分の子供を良い子に育てたい、これは全ての親の願いだと思います。この良い子とは、いろんな意味があると思いますが、大きく二つに大別できると思います。一つは勉強や運動ができる学業成績優秀な子、もう一つは人としての正しい行動ができる道徳観念の備わった子かと思っています。親としてみれば両方が備わったパーフェクトな子供にならないことを夢みることでしょう。

私は、子（九歳・六歳・四歳・〇歳）を持つ一人の親（一人の教育者）として家庭では道徳教育に特に力を入れております。皆さんの御家庭どこでもそうだと思うのですが、家では次のようなサイクルで一日が駆け抜けていきます。まず朝起きたら、おはようございますの挨拶、次に洗顔、次に着替え（このとき寝巻きはたんで決められた場所に保管）、そして全員で神棚に手を合わせ神様に感謝の気持と今日も一日無事に過ごせるようお願い

を申し上げ忙しい朝食後、各自の登園・登校・出勤時間に合わせて行つてらっしゃい、行つてきますの挨拶で一旦全員が散り、夕方帰つてきて、ただいまお帰りなさいの挨拶で再会して、子供達はまずは翌日の準備（宿題・時間割・持ち物・着替え）をさせてから各自の自由時間、その後お風呂、夕食の手伝いへと進み、一家団欒での夕食はいただきますの大きな声が始まり、子供達の今日の出来事を酒の肴にしてゆつくり食事を取ります。食事は皆一緒にご馳走様で終わり、消灯時間が来ると歯を磨いてお休みなさいで一日が終わります。これが、我が家の一日のサイクルです。これらのサイクルを親が何も言わなくてもできるよう、毎日繰り返して指導をしています。実際のところは子供がぐずったり、決められた事をしなかったりして、その度に子供を叱り、格闘状態の毎日です。

我が家は結構、規律に対しては妥協することなく、子供が何を言おうと我が家の規範に強制的に軌道修正させます。強制的にと言っても、最初は優しく、叱り方は徐々にステツプアップしていきます。まずは警告（〇〇が△△のままだよ）、次に注意（〇〇が△△のままだよ、□□しなさい）、次に声のトーンを段階的に上げていき、それでも効かない場合は最後に拳骨です。各御家庭において、親は絶対に手を上げないとか、分かるまで話をして理解させる等、様々な教育方法がおりかと思ひます。しかし、我が家では、正しい行動

に修正するのに口で言って分かなければ、痛みを与えて分からせます。我が家のような強制的教育指導方法は、現在の親御さんの中には賛否両論いろんな意見があると思いますが、私はこの指導法でないと、道徳観念形成中の言わば未熟な子供達への道徳の埋め込みはできないと思っています。道徳観念の出来上がっている大人と呼ばれる人達に対しては、理屈で説明すれば納得し行動に移してもらえるでしょう。しかし、道徳観念形成中で正しい考え方が脳にインプットされていない子供達に対しては、言葉の上での説明だけではそのときは納得したように見えても、また同じ過ちを犯すケースが多々あるうと思っています。もっと悪い場合は子供の方が文句を言い、反抗するケースだってあるでしょう。そのようなケースの場合は、悪い事をしたんだという思いを愛の鞭を通して体感させるのが本当の愛情だと思います。鉄は熱い打ちに打てと申しますが、子供の教育こそ、リアルタイムでより真剣な対応が求められると思います。

現代社会では、子供を殴れば虐待とか、厳しすぎると封建的で優しさが足りないとか、非難されるケースが多々あるかと思いますが、このような強制的教育方法は、戦前では当たり前だったと聞いています。戦前のこうした教育から、縦社会の構造が自然と生まれ、目上の者には配慮し祖先を尊び親に感謝する気持ちが生まれ、時には叱られながら行動を

補正するという訓練を受けることにより、直ぐにはへこまない粘りがある打たれ強い子供へと成長し、己の主張よりも全体の調和が取れる人間に、権利よりも義務をまっとうする大人へと人格が形成され、結果として世界にも誇れる美しい精神構造（謙虚な心）を持つ日本民族になつていったのだと思います。

しかし、敗戦で憲法が改正され、全体の調和よりも自己の主張を大切にすると道徳観念が導入されると、いつしか日本人は、義務よりも権利を主張する人ばかりになつてきたように思います。憲法改正により、個人の自由が叫ばれるようになり、この自由を己の権利の爲だったら人に分かなければ何をして良いだろう、もっと悪い場合は、大衆の面前でもどうどうと己流のルールを勝手に作り、己の権利を主張する大人が増えたのが、悲劇の初潮だと思います。そして、こういう大人達を見て、当然子供は大きくなる訳で、その影響が子供達にまで及んだのが最大の悲劇でしょう。こうなると、時代は繰り返すので、その子供が大人になれば、そのまた子供だって同じ道徳観念を持つことでしょう。これが、戦後の社会環境・家庭教育の結果（産物）、今の日本の現状です。この社会現象は、明らかに敗戦後の憲法改正が引き金となつてゐると思います。日本は敗戦を契機に、物質面では豊かになつたものの精神面では墮落してしまつたように思います。どうぞ、一人でも多く

の親御さんにこの現状に気づいて頂き、清浄な美しい道徳観念のある日本民族（子供達）を取り戻すべく、これからの日本が良くなるよう家庭教育のあり方をもう一度見つめ直して頂きたいと思います。原点は家庭にあります。どの家庭においても規律ある子供の教育が実行できたなら、学校は地域は日本はきつと良くなるでしょう。どうか、忙しい毎日の連続かとは思いますが、重い腰をちよつと上げて頂いて、お子さんを通して我々も聡明な心を取り戻せるようがんばりましょう。

（山梨県 賀茂神社 欄宜）

二十四時間年中夢中

芦原大記

私は去年の四月に椿大神社に奉職したばかりの新米神主でございます。私はこの一年間様々な事を学ばせていただきました。境内・参道の掃除の仕方から祭典準備、祭典奉仕、御祈祷、参拝者とのふれあい、そしていかに先輩神職さんを楽しませるか、等々。中でも特に私が一番成長したと自分自身思えることは毎朝の掃除、月二回のみそぎ修法会を通じて「すがすがしい」という心が身についたということです。初めは学生時の甘えから長い参道を掃除することは大変なことでした。何故下っぱばかりが掃除しなければいけないんだと正直思っております。しかし、月が経つにつれ、何か不思議な気持ちよさを覚えるようになりました。又みそぎにおいても初めは冷たい水にあたることは大変苦痛でした。しかしこれも掃除の後と同様に不思議な気持ちよさを感じるようになりました。この不思議な感覚について上司に聞いてみたところ、それが神道でいう「すがすがしい」という心であると教えていただきました。この「すがすがしい」という心を持てたということは小

さな事かも知れませんが私にとって大きな成長につながったと思います。

この「すがすがしく」感じる時は、身の周りに沢山あると思います。例えば、汚れた紙垂を全てつけ替えた時、風呂に入って汗と疲れを洗い流した時、春の桜花満開の時、梅雨の大雨が大地を祓い清めてからつとした夏がやってきた時、一生懸命何かをやりとげた時、私はこんなすがすがしさに出会った時、必ず心からわきでるものがあります。それは前に進もうとする活力、明るく若々しいエネルギーの様なもの、つまり元気です。私たち日本人は自然と心からすがすがしさを感じた時に元気の素を神様からいただけるといふ尊い民族であるのです。

しかし今の日本人は元気がありません。現に五年連続して三万人以上の自殺者を出しております。今の日本人に必要なのは「すがすがしさ」ではないでしょうか、又は「清々しい」と素直に思える清浄正直の心ではないでしょうか。

皆様ご存知であると思いますが「古事記」「日本書紀」の中にでてくる神代の時代、スサノヲノミコトが高天原で様々な罪を犯され、そこを追放されてここ出雲の国に降りられます。そして八咫の大蛇を退治された時に得た草薙の剣を天照大神に献上され、自ら改心されました。そして再び天降られ、クシナダヒメとお住まいになる出雲の須賀という土地を

すがすがしく思え、「我が御心清々し」とおっしゃいました。これは誰でも自分は正しいと思つていても氣付かぬところに誤りがあつたり、心のゆるみが起こつたりします。それは不自然な姿で災の基であるから、それをツミ・ケガレとして祓い除き、本来の姿に立ち帰るよう努力すべきであると物語つていると思います。つまり心身共に祓い清めた後、最後にやつてくるのがこのすがすがしい心なのです。そしてそれは新たな出発であります。

今日日本人は忘れていた先ず自らを祓い清め清浄正直の心を持ち、日本人の本来の姿である清く明るく正しい姿に立ち帰る必要があります。そしてそれを大事に受け継いでいかなければなりません。そんな心が日本人の多くの人々がもてる様になるなら、それはすばらしい日本が再びよみがえることになり、皆が自国を愛する事ができるようになるのではないのでしょうか。

一人の神職として何ができるかと考えた時、神社をお守りする身として何ができるかと考えた時、それは原点に帰り神事優先はもちろんのこと、参道・境内を掃除することであると思います。参拝者が手水で心身を清め、そしてきれいに掃除がいきとどいた参道を歩いた時、洗心される様、参拝者の先頭にたつて祓い清めを實踐していくことがすばらしい教化につながると思います。

日本人の心にはまだ種があります。すがすがしく素直に思える心の種がまだあるのです。その種が発芽して成長してすばらしい花を咲かせる様、私は二十四時間年中夢中で御奉仕申し上げます。

皆様が笑顔を忘れることなく、いつもすがすがしい気持ちで過ごせます様、ご祈念申し上げます。

(三重県 椿大神社 権禰宜)

水神祭（子供祭）を終えて

白澤徹也

皆さんお早うございます。保護者の皆様方も何かとご苦労さまでした。

さてたゞ今はみんな上手にお祭りができました。特に太鼓を叩いてくれた吉野君、玉串を差しあげて皆さんの代表を務めた東方くん、そしてそれに合わせて上手に二礼、二拍手、一礼で神様を拜んだみんなも大変立派にできました。今日は年に一度の水神祭で、このようにお祭りをして神様にお礼を言ったり、お願いごとをしたりしましたが、これからもお社の前を通ったり、遊んだりする時は今日と同じように二礼二拍手一礼の作法で拜んでいってほしいと思います。

この水神祭は君たちのおじいちゃんのものまたおじいちゃんの頃から続いていると言われています。上級生はわかると思いますが、今から約二百年前、江戸時代の後期の頃から始まったということです。正確には文化、文政の時代から――これは今の平成とか昭和とかいう年号のことですが――その頃からやはり子供まつりとして行われていたようで、今はこ

の五月五日の子供の日が当てられています、昔は六月の田植の終った頃に、暑くなつてそろそろ水遊びが始まる頃に今のように水難防止と三隅川に大水が出ないことを願つて行われていたそうです。保護者の皆さんは記憶に残っていると思いますが、昭和五十八年の水害は実に大変なものでした。この町の中ではあの時に残った家はほぼ半分くらいで大勢の人々も亡くなりました。実は私の少年時代、昭和十八年にも同じ規模の災害がありました。古老たちの話によればずっと昔からこのような災害が続いていたことがこの水神祭に繋がっているのだということでした。

今は川幅も広げられ、堤防も頑丈に作られたので心配ないと思われませんが、みんながいつも力を合わせて行うこの水神祭の神様のご加護をいただいてどうか水害が起きないように、また魚がたくさんとれて楽しく遊べるように、そして溺れたりしないようにと願つたわけです。

さて、ちよつと話が飛びますが、去年からイラク戦争が始まつて、イラク地方の映像を見る機会が大変多くなりました。幸いにも今は少々落ち着いて来たようですが、君たちはあの国の地形を見てどんなことを感じましたか。戦いの場所は勿論で、一般の町並みや道路も日本とずいぶん違っていましたね。家々はみんな石造りかコンクリート造り、道路は

車の通った後は砂ぼこりだらけ——これは全てあの地が乾燥している証拠です。日本から派遣された自衛隊の任務の一つに水の補給がありました。外国から水を貰わなければならぬいほどにあの国は水が欠乏しているのです。あのあたり一帯を中東地域と呼びますが、このことはイラクだけでなく他の国もほぼ同様です。ヨーロッパでも飲み水を売っているところがあります。お隣の中国でも所によっては同じです。海外へ旅行する日本人が多くなりましたが、みんな水を買うということに驚いています。

日本ではどうでしょう。お金を出して水を買うなど考えられないことです。もともと今頃はおいしい水、良質の水と言って特別な天然水を販売しているお店もありますが、調理の水やらお風呂の水など一般的に使う水を買うことなどまず想像のできないことです。それどころか「湯水のように浪費する」ということわざがあるくらいに、日本ではあり余るほど水に恵まれています。日本の国は昔から瑞穂の国と言って米を作る水田が中心の国でした。また石造り、コンクリート造りの家と違って日本の風土に合致した木造りの家も、心安らぐさわやかな住まいですが、これとて水に恵まれて育った山々の木々を利用した家屋です。最近は海に流れ込む水の質によって魚の育ち方が違うことも見つかってきました。私たちの生活の一番の大元は水にあると言っても言い過ぎではありません。

このことを考えますと水に感謝するということは大変すばらしい心がけだと言えます。うっかりすると水のありがたさに気付くことを忘れますが、今日の水神祭を通してまたみんな水に感謝することも思い出してみたいものです。このことは私たちがどれほど恵まれた国に住んでいるか、日本の国は世界の中でどんなに美しい国かということを教えてください。

今は水道の蛇口をひねればザーと水が出てきますが、私の子供の頃は井戸から汲んでくるか、山水を利用するか、どちらかでした。あの頃の父の戒めをよく憶えています。「顔を洗った水を捨てないように。」次にその水は「廊下や板間の拭き掃除に使うように。」そしてこの水も捨てないで、「玄関の打ち水に使いなさい。残った水は植木にやりなさい。」私は水の使い方を通して物を大切にすることを知っていったような気がします。みんなもこの水神祭を通じて日頃うっかりしている水のありがたさ、尊さを思い出し、日本の国のすばらしさ、そこに住む友達のありがたさを忘れないでほしいと念じています。

(島根県 三隅神社 宮司)

神代の時代むかしのジエンダーフリー

秦 和憲

日本で最初に登場される神様は皆「独神」ひらがみでした。男女の結合によって御子神を生むのではなく、男でも女でもない性を超越した存在であり、なのに生成の力に満ちあふれた神々です。

ということは、今日フェミニストが叫ぶ男性・女性という性を飛び越えたジエンダーフリーだったということなのでしょう。

別天神から神代七世の最初の二代までは、まさに独神が続きます。神話に登場する最初の七柱の神です。しかし、神代七世も、三代からは男女対偶の神が登場します。具体的にご事跡が詳しく語られるのは、その最後に登場する伊邪那岐・伊邪那美神です。

諸冉二神は「淤能碁呂島」に始まり島々や神々を生む有名な「国生み」をなさいます。

先ず、両神は、お互いの体の違いに気づかれます。そしてお互いの意志を確認した上で「みとのまぐはひ」をなさいます。

ここで注目しなければならないのは、天の御柱を廻る時の廻り方を男神が決めている点です。柱の廻り方といい、声の掛け方といい、そこには手段があります。好ましい手順通りにしなければ、決して成功はおさめられません。

その証拠に、男神が「女人先に言へるは良からず」と不吉を観じた通り、最初に生まれたのは、水蛭子であり葦船に入れて流され、また淡島であり子の例には入れない、という結果になりました。

二神は天神に教えをこい、太占で占ってもらいます。基本的な方法が間違っていたわけではなく、男神から先に声をかける方法でやり直すことになります。

そして、大八島をはじめとする十四の島、三十五の神を生み成して行かれます。実際に誕生する神は四十柱なのに神話では三十五と言いつつ切っています。これは、対偶の神を二柱で一神と数えるからなのですが、これこそ、神代の時代には夫婦という単位を重要視していた動かぬ証拠です。最初の失敗を体験し、国生みは成功へと導かれます。

この場合は、常に男性がリードするという手順で、男女の共同作業が成就します。この件に関しては男性が先導しますが、他の件に関しては女性が先導することも勿論あります。決して固定的に男性が先に立つべきと言っているわけではありません。夫々の案件や場合ご

とに、どちらかが先に動き、性の違いをわきまえ、その性差を生かしたり、両性の結合の成果を十分に發揮できるようにすることが大事なのです。男性と女性という両性があることをふまえるならば、どちらかが先に動くのはごく当たり前のことです。性差をなくすという考えは、進歩的な素振りをしているだけで、一つも合理的ではありません。

また、この国生み自体が天神の「言依し」によるものゆえ当然といえましょう。迷った時に目上の人に教わるという姿勢こそ現代人に欠けているものだといえます。こうした日本人のもっている美風ともいえるものこそ大切に伝えていくべきものです。

こうしてみると、諾冉二神の国生みは、今日語られているようなジェンダーフリーではなく、男女の区別をふまえた合理的かつ秩序だてられた生産（性の行為）であると言ってもよいでしょう。

まさに、神代の時代むかしに男女共同作業の先例があるではないですか。というより、日本の社会自体の歩みは、男女共同参画によって築き嗣がれてきたといってもよいのです。

ところが、ジェンダーフリーの思想は、男女共同参画社会の構築という世の流れの中で登場したはずなのに、驚いたことに、実際には違う方向を指向しています。

平成十二年に三重県津市で開催された「日本女性会議」で志摩の青年が発表をしました。

地元の漁師さんである彼は船の上で命綱を握り、海女さんである奥さんが海に潜り、夫婦で苦楽を共に生活をしているというものでした。ですが、この構図こそフェミニストが目の敵にする例なのです。船上の男と潜水する女という図式は男尊女卑そのものだということです。実は、ジェンダーフリーが目指しているものが、ここに、象徴的に現われています。ここで求められているのは「女性の地位向上のためには、既存の全ての社会秩序を破壊逆転する」ということなのです。彼女たちの目的地は「男女共同参画社会」だったのでなく「女性が男性の上に立つ社会」という着地点なのです。

男性と女性のどちらが潜水に適すかをここで科学的に論ずるつもりはありません。しかし、日本のすばらしい風物詩の一つとして誇れるはずの海女さんの存在価値を否定する権利がどこの誰にあると言えるのでしょうか。

今日まで語り継がれてきた伝統や文化を全て否定して既存の社会秩序を全部逆転しようとするジェンダーフリーは、方法・手段としても全くおかしいものです。これらを整合性あるものとして眺めることができるのは「男女逆転社会への到達」を目指す「共産主義社会」でしかありません。まさに、マルクス主義フェミニズムではありませんか。

この流れに乗らない者はインテリ脱落とのレッテルを貼るぞとちらつかせ、相手に深く

考えさせないうちに、外国人には理解不能な和製英語「ジェンダーフリー」を声高に叫びいつのまにか思想洗脳を行っているのです。

政府が目指していたのは、男女共同参画社会でした。そして、それは、神代の時代にすでに実現していたのです。日本人はすでに男女共同参画を体得しているのです。つまり、新しくそれを叫ぶのではなく、古き教えにたずねてみればよいのです。今より社会をよくするヒントは、古きよきものを紐解けば、そこかしこにあふれています。

(島根県 長浜神社 宮司)

「の」と「と」

——出来ちゃった結婚——の教へ子二人の、新しく門出するに際して——

野上正紘

本日は本当におめでたう。只今ご神前に決意を述べ、お供へされた誓ひの詞は決している加減な気持ちではないでせう。どうかこの瞬間の気持ちを忘れずに幸せな家庭を築いてください。

今日はお二人の門出に際し、「の」と「と」いふことについてお話したいと思ひます。これはお二人だけでなく、両家のご両親にも是非お聞きいただきたいことです。

最近よく生徒会の諸君たちが「学校と生徒」とか、「先生と生徒」などと言ふのを聞きます。それは次には「学校側は」などといふ言葉に繋がってゆきます。また「親と子」、「夫と妻」、「嫁と姑」、「私と家」……などといふのも普通に聞かれる言葉です。

しかし私はこの「と」を、「の」に置き換へてみたらどんなにか世の中が明るくなりはすまいかと思つてゐるのです。皆さんもちよつと置き換へてみてください。「私の学校」、「生

徒の先生」、「私の先生」、「私の生徒」、「妻の夫」、「親の子」、「子の親」、「私の家」 e t c
……。何とも「と」は突き放した感じになり、「の」には温かみのあることか。

ただしこれは片一方からだけでは間違ひが起ります。最近よく聞く吾が子や孫を殺す親。親を殺す子。島根でも自分の娘の小指を切り落とさせた無職の父親。女子生徒や同僚女子教員のスカートの中をデジカメで撮した教員、トイレにカメラを仕掛けて隠し撮りした医学部の教員。何とも情けない事件のニュースが伝へられますが、勝手に「自分の物」だと思つてゐるとかういふことが起ります。親は子のことを「親の子（吾が子）」と思ふと同時に自分を「子の親」と思ひ、子の方も親のことを「子の親（吾が親）」と思ふと同時に自分を「親の子」だといふやうに、両方が互いに自分のことも相手のことも「の」で考へねば成り立ちません。「自分の学校」と思ふと同時に「この学校の自分」と考へ、「私の家」と思ふと同時に「この家の私」と考へたなら、決して最近のやうな事件は起らないでせう。今から彼方たちも会社勤めをし、授かる赤ちゃんはお母さんに見て貰ふことになるでせうが、ただ雇はれてゐるだけの会社と思はず、「自分の会社」、「会社の自分、会社に生かされてゐる自分」、「新しい私の親」、「親の子である自分」と思つて暮らしてみてください。両家のご両親も「新しい自分の子が出来た」と思つて受け容れてあげてください。

只今奏上した祝詞で「夫某が強き意志を妻たる某が広き心に重ねさせられて速くも新しき生命賜はるも大神の恩頼と感謝いやび喜びこの誓約の御盃賜はりての後は世の掟、はたま將た世の慣習ならはし・約束事を軽んずる事無く重く受止めて丈夫と在るべき道、女と在るべき正道を踏み誤らず……」と申し上げましたが、それにはこの「の」の正しい心を実践することであらうと思ひます。どうかよい家庭を作られるやうに希望してお祝ひにいたします。

以上が新郎新婦に贈った挨拶ですが、この「の」の本来の意味は、川端康成が昭和四十三年秋ノーベル文学賞受賞の時、十二月十三日に「美しい日本の私」と題して行なった記念講演での使い方が最もその本質を突いてゐると思はれます。それは正しく「美しい日本に生かされている私」の意味に違ひありません。その後山口百恵の「いい日旅立ち」が大ヒットして旅行ブームが起り、国鉄のキャンペーンコピーが間違へて「美しい日本と私」としましたが、これでは何とも突き放した言ひ方にしかなくなつてはいないではありませんか。

かつて国語学者の大野晋は、「自然」に当たる和語のないことをもつて、日本人は自然を人間に対立するものとしては考へず、その中に身を置いて同化してそれを利用しやうとする、即ち道をつけるにも地形に沿つて作るのに対し、西洋では、自然も人間も神の創造物

で、自然は人間に対立し、征服する対象として、山を削って直線的に道を作り、谷は大規模に堰き止めて利用するものと考へるといふやうに論じましたが、日本の神様は、キリスト教やイスラームのやうな全てのものを造り出した唯一絶対の神ではない。アメンバーのやうな細胞一つ、あるいは道端の石ころ一つとして人間の力で創り出すことはできず、そのやうな人力の及ばぬ物総てに神性を認めて、自然やそれらの物を恐れ畏み、敬虔な気持ちを持つのが日本人でありましたのに、それを忘れて、何でも人力で出来ぬものはないといふやうな傲慢な錯覚に陥ってしまった科学技術。金儲けのためには何でもありといふがごとき態度で世界中の資源を買ひ漁って自然を毀し、飢餓に苦しむ途上国の人々を尻目に、自給率三割にも満たないといふ食糧事情の中で輸入食品を食ひ散らす。昨年の京都での世界水フォーラムでは、「世界は砂漠化の中で水飢饉だといふのに日本人ぐらい水の有難さを感じてゐないものはない。」といふことが盛んに論じられましたが、直接的に使ふ水の無駄使ひだけではなく、輸入しまくってゐる食料が生産されるために使はれた水の問題。輸入牛一頭育つのに何十トンもの水を使つてゐると言ふ……。

これらはすべて日本人が自然の中で、自然に生かされて生きてゐるといふ心、即ち「の」の心を忘れてしまったことにあるのではないだらうかと思つてゐます。

(島根県 錦岡八幡宮 宮司)

英霊への祈り

山崎 一夫

昭和二十年八月十五日から今年はすでに五十九年。私のような戦争体験のない戦無派が国民の大半を占め、戦争は遠い過去の一コマに化そうとしております。

昭和六十一年の夏、「玉砕の島」サイパン島、トラック島を訪れて戦没者慰霊祭を奉仕させて戴きました。南洋諸島では未だ多くの遺骨が南海の底深く、ジャングルの奥深く水づく屍、草むす屍となつて、風化寸前の状態にあることを思う時、激しい胸の痛みを覚えざるを得ません。

今更言うまでもなく、サイパン島をめぐる攻防戦の凄惨さは歴史に生々しく、特にシュサイドクリフのマツピ山、バンザイ岬は何千人もの人々が「天皇陛下万歳」「お父さん、お母さん」と叫んで身を投じた所ですが、そこを目のあたりにした時、万感胸に迫るものがあり、涙せずにはおれませんでした。

又、平成十四年には二月、七月と二度も沖縄、糸満市の米須ガ丘の「島根の塔」追悼式

に参列させて戴き、生涯忘れることの出来ない貴重な体験をさせて戴きました。

追悼式における国歌斉唱の際、又米須ガ丘に立った時にはこれまた万感胸にせまるものがあり、涙せずにはおれませんでした。戦争は二度とするものではないと強く思いました。「島根の塔」一帯には各県の慰霊塔が集中しております。その形も郷土の特色あるものが多く、島根県はドーム型でありますが新潟県の米粒型、青森県のリング型、三重県はさすがに鳥居が建てられておりました。

唯、ひとつ気になりましたのは二月の追悼式に参列した際殆どの各県慰霊塔には国旗掲揚塔が建てられておりましたが、我が島根県には建てられておりませんでした。そこでこの事を上司に話し、同年七月の追悼式には出雲大社教により国旗、県旗掲揚塔二基が設置されました。その記念セレモニーが行われました。県知事他関係者テープカットの後、国歌斉唱し、国旗、県旗が米須ガ丘に高々と掲揚されました。ダイコク様の御手として世の中のお役に立つ働きが尽くされました。

沖繩戦での戦没者の名前が刻まれた「平和の礎」には毎年追加され、二十四万人近くとなっております。祖国の繁栄を信じ、国難に一命をとして戦い、かつ散っていかれた英雄のみたまをお慰めしつつ、祖国日本に生を享け、この美しい神の産み賜うた日本を子々

孫々に受け継ぎ伝えることが、我々国民に与えられた責務と信じております。私の耳には英霊たちの救いを求める声なき叫びが異様なまでに伝わり、多くのみたまたちは未だ救われていない感を深めたものであります。

戦没者の英霊の収骨が果たされず、その安寧の祈りを欠くようなことでは未だ戦争は終わっていません。現実の世界において、真の平和も永続的な繁栄も将来もあり得ないのではと思います。私共は永久に英霊に対する感謝の念を失ってはなりません。今日の日本の繁栄は、英霊たちの命をかけて国を守る、愛する心の上に建設されたことを忘れてはなりません。

しかしながら、経済的繁栄を遂げた我が国ですが、いつしか暖衣飽食に溺れてしまい、自己中心の暮らしを営むようになってしまいました。これは生かされている有難さに祈る心を忘れ、英霊のご加護に祈りを怠ったためではないでしょうか。

民族の繁栄と、国家の安泰を願った英霊の心を心として、世のため、人のために生きぬくことが、英霊に対する私共のつとめではないでしょうか。

今も未だつめあとに残るサイパンに

英霊の幻さびしく揺れる

(島根県 出雲大社 禰宜)

みたま祭りと私たちの生活

古瀬光治

日本は高齢化社会を迎え、平均寿命も世界一となりました。老いることはごく自然なことであり、神々の恵みの中に生きることとはすばらしいことではないでしょうか。ご神慮をいただき、祖先の御霊がいつも近くにいてお守りくださっているという安心感が生きがいというものではないでしょうか。

朝、神棚と霊舎みなまやの前で柏手かしわでを打って今日一日の無事を祈ります。子も孫もいつの間にか習慣となっている清々すがすがしい朝のひとときであります。

さて、日本人の多くは、家庭の宗教を尋ねられると「仏教」と答えるでしょう。しかし、その供養は神道と同じく祖先を拝むことが中心となっている信仰です。それは、日本民族の祖先を敬慕して追祭するという仏教伝来以前からの日本民族の生活習慣であり、日本民族固有の祖先祭祀であります。

古歌に、「日の本もとに生れ出いでにし益人は神より出でて神に入るなり」とあります。この歌

は、日本人はすべて祖先の神より「みたま」をいただいて世に生まれ、そして後には、祖先の神のところに帰っていくのだという死生観を明確に表わしています。

人が亡くなったときは、先ず靈舎みたまやに告げ、氏神様にもご報告します。これは亡き人の帰るべき「みたま」の行き先が祖先のところであるからであります。祖先の靈力によつて死者の靈を導き守つてほしいということをお願いするのであります。私たち日本人の心の奥底に流れている死生観は、太古の昔からそう変わつてはいないようです。

神道では、神典によれば死者は必ず黄泉国よみのくにに一度は行かねばならないとされていますが、この世界は穢れの世界です。従つて、死者の靈はこの穢れを十分に祓い清められなければならないません。ここに祓いの式、また「みたましずめ」の祭りが行われるわけです。私たちは、肉体の穢れのみではなく、心に多くの罪・穢れを犯しています。例えば、ねたみ、怒り、あるいは不平不満など、人間である以上誰にもあると思いますが、そういう罪・穢れを背負つて死んでいくのです。死者の靈は十分な祓いと祭りを受けた後、常世とこよの国に行き鎮まるのであります。常世の国に鎮つた靈は、行つたきりの存在ではなく、いつでもこの世に生きる私たちを見つめ、支え、励まし続ける身近な存在なのです。

みたま祭りに参列したとき、必ずと言ってよい程斉唱される言葉があります。「幽冥かくりよの大

神あはれみ給へ恵み給へ。幸魂奇魂守り給へ幸へ給へ。」という唱えごとであります。これは、死者に対する鎮魂の言葉なのです。神道では、亡き人に対する一番の供養は鎮魂と考えられています。「みたましずめ」によって、霊は癒され、浄化され、高められていきます。少なくとも五十日祭までは、朝に夕にこの鎮魂の言葉を唱えます。ことばの霊力によって、亡き人の霊は次第に清められていくのです。

こうして、霊祭を一年祭三年祭五年祭十年祭とくり返し、鎮魂をくり返して五十年祭で死霊から祖霊となります。つまり、はじめて先祖として神の座に列せられるのです。これを『神あげ』とも言っております。ここに霊祭を続ける意義があるのです。後に残された私たち子孫が、霊祭を継続することによって、霊はだんだんと位が高くなり、ついには神として列せられ、その霊力をもって私たちをお守りくださることができるようになります。もし、霊祭を怠り、現世うつしよとあの世、つまり幽冥かくりよとの縁を絶てしまえば、不祀霊となってさまようことになるのです。従って、霊祭は私たち子孫のつとめであり子孫繁栄の基もとであります。

宣長翁の歌に、「代々よよの祖おやのみかげ忘るな代々の祖はおのが氏神おのが家の神」というのがあります。先祖代々の神霊は、各自の家にとどまり、おくつきに鎮まり、氏神やしろの社にとどまるということです。

死者を古来より心をこめて祀る作法が神葬祭であるという誇りと、日本固有の「みたままつり」に対する考え方等、日本民族の続く限り悠遠な日本の神道を皆様といっしよに再認識したいと思っております。

(島根県 大歳神社 宮司)

日本について

宗宮和史

みなさまこんにちは、わたくし宗宮と申します。

本日は今の日本について自分の思うところを述べたいと思います。

毎年四月になると日本各地の学校でやれ日の丸反対だとか、国歌斉唱強制反対とか、常識では考えられないことが起こっています。

今の日本の惨状は一言で表すならば、昔に比べ個人主義化が激しく進んだ結果だと思います。

自分も含めて戦後の教育は人権と平等といった権利を尊ぶあまり、権利を得る為にはたくさんの方の義務を果たさなければいけないという当然ことが、あまり教えられてこなかったと思います。

幼い頃私は思いました。

『なぜ、日本はこんなに平和で豊かなんだろう。』

『なぜ、外国の子供は飢えて死んでいくのだろう。』

『この差はいつたいたんだろう。』

この命題はその後もずっと考えさせられました。

ここにお集まりの皆様はどう思われますか？

あるとき、私は自分なりに次のように結論付けました。

「恩恵を受けられるのは、たまたま自分がこの日本と言う国に生を受けたからだ。」

子どもながらに単純ではありますが、この「日本に生まれたという事実」が大きいのだと思います。

では、この当たり前のように経済的に豊かで世界でも例を見ない治安の良い、貧富の差のない日本と言う国はいつたいたどうやってできたのだろうか、とそこから私は考えるようになりました。

特に、いま我々が生きている現代に近い、近代史が、私にとって一番興味のある事柄でした。

ここで皆さまに前もって、お話しておきたい事があります。

まず、自分は戦後の教育を受けた人間です。

今になって振り返って考えると学校で習った日本の近代史は、特に明治・大正・昭和の時代がある特定のイデオロギーによって、かなり歪んだ形で教えられており、それ恐ろしい感じが致します。

自分も他の多くの子どもと同じ様に、平和が一番で、過去の日本の行った戦争はまったく愚かで駄目であつたと信じておりました。

ある時、私の家庭で事件が起きました。

それは私にとって大きな事件でした。

三歳年上の姉が祖父と口論を始めたのです。

どうやら姉は、学校で左翼教師に、日本が起こした大東亜戦争によっていかに周辺の国々が迷惑を受けたかを授業で一方的に教えこまれたようで、純粋な彼女は憤慨して祖父に食って掛つたのです。

私の祖父は明治生まれの、国家官僚時代の神職であり、そんな祖父が私には『戦前の思想の塊』のように見えましたので、私兄弟は古臭いと感じると共に畏怖しておりました。その祖父に姉が挑む姿をみて私はひそかに喝采を送っていたのです。

日本軍が周辺諸国に行った蛮行は確かに悪い、そののどがいけないんだ、と姉は言い

ました。

頑固ですが普段はあまり声を荒げない祖父が、この時は激怒して次の様な事を言いました。

「物事には必ず良い面と悪い面があり、戦争もまた然りである。一方的な物の見方で我々の先人たちの努力を侮辱する事は断じて許さん。」

それまで戦争を起こした昔の日本は悪で、戦後生まれの自分達は善だと浮かれていた私は、この言葉に衝撃を受けました。

そしてそこから、大東亜戦争はどのような戦いだったのだろうかと考えようになりました。

そして、次の様な命題を考えました。

『近代において欧米列強のひしめく帝国主義の真っ只中の時代に他国に進出せず、他国から侵略されないで独立するという夢のような選択肢が日本にあったのだろうか、日本はこの時代に本当はどうすればよかったのか？』

皆さんならこの問いにどう答えられますか？

長い間、この命題を自問自答しておりました。

それから十数年が経ちました。

私なりにまとめた結論から申し上げますと、この命題自体が不適當であり、日本にとつて夢のような選択肢はあるはずも無く、どうすればよかったのかという考え自体が非常に傲慢であつたと反省しております。

日本国が他国の侵略を受けてなくなつてしまひそうな時に、ぎりぎりのところでぎりぎりの判断をして、絶望的な状況下でもなんとかこの国を維持していこうとした先人たちの努力を、今ぬくぬくと生きている我々が、「あの時ああすればよかった、あれはだめだった」などと声高に主張することが、はたして公平なのだろうか、意味があるのだろうか、と強く感じます。

それよりも、あの絶望的な時代に、小さな島国の日本が大国を相手にいかに頑張つたか、負けてぼろぼろになつてもいかに復活したか、この事実が本当に学ぶ価値があることだと思ひました。

そこから以下のことを私は考えました。

①開国した日本がなぜ欧米諸国から侵略される事なく、アジアでいち早く近代化が出来たのか？

②一面焼け野原にされた日本が、短期間のうちに復興して経済大国になったのはなぜか？

これらの答えは、とてもこの限られた時間内で説明することはできませんが、これらを一言で説明するならば、「日本という風土で生まれた日本人が持つ目覚しい能力」が、他の国に先んじて時代を切り開いて行く原動力になったのではないかと私は考えます。

「日本という風土で生まれた日本人がもつ目覚しい能力」とは、日本精神、大和魂であり、これらの源が、連綿と受け継がれてきた日本の伝統・文化の中にあることは間違いないと考えます。

他国にはない日本だけの伝統、気質、生活様式……考えていくと神社神道と言うものが、かなり重要な要素であると気づきます。

神職という職業はこの日本の一番大切な物を毎日護っているのだと思いますと、私は本当に神職になってよかったなああと心から思います。

日本という国がいかにすばらしい伝統文化を持っているかを後世に伝える事と、戦後我々が失った大和魂を取り戻す様努力する事が、今の日本に一番必要な事であると私は強く思います。

最後になりましたが、自分たちの生きているこの日本という国を愛し護っていく事が、

自分の故郷、家族が幸せになるということだと私は信じます。

以上ご清聴ありがとうございました。

(岐阜県 伊奈波神社 権禰宜)

今、日本の教育に必要なもの

神山 貴

最近なかなか言うことを聞かない現在小学六年生の息子に、ある晩冗談まじりに「ヨットスクールに入れるぞ」と一括。子供は何のことやら訳がわからず、入ってみようかなというノリになる始末でした。

私は愛知県の出身ですから当時戸塚ヨットはかなり身近な存在に感じられ、小学校・中学・高校と多感な少年時代、テレビ等でその厳しい指導の様子が生々しく映し出されているのをよく目にしていました。

私自身も息子同様、きかんぼうだったのでしょうか、「戸塚ヨットへいれるぞ」と言われておりました。ただ、当時父は本気でしたのでたまったものではありません。泣く子も黙る戸塚ヨットなのです。

そんな私に呆れたのか、次は「自衛隊に入って根性叩き直してこい」ときたものですかもうやけくそ。これがきつかけかどうか分かりませんが、晴れて目出度く国防の志を

もつて第三五普通科連隊教育隊に入隊と相なりました。

高校を卒業して入隊しますと、いわゆる昔で言う二等兵となります。先ず、三ヶ月間の前期の教育を受けます。これは自衛官としての基本的な教育。そして次にもう三ヶ月間、後期の教育として、戦車部隊・特科部隊等の専門的内容について、それぞれに別れて教育を受けることになります。計六ヶ月間の教育の後、正式に部隊配属となるわけです。

特殊ではありますが、今の学校教育にはない自衛隊独自の教育の形を紹介させて頂きたいと思います。

集団生活ですから何より規律が必要です。そこで登場するのが自衛隊式団体責任です。一部の隊員の身辺整理が出来てなければ、部屋の中に台風が吹き荒れます。教官により布団は営舎の外へ飛ばされベッドはひっくり返され、今も昔も変わらぬ教育隊の伝統とも言えるところです。

団体責任には確かなメリットがあります。超越して言えば助け合いの精神です。銃を持つてのランニング（ハイポート）、集団で走る訳ですから、ついてこれない者がでます。そうすると、代わりに遅れた者の銃を、誰かが一つ余分に持つて助けることになります。でも決してトラブルは起きません。ここで、すばらしい関係が生まれるのです。それぞれ

の部隊が一丸となって事に当たる。一人の犠牲も出さず職務完遂することが第一の任務、また最終目標と言えるわけです。

産経新聞の『正論』で、「自衛隊教育は国民教育として非常に優れた組織であり、自分本位な人間になりがちな今の時代、責任や義務を教育するにあたっては最も適した組織」とありました。正にその通りであり、同じ釜の飯を食うことの大切さを実感致します。名古屋で前期教育済ませると夫々の職種のある駐屯地へと全国へ飛び立って行くことになりました。前期教育、たった三ヶ月の短い期間ではありますが軍歌「同期の桜」の歌「同じ教育隊の庭に咲く」の歌が歌えるようになるのであります。

今、自衛隊と言えばやはり、イラク派兵についての問題となります。なんととっても危険な任務です。第一次、第二次、そして今第三次隊ということで、東北の部隊が派遣隊を組んで準備を進めているようです。賛成する、いや、反対だなどの声も最近では以前ほど耳に入ってくることも減ったように思われます。第二次派遣隊として丁度今イラクにて任務についています隊は十一師団よりなり、私がいました札幌・真駒内の駐屯地にある第十一戦車大隊も編成隊に加わっております。平和な時代に慣れきった時代にあって突然の任務に、正直戸惑いは隠せないところではないかと思えます。命令を受け、行くか行かない

か、現場の感覚はどうもそんなものではないようです。今回の派遣にあたり、ひとつの具体例を紹介させて頂きます。

私の同期、A君は今、地方連絡部勤務にあり、隊の広報活動と、隊員の勧誘を主な仕事としております。どうも自分の勧誘した隊員に派遣の話が入ったとのことです、Aはその隊員に代わってイラクへ行くと懇願したそうです。そうなりますと報道インタビューでもよくある通りで、家族の猛反対をうけることになり、気まずい関係の日々を送っていたとのことでした。

除隊した私に、こういった心情を理解するのは無理かと思えます、がしかし、間違いない立派であり、大きな人間になったことを確信したところです。

最後に、私が自衛隊にいた四年間の中で、一番心に残ったことを一つ紹介して、終わりたいと思います。実際に戦争を経験された方もこの中にもいらつしやるかと思われませんが、その前でお話するのはお恥ずかしいですがどうかお許し下さい。

当時日本はソ連と緊張関係にあり、特に北海道は地理的にも近く、北の防衛の要であり、一応に緊張感をもっていたわけですが、訓練というものに慣れきった生活の中で、あくまで訓練ですが、一瞬恐怖を感じたことがありました。真夜中の非常呼集出動訓練です。こ

れは、有事にあたり装備を整え検閲を受けるまでを實際におこないます。要するに出勤命令です。自分の私物一式を荷造梱包するところから始まります。私物を箱に詰め、実家に送り返すのです。箱には自宅の住所と親の名前を書いてゆきます。宛名を書いている時の言いようのない恐怖感を今でも思い出します。電気を点けることなく作業は無言で暗がりの中実施されます。もうここには帰ってこれないという前提で、自分の後始末をしてから検閲を受けます。恐怖を感じたのは多分、真夜中に起こされ、頭がもうろうとした状態の中、訓練と本番とが上手く認識出来なかったのかも知れません。

確かに特殊な組織です。しかし今の異常とも言える社会、この時代にあつては十分参考になり得る教育の形ではないでしょうか。

(京都府 松尾大社 権禰宜)

半世紀のリズム

高橋光男

皇紀二五九一年、西紀一九三一年、この世に生まれ七十三才となりました。正に半世紀を二十三年も過ぎました。今あるこのリズム、何んと思いましょか。この三月一日に主治医に相談の結果、三月十六日に腸の検査、続いて三月二十三日に胃の検査となりました。腸の方は内視鏡に依り前日の夕方よりおなかを空にするため、腹くだりの薬を飲んで完全におなかに何も無い状態にしています。胃の方も同じように何も無いようにして、やはり内視鏡にて調べました。何れもテレビに写し出され、自分の腸と胃の中が鮮明にしかも赤身を帯びていささかのでこぼこがあり、それは何と美しい自分の内臓の姿に驚きながらしばらく見入って居ました。只、腸の時は尻の穴より内視鏡を入れ、胃の場合は口より入れて調べますが、のど越しの時のいささか、*「げい、げい」*と云いつつ、入れられる時に苦痛を覚えます。後は画面を見ながら、三十分位でしょうかお調べ下さいました。何れも不合格を頂きました。残念です。腸には上行結腸の入り口の近くに、一センチ五ミリの癌

と、胃には一センチぐらいの癌が発見されて、両方とも悪性でありますので「早急に処理をしないと悪くなつて行きますので手術をしましょう。」と云うことではありませんか。まことに驚きとびっくり、一時途方にくれました。最大のピンチです。いても立つても只ぼうぜんと死の宣告を受けた思いにひたりましたがそうもしておれません。今の医学医術を信じて後は神様に念じて、日頃お仕えしてこの半世紀余勤めて来ました私に御加護あらんこと祈りつつ、入院の決定となり、三月二十六日に、名古屋市千種区の東市民病院に入り治療となりました。生れて初めての出来事です。毎日が不安との戦い、しかし先生と看護婦様よりの言い付けを聞きながら治療に向うべく準備の検査、先ず血液、呼吸器、肺活量、おなか全体のCT、脈拍とか、手術に対応出来る検査を終えて、愈々四月九日に胃の手術となりました。手術台に乗せられ、約四時間の治療を終え部屋にもどり休みました。先ずほっとしました。点滴の生活に入り食事は一週間なし、最初はおも湯より段々と胃にならず食事と、先ず胃の方が成功に終りやれやれと云うことで十五日間しつかりと胃に対しての治療は終り、続いて四月二十六日に今度は大腸上行結腸の手術となり、手術室に入られ右側寄りのおなかを七センチ程切開し、悪い所を取り除いていただきました。全身麻酔が良く効いて、これも六時間後麻酔が解けた頃に醒めました所激痛に会い、大きな声

で思わず叫びました。看護婦様が来て注射をし静かに休みに入りまして、これからは痛みとの共生を余ぎなくされ、又切り口の塞がらんことを願いつつ点滴との生活となり、一週間経ちましてから、軽い食事より重い食事とお陰様で人並の食事を取れる様になり、五月十五日に退院となりました。いささかなりの体調を取りもどしつつ今日となり、皆様の前に元気で顔を出し、こうしてお話をさせて頂くのも、此の上なき喜びでございます。ある程度先はありません。先生より、「五年間の保証します」とは云われても約九十五%です。「五%は油断なりません」と云ってくれましたので、これからの四年半少々を全力投球して斯界の為、この偉大なる神様の道に向って歩み続けねばなりません。一つしかない生命を今迄培って来た半世紀余の経験を微力ではありますが生かしながら。

三十年前御指導下さいました、雄たけびと申しましようか、熱誠あふるる偉大なる先生、今こうして大会を行えるのも命をかけお導き下さいました二人の先生、今ここにお姿は御座居ませんが皆様の発表を、お聞きになっておられます。「高橋先生もう少しの人生だ。いか、しっかりと歯をくいしばって頑張りなさい。」「君達がやらなかったら誰がやる。」「いいか今が一番大切な時だ！見えない心を打ち出して、自らを戒め、率先して頑張ってくれ。」と云われてる様に感んぜずにはおれません。殊に石井・佐古両先生が、今日特に皆様

に呼び掛けているように思います。こうしてお話の出来得ますのも両先生が命をかけて時代の先取りを以って永遠に続く日本の神社の流れを伝えて行くすばらしい教えを、人前で話す事の大切さを命をかけて導いて下されたるを感謝しつつ、特に始めてあつた生命の危険な出会い、そこから来る生命への思い、元気な時あまり思わず、全く感知せずに過ぎてしまいます。又自然からくる偉大な営み。何れにしても健康が一番、言うまでもありません。次にそこから来る奉仕実践の実行に入り、これまた大きな道との出合、毎日心掛けて進まねばならない。精進齋常に身を淨め心を明るく正しく、素直にしかも喜び勇んで神様と人の間に立つてお仕えする事が使命と毎日の生活に余念なく頑張る事が私に取って生命の糧であり、その事を一人でも多くの方に伝えて行く事を願つて余生の全力投球を思うこの頃です。「目に見えぬ神に向ひて恥ざるは人の心のまことなりけり」と明治天皇の御製。これこそがこのことが、私達が生きて行く上にもっとも人として歩みつづけて行かなければならないものと信ずるものです。半世紀のリズムの一端をのべて、終りとします。ここで「清き流れ」の一節をのせてしめたいと思います。

星野哲朗作詞、北島三郎歌、お伊勢様の二〇〇〇年記念歌

“はるかよりはるかに続く年を重ねて二〇〇〇年 嵐の夜も又朝も我等を守り我等を愛

し清く流れる・・・五十鈴の川よ”

(愛知県 神明社 宮司)

伝えていきたい日本の心

大島守彦

子供の頃より永い間神社の祭りをみてきました。父の後を継ぎ宮司となり変りゆく世の中にいろいろ感ずる近頃です。

縁あつて神道講演全国協議会で勉強出来るようになり、これからも神道講話を通じて日本の心を伝えていかなばならないことについてお話しを致します。

私は大正十四年の生れです。八十才の傘寿を迎える年令となりました。神社の境内で生れ昭和七年小学校にいく前から戦前戦後の祭典をみてきましたので、時代と共に変つてきた人達の事等思い出が多く、なつかしく古きよき時代の気持ちになりたいという思いが強くなっております。

神職となり、これまで経験してきた中で神道講演研究会に入っていてよかったとつくづく思っております。どうしてこうなったか、これからこうしてやっていきたいという事についてお話しします。

神道講演演研究同志会に出席するようになり、石井寿夫先生、佐古幸嬰先生にめぐりあいました。この御二人の御指導を頂き、多くの同志の先生方とお会いする事が出来、親しく教えを頂きました。有難く感謝すると共にこれからも猶一層の努力をしていかなばならぬと痛感しております。

石井寿夫先生から福岡県神社庁に於ける研修会で、再三一泊二日間の研修御指導をして頂きました。食事を共にし宮崎八幡宮神殿にて大祓詞を奏上し、宮崎海岸にて愛唱歌、日本の祈り、美はしき山河を歌っていた頃の光景が今更のように思い出されます。年がたつと共にこれまで一緒にやってきた、同志の先生方とお会い出来なくなっていくことが淋しい思いが致します。

さて福岡県神社庁講演研究部では毎年二回研修会をやっておりますが、平成十五年度の研修会では飯田博信講演研究部会長の意向で熊本県神社庁教化委員長の木下鉄二先生に講師をお願いする事としました。私が木下先生と連絡をとり快諾を頂きましたので研修会を実施すること、致しました。

飯田部長はこの頃より病気がちでありましたが、木下先生にお願い出来た事を大変喜ばれ、お会い出来ることを楽しみにしておられました。ところが研修会の五日前九月六日急

にお亡くなりになりました。永いあいだお世話になり御指導頂き、親しくして頂いたので残念でなりませんでした。私が副部長をしておりましたので部長に代り研修会をすませました。

木下先生には懇切なる講習をして頂き、有意義な研修会であった事を感謝しております。その後年末に熊本神社庁と福岡県神社庁の教化部交流会が福岡県神社庁に於いて行われ、木下先生とお会いする事が出来、お礼を申し上げ今後の事についてお願いしお話ししました。

飯田博信部長のことについてお話します。初めて研修会でお会いした時から気持ち合い講演研修会では何時迄も一緒にやってみましょうと約束し、今日迄行動をとともにしてきました。全国協議会では東京大会靖国神社、愛知大会熱田神宮、愛媛大会松山護国神社、その他いろいろと一緒に参加致しました。東京大会では終了後娘さんの嫁ぎ先の府中の大国魂神社に一泊し、正式参拝御世話になりました。何時迄も心に残る思い出です。

頼りにしてきました部長が亡くなりましたので、今後の事について同志の先生方と話し合いました。これ迄多くの先輩が築いてこられ、講演部会を続けていかねばなりません。若い人達を育て、いかねばならぬ事など話しました。

飯田部長の後任については今迄やってきたので、このところは私に部長をやるようにとの事となりました。これまでは先輩先生方についていけばよかったのですが、自分もそういう年輩の立場になっているのだなという事を痛感し、責任と意思を新にしております。

偉大なる石井寿夫先生、佐古幸嬰先生の精神を受け継ぎ神道精神を言葉で伝えていくことは益々重要性を増すものと思います。

東京大会の時に私が慰霊祭についてのお話しをした時に、靖国神社の大野俊康宮司様より靖国の語部として今後つとめていくようにとの有難いお言葉を頂きました。

まだまだ勉強していかなばならない身ですが、同志の方々と力を併せ教化活動の第一線に立つて神道講演に励む事により、日本人として心のあり方を伝えていきたいと思っています。

(福岡県 六所神社 宮司)

相互理解

河野 誠

ご結婚おめでとうございます。只今、神様のお計らいにより、めでたく結婚式を挙げられたお二人に、人生の先輩として、一言お祝いの言葉と、合わせて人生の旅路の気付きを述べさせて頂きます。深い愛で結ばれた結婚式だったと思います。そして、行く末永く、共に白髪の生えるまで、添い遂げる事を心に誓われた事と思います。夫婦愛とは自分の身を犠牲にしても、相手の為に尽くす事だと思いますが、案外相手を自分のペースに巻き込む事に懸命になる事が多いようです。二人の間には、食事の嗜好の違い、趣味の違い、性格の違い、価値観の違いと色々あります。私達夫婦の間では『男は食事の好き嫌いを言わぬを美德とする。』と言われて育った私と、父を料理長にもつ妻の家庭、又お茶を飲んだ事はなく、一年中、井戸水とお湯で育った私と、お茶を欠かさず飲んできた妻の家。『我が道を行く』で他人の口を一向に気にしない私と、他人の目を人一倍気にして、良い子である事をモットーとする妻、優等生になる事に生きがいを感じていた妻と、劣等生であるが絶

対に落第はしない事を自負し、一番になるのも難しいが、ビリを走るのはもっと難しいと誇らしげに語る私といった具合です。

ところで、私は結婚四十年、私の還暦のお祝いの時に起きた事は忘れる事の出来ないものとなりました。事の起こりは、還暦の祝賀会で、私から列席の皆様へのお礼の言葉にありました。どんな時にも、取り乱して、怒りを現した事のない妻が、祝賀会終了後、凄いい剣幕で、涙を流しながら怒ったのでした。その理由は、皆様への挨拶の中に、妻への感謝と賞賛の言葉が一言も無かった事に起因していました。

『並居る皆さんの前で、私に対する一言の褒める言葉も、感謝の言葉も無かったのは何事ですか。私は貴方に尽くせるだけ尽くして来た筈です。あれでは、よい妻で無かったと思われても仕方がありません。大勢の中で恥をかかされました。』と言う事でした。叱られた私にとっては、予想だにしない事に将に動転しました。私にして見れば、戦前の謙譲の美德というものを教えられていたので、『私の妻は非常に良い妻で、現在の私の在るのは、偏に妻のお蔭です』と言った事は言わない方がよいと思っていました。余談ですが、『私のかあちゃんはいっかつりもので、私は総てかあちゃんの指示通りにしています』と誇らしげに日常口に使っている人も居られますが。話は元にもどします。その時初めて、妻が完璧主

義で、一つの欠点も他人に見せまいと氣遣つて来た事に氣付きました。今まで、どんなにか夫の私には不満だらけの日々だったろうと思ひました。

『美智子さんは良く主人に仕えるね。私達には真似の出来ない事で、貴方のような良い奥さんは何処にもいない』と他人より賞賛の言葉を聞きたかつたので、すぐ内心の不満を押さえて来たのだな、と理解しました。どちらかと言えば、自分の思う通りに動いてくれていて、よい妻だと内心誇つていた私ですが、本当の性格が見抜けずに、相手の完璧主義に支えられていた事に四十年経つた還暦で初めて氣付いたのでした。驚いた親戚の人達が、『美智子を励ます会』を作つてやつと怒りを鎮めたという事がありました。それ以後は、良いところを褒める事に意を用いました。そして、完璧主義の妻を、その様に見ていると日常の事もよく理解出来るようになりました。女学校の因島出身のクラス会の世話も、社務所を使って毎年していました。徹夜で料理を作り、クラスの五人を接待していました。皆さんより、『有難うございました』とお別れの時の一言にお世話の仕がいを感じていたのだと思います。以後、妻の良い所を極力探し、褒める様に努めて来た積もりです。事故で亡くなるほんの数日まえ、『貴方の料理は一番美味しい』と褒めると、台所より、『貴方にならしたら美味しく食べて貰えるか一生懸命作っているのよ』との返事が返ってきました。

忘れる事の出来ない妻の一言でした。この頃になると、まずまず妻を理解出来ていたのではないかと思います。その様に、お互いが相手を理解するのには、永い歳月と、不断の努力が必要となります。又愛情と知恵が必要となつて来ます。知恵の一つに、相手の生い立ち、どんな家庭で、どんな話を親子でしていたかを、知るのも大切だと思います。同時に相手を自分の胸に抱き込むだけの度量も必要です。相手の良いところを見つける事に努め、賞賛の言葉、感謝の言葉、いたわりの言葉を惜しみなく出してください。そうすれば、必ず素晴らしい幸せな家庭が築かれ、一人の生活では味わう事の出来ない二人だけの幸福を噛み締める事が出来ると思います。お二人の前途に幸多かれと祈りつつ、お祝いの言葉と致します。お幸福に。

(広島県 齋島神社 宮司)

合掌も違反!?

田代壽興

総代の皆様に、「教育基本法の早期改正を求める請願書」の署名を集めていただきたくお願いを申し上げます。

これは友好団体であります日本会議が中心となりまして、全国の都道府県議会、市町村議会に一齐に請願書を提出するもので、熊本県議会においては既に昨年、西岡議長の方に採択がなされております。牛深市議会に対しましては、この五月天草郡市氏子総代連合会長と熊本県神社庁天草支部長と本牛深八幡宮氏子総代鍬柄会長の名において議長宛請願書を提出しており、六月議会において採択されるものと確信しております。

ところで、皆様のご家庭では食事をなさる時、どのようにされていますか。おそらく先ずは手を合わせ、いただきますと言ってから食事をなさって居られるのではないかと思います。富山県の公立小中学校では、給食の際、児童・生徒が「合掌」の号令と共に手を合わせ、「いただきます。」と言って食事をする慣行が行われていましたが、保

護者から「特定の宗教の強制であり教育基本法に違反する。」と批判の声が上がり、合掌の合図を中止する学校が相次いだということがありました。また、千葉県下の約六十の公立高校の武道場や体育館には、神棚が置かれていましたが、「政教分離」を定めた憲法と教育基本法に違反するとして提訴。千葉地裁・東京高裁は、神棚の前で礼や黙想を行うのは武道上の作法として、訴えを退けましたが、既に多くの学校で神棚は撤去された後であった、という事件がありました。日本の伝統を壊している教育基本法、こんな基本法で良いのでしょうか。

今日の教育の荒廃については、皆様既にご承知のように目を覆う程で、学級崩壊・不登校・学力の低下・援助交際という名の売春、国旗国歌を廻る混乱、学校長の自殺・親が子を殺す・子が親を殺すという風潮。最近では、小学六年の女児が給食の時間に同じ六年の女児を別室に呼びだし、カッターナイフで切り殺すという予想だにしない事件が佐世保市で起こりました。少し前には同じ長崎県で中学生徒が、幼児を誘拐し、駐車場の屋上から突き落とし死亡させる事件も起こっています。例を挙げればきりがありません。

その都度、各機関に置いては、それぞれの対応策を真剣に講じては居られますが、未だに問題は解決されてはいません。解決どころか、益々根は深くなって居ると言わざるを得

ません。

このままでは日本は潰れてしまう。教育の根本から見直さねばどうにもならないと言うところまで来てしまいました。

このため、国の中央教育審議会や民間教育臨調等から提言もなされ、国会においては「教育基本法改正促進委員会」が組織されました。今国会において審議されるものと期待しておりますが、年金国会に終わろうとしており、法案の上程すらありませんでした。

教育の根本は、教育基本法にあります。この法律の何処が問題なのでしょうか。

一言で言えば、国にとって、また国民にとって、大切なことが欠落して居るという一点にあります。それは何か、考えたとこの法律の制定のねらいにあると言えます。

ご承知のように教育基本法は、昭和二十二年三月三十一日に公布されております。アメリカ軍の占領統治下です。上智大学の渡部教授は、アメリカの占領政策は国家の根本を禁じた、と言って居られます。アメリカの国益のために、日本を二度と立ち直らせてはならない、そのためには国家の根源的な力になるもの、自分たちが国家の肝心要として大切に居るものを禁じ、日本を国家として骨抜きにしなければならない、として武装できない国にした。戦前の日本を全て否定的にとらえるように歴史を編成して、国としての誇り

が持てないようにした。そして国旗を禁じ、国歌を禁じた、と断じて居られます。

この政策を進めるのに重要なのは教育であり、だから教育の改革は旺盛に推進され、学校制度が変更され、教育内容が改変されたのです。以降六十年近く、基本法の一文も改変されずに今日まで教育は行われてきました。憲法も同じです。このままでは国にとって、また国民にとって、大切なものを欠落したまま教育が行われることになります。このままだと国は潰れてしまう、そう思います。

では何が足りないのか、多く提言されておりますが、私は教育の現場にいて一番思ったことは、基本法第十条の「教育行政」という項目にあると思っております。「教育は、不当な支配に屈することなく、国民全体に対し直接に責任を負って行われるべきものである。教育行政は、この自覚のもとに、教育の目的を遂行するに必要な諸条件の整備確立を目標として行われなければならない。」と書いてありますが、この条文を恣意的に解釈して、教育学者や日教組が、政府・自治体が教育の中身に口を出せないと主張、口を出すことが、即「不当な支配」だと騒いで、これまでの教育改革を不毛なものにしてきたと感じております。教育は国家の責任で行うという当たり前のことを明文化すべきと考えます。

このことをはつきりとさせて教育改革を成功させたのがイギリスのサッチャー首相だと

言われております。一九八八年教育改革法の第一条は「全ての公費維持学校への教育権は教育大臣にある。」と、教育に対する国家の責任と権限を明確にし、その目標達成度を評価する全国共通学力試験や教育現場の査察を行うようにしました。これにより劇的に改革を成し遂げ、今日のイギリスを築いたと言われております。

欠落したものは、国に誇りを持ち愛国心を育む歴史教育を行う、伝統を重んじ道徳をきちんと教える、宗教的情操の心を育てる、家庭教育は教育の原点であるとか、いろいろありますが、日本の心を取り戻すため、教育の基本法から見直さなければならぬところまで来て居ることは間違いないことだと思います。

早期の成立を期すべく皆様方のご協力をお願いいたします。

(熊本県 牛深八幡宮 宮司)

いま、家庭でなすべきこと

川崎太久美

ついこの間、街の中を歩いておりますと、交叉点のところに、「危ないと言うより、親が
示せ、子に手本」と書いた立看板が目にとまりました。

まさしく、その通りであります。

これは、道路をわたるときの注意に限らず、すべてのことについて言えることなのです。
昔から、「子は親の後ろ姿を見て育つ」と言います。これは、子にとっての親は、最大の
教育者であり、最高の教科書的存在であることを端的に言い表した言葉であります。

ちなみに、今日のこの村まつりも、子が親たちの神まつりのやり方をお手本として、つ
まり、「親たちの後ろ姿」を見て習い覚え、学びとったことを、先祖代々受け継ぎ、引き継
がれながら今日まで来たものであります。

だからこそ、「子が親たちの後ろ姿」から学び取るなかで得た、「神さまへの『感謝』と
『祈り』の心」が幾世代も幾世代も受け継がれ、引き継がれて、今日まで一直線に脈々と流

れているのを強く感じます。

これこそ、本当の歴史の重みと、伝統のすばらしさなのです。

ところで、今の世の中を見てください。新聞やテレビの報じるニュースを見ても、暗いことばかりが目について、明るいニュースはあまり目につきません。まるで、天照大神さまが「天の岩戸」にお隠れになったために、世の中全体が真つ暗闇になり、犯罪がはびこり、世の中は荒れに荒れて、すさんだ状態になったという神話の世界とよく似た状況になっています。

今のこの世の中を、明るく健康的で、凶悪な犯罪のない、活気に満ちあふれた、逞しく豊かな、和気あいあいとした世の中にするためには何が必要でしょうか。

皆様方はどのようにお考えでしょうか。

「天の岩戸」の神話では、天照大神さまを天の岩戸の中から再びこの世の中に連れ戻すことに成功すると、世の中は一瞬にして、たちまちまぶしい程の明るさを取り戻し、世の中から悪と犯罪が消え、健康的な、活気に満ちあふれた、豊かな世の中に生まれ変わったのです。

いま、天照大神さまのような役目を果たし得るのは、「神まつりを盛大にすること」以外

にはありません。

この町の「氏神さまのまつり」をはじめ、全国のあらゆる神社の「まつり」という「まつり」を見てみてください。どこか暗く、じめじめとした影を引きずったような「まつり」が一つでもありましようか。どこを探してもそういう「まつり」は一つも見当たりません。そのことからしても、真心から誠心誠意「神さまをまつる」、即ち、「神まつり」をするところこそが、この世の中を明るく照らし出す一番の基本であることがわかりいただけるものと存じます。

本日の村まつりも、われわれの祖先は、この村里を明るく活力あるものにしようとの願いのもとに、一軒一軒が神の恵みを受けるようにとの心配りから、年毎の家まわしによって「神まつり」をはじめられたのであらうと存じます。非常によくまとまった土地柄であるのは、祖先たちの「まつりの心」が今に生きているからにほかなりません。

氏神さまのまつり、村里のまつりと同様に、いま一番欠かすことのできないのは、毎日の「家庭のまつり」であります。

明日に向って、明るく、生き生きと、活気と希望に満ちあふれた、逞しく力強い人生を切り開いて行く生き方をするのは、家庭の中において、神の恵みに心の底から「感謝と祈

り」を捧げる毎日の「家庭のまつり」が行われているかどうかにかかっていると一言い過ぎではありません。

親が朝晩、神棚に向って「家庭のまつり」をしておりますと、それを朝な夕な見ている子どもも、親の後ろ姿を見て、自然と「神まつり」が身についてまいります。

「継続は力なり」と申します。毎日の「感謝と祈り」による「家庭での神まつり」を行っておりますと、それがその人の精神力や心の糧となつて、おのずとその人の人格や人柄が形成されてきます。それと同時にすばらしい家風が醸し出されてまいります。そういう家庭の子どもは、自然と躰やけじめが身についておりますので、他人や自分の命を大切にする心を持ち、「家庭内暴力」や「いじめ」「学級崩壊」の主役をなしたり、「人を傷つけ」たり非人道的な「強盗」や「殺人」のような凶悪な犯罪は絶対に犯しません。

家庭という社会は、国家や社会の最小単位であります。その家庭が狂えば、社会や国家が狂うのは当然のことなのです。

「習性」と成る」という言葉があります。毎日の「家庭の神まつり」の習慣は、その家に住む人のすばらしい、立派な性質となつて身につくのです。

親が子に手本を示し、子が親の後ろ姿を手本として学ぶ「家庭の神まつり」を続けては

じめて、この世の中は、明るく、活気に満ちあふれたみごとな世の中に変わり得るのです。
どうか、毎日の「家庭のまつり」を大切にしていただきたいと強くそう願うのであります。

(佐賀県 福富神社 宮司)

隠身かくりみ（神さま）が見える

木下 鏝二

神さまは身をかくしていらっしやいますので「かくり身」と申しますように、私達はそのお姿を見ることができません。

お姿が見えないので、奇しくも珍しい風習を伝えている地方がございます。

御当地の湖の都、松江市は、小泉八雲が「神々の国の首都」と呼んだように、神々の息吹きに満ちています。

その松江市に佐陀という地域があります。そこに出雲の国の二の宮「佐太神社」がございます。御祭神は猿田彦命です。

十月に佐太神社では「神在祭」かみありが斎行されます。別の呼び名を「御忌祭」おいみと申します。十月は出雲以外では、神無月と呼びますが、出雲では神在月、それは全国の津々浦々の神々が全て出雲に集まってこられるからです。

神さまたちは、先ず出雲大社に集まって会議をなさいます。それは十日から十五日まで、

しばらく休んで、第二次の会議は佐太神社で開催されるのです。日取りは二十日から二十五日の五日間、その間が佐太神社の神在祭なのです。

大変な人出でにぎわうのですが、社殿では鳴物は一切使わないし、参詣者も柏手を打たないのです。何故なら神々の会議を邪魔してはいけないとの配慮です。

御忌祭ともいうとおり、この期間中は、民間では歌舞音曲を慎むのは当然として、庖丁を使うことも、鋏や針を持つことも禁止。

神々はどこを通られるかわからない。もし刃物を使って、それが神さまに触れたら大変だということです。

また二十五日は神去日といって、家々では牡丹餅や小豆御飯等御馳走を造って神さまにお供えます。そして早くから戸締りをして一切外出なし。

神さま方の帰り途を邪魔してはいけないからです。このように見えないのが神さま、ところが、最先端をゆく科学技術が神さまを見せてくれたのです。

その一つが遺伝子工学の登場です。

私の地方の言葉に「親に似たガメン子」というのがございます。亀の子は成長しても亀、けして鯉にはなれないということです。

それは親から受け継いだ遺伝子のせいということは、園児も知っています。

「ヒト」の受精卵は、私達の命の種が芽生えた時から、両親から三十億づつ合わせて六十億の遺伝子を受け継いでいるということです。

その受精卵が分裂を繰り返して、特別の機能を持つそれぞれの器官を形造っていきます。頭の髪の毛からつま先までを創り出していくのです。

そして体重六十キロの人で、その細胞は約六十兆というとてもない数に達します。

その一つの細胞が、受精卵と同じ六十億の遺伝子を持っている。

そうしますと、私はこの百六十三センチ、五十二キロの体にも約六十億×六十兆の遺伝子を持っている。天文学を通り越した数です。

そして体の心臓や目・鼻・胃や肝臓等一つ一つの器官が、必要とする遺伝子情報のみのスイッチをONにして働いている。

誰に命令されるでもなく、心臓も胃もそれぞれも器官は懸命に働いて私達を生かしてくれているのです。

では誰れが操作してくれているのか？

最先端の科学が極めつくした後に、私達は大切な力を持った神さまの存在を実感出来る

のです。

遺伝子工学の中で、もう一つ人間の力を越えたものの実在を明らかにする究極の結果をお話いたします。

筑波大学教授村上和雄博士の著書、「遺伝子からのメッセージ」の中からほんの一部を御紹介致します。

地球上に生物が登場してからほぼ三十五億年が経っておりますが、その間地球上に生息した生き物は約一億種類だそうです。

それは、微生物からカビ、植物、動物、ヒトまで生きとし生きるもの全てを含みますが、現在地球上には、その内二%の二百万種類が生き残っているそうです。

その命あつたもの、また命あるもの、生きとし生きるもの全てが、兄弟姉妹、はらからだというのです。何故きようだいかと申しますと、全ての生あるものは、三つの共通性があるからだそうです。

まず、身体を組み立てるのに必要な設計図即ち遺伝子情報が同じ。

次に体を構成するもつとも大切な材料となる蛋白質が全生物共通というのです。

三つ目が体を組み立てるのに必要なエネルギー源がこれまた同じだそうです。

生命あるものの三要素、一、遺伝子暗号、二、材料、三、エネルギー、全てが原理的に同じということです。

このことが地球上の全ての生物は、同じ親から生まれた同一家族の証明です。

私達が、草花や緑を見ていると心がいやされ、動物に親しみを持つのは当然のこと。

さて、私達の祖先は、豊かな感性と、素晴らしい叡智を持っています。

ですから、全宇宙の根源的中心的神さまである天御中主神を感得し、更に創造発展して止むことのない産霊の二柱の神のお働きを日々のくらしの中で見出したのでしよう。

神さまは、姿形は見えない「隠身」ですけれども、極めつくした現代科学が到達した究極の結論、そこに見えてきたものは、日本神話の神々だったのです。

森羅万象、地球上の全ての物を、優しく矛盾することなく包み込む日本神道。

神道こそ世界の宗教たり得るとの一大原理を導き出すのです。

(熊本県 大江八幡宮 宮司)

あなたの家に神棚を

寺本正徳

“神棚に しあわせ願う 小さな手”

“神棚に 朝一番の ご挨拶”

神社本庁が募集した「家庭まつり」の標語です。

日本の家庭では、「家庭まつり」が思いやりの心を育み、神仏の前に今日も一日ありがとうございますと「手を合わす」この姿は、ごく自然の姿でありました。

私どもが子供の時代は、各戸に神棚や仏だんのある光景は、特別に珍しくもなく、ごく普通の姿でありました。

なんでも江戸の中期には、九割もの家庭に神棚があり“朝一番のご挨拶”をし朝夕に感謝の誠を捧げていました。

これも偏に伊勢の神宮に奉仕された「御師」の力大なるものがあつたと思います。ここに第一生命経済研の現代人の死生観調査の報告があります。

家庭に神棚や仏だんがある

現 在 五〇・三%

子供の時代 八二・七%

朝夕に神棚や仏だんにお供えする

現 在 四九・二%

子供の時代 七五・四%

(この調査は平成十四年九月全国の四十六才～六十九才の男女九〇〇人 有効回収八七一
人)

この報告を見るにつけ、神社界が総力をあげる神宮大麻一〇〇〇万世帯頒布の困難さを垣間見る思いがします。

さて、日本の家庭各戸に神棚や仏だんを祀るようになった歴史を見てみると、西暦六八五年の天武天皇の詔に発します。その根拠になる記述は、日本書紀天武天皇第二十九卷下の項に起因すると考えます。以下その記述に基づいてお話します。

第四十代天武天皇十四年(六八五)三月二十七日の詔として、

「天皇は皇祖の御魂を祭り給ふ

天社地社の宮社を修理伊勢の大宮は二十年に一度修理せよ

各戸に仏舎を作り禮拜供養せよ」

と詔されました。

天武の御世は、壬申の乱があり、この乱れた世を平定するには、「国民に等しく宗教心を涵養する」にありとお考えになり、御自らも「遠い祖先を神として、近い祖先を仏として」朝夕にご給仕をなさり感謝の誠を捧げられました。

そのように見て参りますと、天武の詔こそ各戸に神仏まつりをする起原だと私は思います。

このように数々の業績を残された天武天皇は、朱鳥元年九月九日五十六才の生涯を終えられました。

第四十一代持統天皇は、先帝のご意志を継承され持統天皇四年（六九〇）に第一回の遷宮をなさり平成二十五年には第六十二回の遷宮がなさるべく準備中でございます。

持統天皇で有名なのは、萬葉歌人としてであります。

春過ぎて 夏きたるらし 白栲の

衣乾したり 天の香具山

故犬養孝先生は、この歌の風格は、壬申の乱後の宮廷の安泰期の氣運なしには生れてこない秀歌だと解説しておられます。

持統天皇は、女帝でありましたが、臣下が政治に参画する機会を設けたり、朝廷の儀式を重んじ、律令国家の建設を意識し国民に戸籍を作るように命じ、「康寅年籍」を作成されたり、等々藤原氏の力添えにより数々の業績を残しました。

大宝二年に（七〇二）ご崩御になり、先帝の鎮まる明日香の里檜隅大内陵に合葬されました。

天武の詔を受け継いだ日本の家庭では、荒神様をまつり、水神様をまつり、厠にも神の宿りを感じ、人と自然と、神と仏が一体になり家庭まつりにより和の文化を育んできました。

これこそ日本固有の文化であり、宗教観であります。

渡来の宗教と、土着の宗教が互いに溶けあい、ある時は牽制しまたある時は智慧を磨き美しく世界中のどこの国にもない独自の宗教文化を醸成してきました。

だがこの処にきて、宗教を矢鱈に固苦しく解釈し、数千年もの間つたえきた日本人個々の宗教理念までも否定する動きのあることを許すことが出来ません。

弾きもしないグランドピアノを置く場所があっても、神棚を設ける場所のないという家庭の多いこと。

“神棚に 朝一番の ご挨拶”

この姿のない家庭に「おもいやりの心、和の心を育む」生活はありません。

あなたの家で、何気なくなさる“神棚まつり”こそ、あなたの家の宝物なのです。

神棚まつりの心が幸福を呼ぶこと請け合いです。

“あなたの家に神棚を”

神道は、浄い心の教えです。

神道は、正直なる心の教えです。

神道は、感謝の心の教えです。

今日は、神棚まつりが「和の心、やさしい心」を育くむ意義を戴いて帰って下さい。

また天武天皇の詔の意味したものを戴いて帰って下さい。

長時間のご静聴ありがとうございました。

合掌

(大阪府 稻荷神社 禰宜)

人生長いか、短いか

渡邊知宣

一、いよいよ還暦

今年、還暦の歳を迎えました。私が生まれた年の干支は甲申（きのえさる）でしたし、十干十二支の干支が一回りして六十一年目の今年は、再び同じ甲申の年です。いわゆる本卦還りをした事になります。

還暦は人生最大の節目の年であり、また第二の人生の出発の歳であるとも考えられました。私自身もこの歳を意義あるものとすべく、幾つかの計画を立て実行中です。

二、還暦の歳の計画

まず第一は、人生の再出発となるこの年にも、ぜひ皇居の勤勞奉仕をしたいという事でした。この事については、今年三月下旬の桜の花も満開の季節に奉仕団を結成し、第六回目の御奉仕を実施する事が出来ました。また合わせて伊勢神宮、熱田神宮にも参拝させていただきました。

三日前に除幕祭を斎行したばかりですが、神社の境内に建立致しました御奉仕記念の石碑には、前の靖国神社宮司であり、元講演研修会会長として私共をご指導いただきました大野俊康先生に「三種の神器のころ」という文字を揮毫いただきました。

「皇位継承不可欠の三種の神器、即ち鏡、玉、劔は、唯皇位の御證としてだけでは無く、夫々に日本民族が永久に遵奉すべき知、仁、勇の三徳のころが込められている。」と講演研修の折に、新米神主の私に教えていただいたのが大野先生です。先生には心から感謝しています。

さらに二つ目は、神職を志す前に大阪の松下電器産業(株)の技術部門に奉職していました。が、当時電池製造の技術援助のためベルギーの工場に数ヶ月間滞在した事もあり、この還暦の年に青春時代の思い出の地を再び訪れたいという事でした。

五月の爽やかな季節にベルギー、オランダ、ルクセンブルク、いわゆるベネルクス三国を訪問する事が出来て現地の人とも再会することが出来ました。地球の裏側の、日本とは大きく異なった歴史と文化をもった国々をあらためて訪問し、今回は仕事と違い悩み苦しむ事も無く楽しむ事が出来ました。素晴らしい思い出となりました。

三つ目は、今年もまだ半年近く残されていますので若い頃より好きであった登山を、出

来れば日本一の山である富士山に一合目から登りたいと思っています。

このように私自身は節目の年を有意義に過ごしつつあります。今日は、以上のような事を行いながら心に思っています事を少しお話してみたいと思います。

三、還暦の歳に思うこと①・・・人間の寿命

明治維新の礎を築くために命を捧げられた吉田松陰先生は数え年三十歳、高杉晋作は二十九歳、久坂玄瑞は若干二十四歳、坂本竜馬三十三歳、立場は異なりますが今年話題の近藤勇は三十五歳の生涯です。何事も無く過ごされた人々に比べれば、半分以下の短い人生です。しかし夫々に普通の人々より遙かに密度の濃い人生を送られたとも言えるでしょう。

日本地図づくりを五十六歳で志し、全国をくまなく測量し続けられた伊能忠敬七十四歳、鈴木貫太郎は七十歳の侍従長の時に二二六事件の凶弾に見舞われ九死に一生を得て、終戦時に総理大臣として昭和天皇と阿吽の呼吸で日本を救われた歳が七十九歳、そして帰幽八十二歳。

このように歳若くして情熱を燃焼し尽くされた人々や人生の終盤といわれる年代になって大きな仕事をなされた方々などさまざまです。

先人の生き様や死亡年齢を考えることは、今までにも励みになる事が多々ありました。

二十歳三十歳代の頃は、命をかけて国のため人々のために情熱を燃やし、若くして散っていかれた人々の如く自分も頑張らねば、と励みになりましたし、また自分自身が四十歳五十歳代ともなってみると晩年に大なる仕事を為された方々を手本にせねば、という気持ちにさせられてきました。

そして迎えた還暦、数え六十一歳の年です。考えようによつては、これからの人生は「もうけもの」と言えなくもありません。

では、幸いにも「もうけもの」となったこれからの人生を、私はどのような心構えで過すべきでしょうか。

四、還暦の歳に思うこと②・・・授かった生命

生きている私たち人間は、肉体という物質と、目には見えない霊的なものの、いわゆる御霊より成り立っています。

このことは人の死にゆく様をみていれば、理解される事です。死の瞬間、それまで動いていた人が瞬時に動かなくなり、その体から目に見えない何かが失われ離れてしまった事が分かります。これが御霊、たましいと呼ばれるものでしょう。そしてこの肉体と御霊を、私たちは祖先祖神と天地自然の恵み、即ち神さまから授かっています。

死と同時に肉体と御霊は分離し、肉体は時の経過と共に分子や原子に分解され、自然界へと帰っていきます。

肉体から離れた御霊は当然目には見えませんが、残された子孫や人々や国を守る御霊となったり、場合によっては禍を生ぜしめる御霊となったりするかもしれません。

「日の本に生れ出でにし益す人は神より出でて神に入るなり」

この歌は、江戸時代の伊勢神宮外宮の神主であった中西直方が詠んだものです。日本人の死生観を現したものとして有名です。

私共の恩師、石井寿夫先生は

「わが魂は大空にま輝く日の大神のみもとに舞い上がり、天皇命のしろしめす祖国日本を、同志諸兄と御子孫とを永遠に見守ります。」

と遺言されました。今日も高い所から私共を見守っておられることと思います。

私たち人間は、神さまから与えられた肉体と御霊を最大限に役立たせる義務があります。肉体は生きている間だけです。一日も長く使わしていただく事ができるように健康管理に留意せねばなりません。そして御霊は死後も人々に影響を与え続けますので今の内に、より健全に、より清らかに、より大きなものになすべく勉強努力をし続けておかなければ

なりません。

このことが、生命を与えていただいた神様へのご恩返しであると思えるようになりました。

五、第二の人生を有意義に

人生を長いと思うか短いと思うかは人さまざまでしょうが、とにかく私の第一回目の人生は終わり、いよいよ第二回目の人生が始まりました。

第二の人生のスタートの歳に、神話の国出雲の地へ来る事が出来て、出雲大社で勉強させていただけることをありがたく思っています。

人間は自分が幸せになって半人前、他の人々を幸せにして一人前とか、また他の人々に如何に良い影響を与えられるか、如何に多くの人々を幸せに出来るかで人間の価値が決まるとも言われています。

これからは、このような事をさらに意識しながら、第一回目の人生を反省し、また経験を生かして第二回目の人生を有意義におくらせていただきたいと思います。

八百万神々に守られて

木下久榮

数人の集まりで、「子供達から神様について質問されたら、どのように説明したらいいでしょうか。」とのおたずねがありました。

科学万能主義、実証主義の教育を受けた子供達には、納得のいく説明をしないと神様を信じる心は生まれないでしょうし、靈魂の存在も認めないでしょう。

神様について、私達も漠然としたとらえ方しかしていないので、この機会に考えてみたいと思います。

私達のまわりには、多くの神々様がおられそれぞれ御自分のお働き、即ち御神徳を持っています。このように、多くの神々様を信仰する宗教を多神教と申します。

世界には、全知全能の一人の神様が、すべてを司っておられるという考え方の一神教があります。

しかし、どこの国も神様を信仰しているという事は、世の中には、人の力ではどうにも

ならない神秘的な事、不思議な事があるという事に人類が気づいたからです。

例えば生命の誕生、体のしくみ、遺伝子の問題、宇宙の神秘や自然現象・自然の攝理など、すべては神業というか、目には見えないけれども人間の力を超えた偉大な能力をもった方がおられて、何事もその方のお力というか、靈の力、エネルギーによって動いている事を感じ、「偉大なる方」の存在を認めざるを得ないのです。

最近、多くの科学者をはじめ、いろんな人達が、人間の力を超えた神秘的で不思議な力を持った偉大な方の存在を認め、「サムシンググレート（偉大なる何者か）」とよんでいます。

もともと日本は、豊かな自然と風土に恵まれた農耕民族ですから、日常生活の中で自然界との深いかかわりにより、神様の存在に気づき自然に信仰が生まれて参りました。人間の力を超えた神秘的で不思議な自然現象・自然の攝理などに対する恐れや驚き、また、気候の変化と農作とのかかわりを通して、作物の豊穡を願い、自然の恵みやお力も神様として崇め、畏れ敬い、更には共同体の平安を祈りました。当然、稔りの秋には感謝の誠を捧げました。祈りと感謝は個人の信仰として、農耕儀礼として、様々な祭りとして、多様な形をとりながら日本人の生活の中に根づいていったのです。

それから、私達の先祖は物を単なる物体と見ないで、命を与えて参りました。砂つぶのことを「石巢比売神」と申しますが、優しくてかわいらしいお名前は、日本人の豊かな感性を垣間見るような気が致します。

では、古代の人々は、神様の起源をどのように考えていたのか、神話にさかのぼってみたいと思います。

神話には、天地の創世から日本の国が統一されて発展していく過程で、進化し生成発展していく様子が書かれておりますが、それによりますと世界の一番初めの時、高天原に御出現になった神様は天之御中主神、次に神産巢日神、高産巢日神が出てこられました。この神々様は物を創り出す貴い神様で、造化三神と申します。

その頃、国土は水に浮いた脂のようにどろ／＼しており、水母のようにふわ／＼漂っている状態で、光もなく混沌としていました。

そのどろ／＼した中から、葦の芽が生えるような勢いで生物を生み出す神様と、萌えあがる生命力を支えて下さる大地の神様が出現なさいました。

その後次々に神様が御出現になって、天地の形成にかかわられました。そして、伊邪奈岐命、伊邪奈美命の夫婦の神様が御出現になって、浮き漂える国を造り固めて完成という

事になり、国生み神生みをされて国造りの基礎ができ、いろんな条件が整いました。

その後様々のことがありましたが、伊邪奈岐命が禊をして心身を清められた時に天照大御神様が御誕生になりました。

天照大御神様を中心として神々様の御活躍があり、壮大なドラマがくりひろげられましたが、大国主命の国ゆずりによって平和のうちに天孫降臨という大事業がなされました。

神話の天地創造のようすは、ちょうど四十六億年前に地球が誕生し、どろ／＼のカオスの状態から長い時をかけて進化し、発展していく様子と重なっているような気が致します。

大自然の中には、目には見えないけれども人間の力を超えた偉大な力、霊の力やエネルギーが働き、神秘的で不思議なでき事があるという事を古代の日本人は、豊かな感性と澄んだ心の目で感じとり、そういうお力を神様として崇め、そのお力により天地が創造され進化し、生成発展したと考えたのでございましょう。

神話は、天地形成の様子や順序を神々様の御登場と御活躍という形で、神格化して表現したといわれており、これが日本の神話の特徴だそうでございします。

神話は、歴史的事実を織りまぜながら信仰的事実の物語として、私達の信仰のよりどころとなっています。

ところで、天照大御神様は、とても尊い神様で太陽のように限らないつくしみとお恵みによつて、自然界の生命の根元として仰がれると共に、日本の国家の基礎を築かれた神様でございます。

また、皇室の御先祖にあたられ、日本民族全体の大御親神様であり、天照大御神様をおまつりしてある伊勢神宮は、本宗とよばれ、国民の総氏神様でございます。私達はお伊勢様の氏子でございますので、毎年お伊勢様の大麻をいただいております。

天照大御神様は、八百万神様の中心でございます。八百万神々様はそれぞれ御自分のお働きをもっておりますが天照大御神様を中心にして、大木の枝葉が分かれるように、天照大御神様の広大無辺の御神徳の一部を受け持つて、協調しながら仲よくまとまっております。

そして、この神々様に、サムシンググレートのお力が宿っていると私は考えます。

子供達から神様はどんな方かと聞かれたら、日本では、天地の成り立ちから、日本の国づくりに活躍された多くの神々様と、自然の恵みや自然のお力、身のまわりの物にも神様のお姿を見い出して神様として崇めてまつり、更には国や社会のために力をつくされた人々に対しても感謝の気持ちをこめて神様としておまつりしていると答え、多くの神々様

がいらっしゃるので八百万神ということや、私達は八百万神々様に守られ、恵みをいただいていることを教え、祈りと感謝の大切さに気づかせたいと思います。

それに日本人は、御先祖をととても大切にしておまつりするということも話したいと思います。

(熊本県 大江八幡宮 禰宜)

家族

原 茂子

半年余り前、私は素敵な女性との出会いがありました。彼女は私より三才年下で独身。長い髪を後で三ツ編みにし、とつても若々しく魅力的だったので、つい「どうして結婚しなかったの」とたずねてしまいました。

すると彼女は「あ、そのこと、私の両親はとつても仲が悪くって、いつもけんかばかりしてたんで（結婚なんてつまらない）と思ったんよ」とあっけらかんとした返事が返ってきました。（きつと、両親のことを快く思っていないのだ）と思った私は、次の言葉を続けることが出来ませんでした。同じサークルに入会したこともあつて、その後も度々顔を合わせることもありましたが、つい最近、「ああ疲れた。もうくたくた。九十才近い叔父が私の狭いマンションに泊って、きのう九州へ帰ったのよ。空港まで送り、無事に家に帰り着いたとのことでヤレヤレ。でも母の法事に参列してくれて嬉しかったわ。今日はその片付けでくたくた。」とにこにこしながら話してくれました。お兄さんに両親の全てのものを引

継いでもらい、お仏壇だけはしばらく私にお守りさせて欲しいとお願ひし、御先祖のおまつりをさせてもらっていることで「生きてる間に少しも親孝行出来んかったんで……」。佛さまは何んにも文句や不満を言わへんし、自分の思うようにお供をし、自分の好きなようにおまつりさせてもらってるんよ。でもちよつぱり、両親を独り占めして、ずるいなあ！とうしろめたい思いだけど、毎朝の『おはよう』から始まって、夜にもいっぱい話しかけて、ほんとに幸せやなあと思ってる。だからちつとも、淋しくは無いんですよ。」私はこの言葉を聴きながら、彼女の心の中を覗きみたような驚きと、感動を覚えしました。彼女の両親への思いは、私が当初思っていたのと全く違っていたのです。彼女の両親への思いは深く温かく、（親に愛されていた、親に認められていた）という心の裡が自然と伝わってきました。

人間としての生きざま、人としての育ち方をしばしば樹に例えることがあります。

赤ちゃんが初めて氏神様にお詣りの折にも祝詞の中で「五十檀八桑枝乃如久立栄迎志米賜閉止」と神様に申し上げます。

幹が太く、枝は広く四方に伸び、緑の葉を天高く茂らせた大木。そしてその根っこは、地中に深く広く伸びていくが如くに、子どもが成長いたしますようにと祈るのです。

又一つの家族にもこのことが当てはまります。さしずめ、幹は親。その先にある枝や葉っぱは子供達でしょうか。又根っこは御先祖様でしょうか。私達は地上にみえる花や実を愛でたり、葉っぱの色づきを心待ちして日暮しをしますが、ともすれば土の中の根っここのことを忘れてしまいがちです。根っこを切り離してしまつたらどうでしょう。幹や枝は萎れて枯れてしまいます。私達人間もこれと同じように御祖先とのつながりを断ち切つてしまつては自分の身も心も亡びてしまうのです。

このように話していると我が家のことも氣になつてまいります。私の家族は、同年夫婦の夫と私。そして長男夫婦。中学二年の女の子の孫、小学五年の男の子の孫の六人で、家族総出でお宮に御奉仕しています。孫達は浪速神樂の奉仕や例祭の折にはだんじりに付ける幣を三宝にのせ、宮司・祢宜の後から一緒に境内へ出て祓のお手伝いをします。三世代が一つ屋根に生活することは、私達の子どもの頃は当り前のことでしたが、今日ではとてもむずかしくなつてきています。こんな思いを代弁するかのように、七月十三日の読売新聞朝刊（編集手帳）に次のような記述がありました。「清少納言の『枕草子』には、『ありがたきもの』（めつたにないもの）として『姑に思はるる嫁の君』を挙げています。ひとつ屋根の下に住む者同士、何かとむずかしい間柄になりがちなのは、平安京の昔からそう変

っていないらしい。言うはやすく、のたぐいではあるが、*“親しき仲に垣を結え”*と古人は教えてきた。竹垣ならば相手の姿が透けて見える。ほどほどに風も通る。それでいて一定の境界線はあり、具合がいいのだと。」

垣をいつしか壁に作り替えないように心しなければと思います。

私は明日十五日に六十五才になり色々な機関からお知らせが届きます。貴方はもうお年寄りですとの通告の様に思えてこの一ヶ月余りは複雑な気持です。そして今まで親だ、木の幹なのだと思つたのに、幹は息子夫婦、枝葉は孫、私達は木の根っこになる準備に入らねばならない時期になつてきているのだとの気づきがありました。うちの息子も「両親は仲が悪くて、よう夫婦げんかしたつたなあ」と言うに違いありません。

人や木が生き／＼と育つ為には自然の力・太陽・空気・水等の恵みをいただき、神様に生かされていることも忘れず、そして彼女に出合つて、根っここの大切さを今一度考える機会を得たことを感謝しつつ結びと致します。

(大阪府 夜疑神社 権禰宜)

よみがえれ日本の魂

—映画「ラスト・サムライ」を観て—

大野康孝

「お父さん泣くよ……僕、感動したよ」仲間と映画を観てきた中二の長男は、帰宅するや否や興奮して一氣に申すのです。そうして「誕生日おめでとう！はい、これ」と殊更にぶつきらばうに折れ曲がった茶封筒を取り出すや、また何処にかすっ飛んで行きました。

そっと開けると、中には一枚の映画券。滅多にない予想外の大きな感激でした。

この年の正月明け、世界中に全国各地に、満を持して一斉に封切されたハリウッド発の日本映画『ラスト・サムライ』は、真に「蘇れ日本！」と叱咤する天地の神々と英霊の声かの如き、心に響く、素晴らしい日本のサムライの心を讃えた魂こもる作品でした。

時代は明治維新の草創期、なし崩しに伝統文化を葬り去らんとする急進の欧化政策。近代化を目指す政府軍の指南役として日本に招かれたトム・クルーズ演じるオルグレン大尉は南北戦争の英雄でありながら、今や誇りも名誉も見失い抜け殻のように生きているので

すが、ここで過去の遺物として葬り去られんとする、渡辺謙扮する勝元盛次率いる最後の武士団に遭遇します。そうして捕らわれの身ながらも客として手厚く遇せられ、心休まる日々を彼等と共に送る中に、その凛々しい生き様に本来の自己を取り戻してゆきます。

やがてついに魔刀令が發布されるや、新旧の間にあつて悩まれる、若き明治大帝に忠誠を誓うサムライ達は、死をもって己の声を届けんと立ち上がります。その激しき戦いの中に今や雄々しく立ち直った碧眼のサムライ、オルグレン大尉の姿が共にあるのです。

独り生き残った彼は、勝元の遺志を体して宮中深く参内。明治天皇に拝謁して、

『朕の希望は日本国の統一だ。強力にして独立を誇る近代国家を確立したい。我々は鉄道や大砲や西洋の衣服をも手に入れた。しかし、日本人たることを忘れてはならぬ。この国の歴史と伝統を。』との、劇的な、もって瞑すべき玉の言葉を賜るのです。

大楠公に薩摩の西郷勢、肥後の太田黒伴雄命以下の神風連諸烈士。あるいは近くは、大東亜の戦争に華と散華された特攻の勇士達……。その高貴なる生き様と、戦い振りを重ねたかのごとき武士の魂の軌跡、あわれを見事に描き、った崇高な作品でした。

敷島のやまとごゝろを 人間はば朝日ににほふ山さくら花 本居 宣長

おのずから高く貴しすめろぎの 神のみくにのやまと櫻は 佐久良東雄

以下、映画のパンフレット解説の冒頭を紹介します。

『かつて日本にサムライと呼ばれた男たちがいた。その魂は桜花の如く。…咲く花の美しさ、散り際の潔さ』。桜は散るために咲くのではない。己の天命を知り、そのかけがえのない命を、一分の迷いもなく全うするからこそ、美しい。…（後略）…』

泣きました！作品全体を貫くテーマは何と、日本人の日本人たるその「名誉と忠誠心」なのです。かくも久しく武士の生きざまを美しく描き、世界中に感動を与え、日本民族のアイデンティティを大きく揺さぶった超弩級の映画は未だかつてありません。しかも米国ハリウッド発。これをみた日本人皆が心をうたれスクリーンの前に涙したのです。

…妻も子も、友達皆が…。何度も映画館に通った人が居ます、もちろん私も同様に…。

作品は、雲に高く雄々しく聳え連なる吾が大八洲の映像より始まり、

『日本は剣でつくられたと言う。古の神が剣を海に浸け、それを引き上げると四つの雫が滴り落ち、それが日本列島になったそう…』と、古事記の国産みの段が字幕入りの英語で印象的に語られつゝ始まるのですが、銘記すべきは、自然の風景の中に静かに建てられた素朴な鳥居と人々の暮らしが、神道という言葉も神社に詣でるシーンも全くないのですが、自ずからにして「神国日本」を余すところなく見事に表現してくれて居るのです。

こゝで、オルグレン大尉の述懐する心の変化を紹介する事とします。

『理解を超えるこの国…』。本来教会とは無縁の人間で、戦場での体験で“神の意志”に疑問を持った。…だがこゝでは、神聖なるものを感じる。それは不可解ではあるが、確かな“力”を感じるのだ。こゝに来て久しぶりに安眠も得た。…吐息のひとつにも、一杯の茶にも生命がある…』

原作者であり監督であるエドワード・ズウィック氏が、外国人でありながらくまでも親日家として、日本の歴史と伝統文化に憧憬のまなざしを熱く注ぎ、心から日本を愛して「蘇れ日本！蘇れサムライ・スピリット！」と、名だたる彼我の大スター達を結集しその想い一つにして、かく不朽の名作を世に送り出してくれた事は実に感謝に堪えません。

先月よりは待望のDVDも発売され、家庭でもまた繰返し見ることが可能となりました。心を洗うこのハリウッド発の「大和魂」の逆輸入が「日本帰りの道標」の一つになればと絶賛、期待して止みません。

あゝ！道義地に墜ち、滅亡の淵に立つがごとき混乱極まりなき現下の祖国日本。今こそ岩戸開き回天維新の秋が望まれてなりません。その兆しと萌芽も少しく見えてきました。

わが国は神の御国！ この神話の里の出雲大社に神集いしは眞に神機なるぞと、

須佐之男神の八岐大蛇退治の大神業を仰ぎ奉りて、劔の魂を取戻さなければなりません！
大國主の大神様の國土平定の大御業に神倣い、誇りも高く、八千矛の神より賜いし英智と
勇猛心を奮い起こさなければなりません！

最後に、明治天皇の御製を高く掲げ、熱く奉唱して、今後の励精の発露とします。

〔大和だましい〕 世の中にしられていよゝみがゝなむわが敷島の 大和だましい

〔劍〕 身にはよしはかずなるとも劍太刀とぎな忘れそ 大和心を

御清聴ありがとうございます

（熊本県 本渡諏訪神社 宮司）

心に残るあの一言

河本文夫

本日は敬神婦人会の総会とのことです。御座います。会員の皆様ようこそお参りになりました。皆さん、いかが、お過ごしですか。お元気なお姿に接し共に喜びたいと思います。さて、世間では、日々色々な痛ましい事件が報道されます。本当に、こころの痛みを感じると共に、これではわが国の将来をと！私のような者でも憂いを感じます。これもひとえに家庭が崩壊しているのでしょうか？その家庭にあつての基本はご夫婦の関係でしょう。

出雲大社での結婚式の際、「神のみおしえ」というのが御座います。ちょっと紹介してみましょう。「古より家の栄ゆるも、衰うるも夫婦よりはじまり国の治まるも乱るるも男女より」 うんぬんとあります。まさにすべての基本は、夫婦にありと、教えているわけです。さて皆さま如何ですか。ご主人と信頼関係で結ばれていらつしやいますか？多分、ここにお集まりの皆さんは赤い糸に結ばれ、「愛しているわ。僕だつて」とお互いにラブラブで、一緒になられたのでしょうか。まさかこんなはずでは無かつたとはおつしやいませんか。

ね。でも本心は、「赤い糸は昔話、もうそんなのはとくに色あせ、糸も切れて今じゃもうコードレスよ。」と、こうおっしゃるかも知れませんか。ちょっと悲しいじゃありませんか。でもそんなことは無い。みんなご主人を愛していraftしやいます。そうでしょう。まさか、私が、結ばれているのはヨン様よ。じゃないでしょうね。

さて、皆さんのご主人は、奥様のことのようにお思いでしょうか。中々、その心はわからないものでございます。本日は、ここにお参りになりました奥様方に、メッセージがでございます。皆さんのご主人の奥様に対する思いをヒヤリングしてまいりましたというのは、冗談でございますが、私が昔、大変親しくして頂いたある方の事を紹介してみましよう。

それは、もう二十数年まえのことになりますでしょうか。わたしが、まだ民間の一企業に勤めていたころのことでございます。私は、一介のサラリーマンとして、某企業の工場につとめておりました。ところが、異動を命じられ、東京本社へ。そうこうするうち、工場で上司であった、部長まで、東京本社に異動、私の属する事業部に事業部長として、赴任して参りました。

工場と本社では、仕事の内容は、一八〇度違います。今度は、商品の売り込み、市場開発と、お客さまとの、お付き合いも多くなります。その部長は、昔、工場で私が部下であった関係もあってか、お客さんとの、商談の食事の席に、私を同席させてくれました。時は良い時代。食事の後は、二次会へと流れてまいります。そこはお決まりのパターン。カラオケが待っております。お客さんに続きましては、事業部長へと。私も次第に、その方々の十八番を、覚えて参りまして、タイミングよく、さ課長さんどうぞ！とお客さんへの気を使って神明奉仕ではなくカラオケ奉仕で御座います。

さて、私の上司の事業部長。このような席で、必ず歌う十八番があるのです。ちょっとイントロを歌ってみましょう。

（イントロ歌う）

そうです。北島三郎さんの「歩」でございます。肩で風切る王将よりも、
そして二番。あの子いい子だ、離れもせずに、俺を信じてついてくる、
部長さんは、必ずこの歩を歌うのでございます。

お酒も入っております。まさに気分上々。でも決して三番は歌いません。なぜか判りません。

そして、夜も更けお客さんをお送りし、私たちは、赤坂の繁華街を抜け、日商岩井の本社ビルの前の横断歩道を渡りそして、日枝神社へのぼって参ります。

これはいつものパターン。野球の勝利の方程式のようなもの。

日枝神社の前でお賽銭をあげ、二拝二拍手一拝と。

このような、よき時代が続きました。あるとき、部長さんに聞いて見ました。日枝神社で何をお祈りされているんですか？

「ハハハ」といって教えてくれません。

しかし、時は流れ、その事業部長も、会社を去るときがやってまいりました。

そんな頃、あるお客さんから、部長さんの送別会を開きましよう。河本さんも同席してください。お誘いがありました。

最後はいつものように、「歩」で締めくくられました。

今日は、月がとっても青いから、と皆一緒に帰ることになりました。

今日は、金沢さん（お客さんの名）も、一緒に日枝神社に参ろうということで、階段をさがり参拝です。そこで、私は、部長に、もういいでしょう。教えて下さいよ。何を祈ってらっしゃるんですか？と申しますと。

「そうだね、それは二つある。

ひとつは、私をいつも支えてくれてる、河本君を始め、スタッフみんなへの感謝。そしてもうひとつは家内への感謝よ。僕はこの歳になって始めて家内の有り難味がわかった。」とこうおっしゃたのであります。

「僕は東京に来て本当に良くわかった。家内の有り難味が」

そうなんです。部長さんは、最初単身赴任だったんです。

そして「金沢さん、奥さんを大事にね。河本君も奥さんを大事にせねばいかんよ。」とこのように、おっしゃたのであります。

これでわかりました。部長の十八番の「歩」の意味が。

そう

二番であります。

「あのこいい子だ 離れもせずに 俺を信じてついてきた」奥さんへの気持を歌っておられたでしょう。

そういえば、時には何かしら目に滲むものを見たりもしています。

皆さんのご主人もきつとこのようなお気持ちでしょう。

口には出されませんが。

たまにはヨン様もよろしゅう御座いますが、やはりご主人様が一番奥様の事思つてらっしゃいます。

氏神様への参拝！ この境内に参りますと何か心が清々しく、日々心は揺れますが、その心がりセットされる思いではないでしょうか。

心进行リセットされ、本日は、夕食にお刺身でも出されて、ご主人様に「いつもご苦勞様」の一言を沿えて、夕食をなさってください。明日から又赤い糸で結ばれた頃の気持ちがいかがえり共に豊かな心で日々お過ごしになれると思います。

（ヨン様とは、この頃、中年の奥様中心に大ブレイクした韓国のタレントの事です）

（山口県 宮尾八幡宮 宮司）

私と木食仏海

井上忠衡

私は神主の家に生まれ、育ち、古めかしい書物を読んだり、骨董品のような物を見ながら今日にいたりしました。

古文書を読む、それは読まなくてはならないという、切羽詰った羽目にたたされて、読みだしたもので、とりわけ古文書の勉強をしたのではなく、たゞ、一般の方々より古文書等を読む機会が多かった位のことでした。

北条市猿川に篠原壽という簡易郵便局長がいましたが、先年帰らぬ人となってしまうした。或る日、篠原さんは「井上宮司さん、家に古い書き物があるんだが読んでくれないか」という、ご依頼でした。私は後日、これを借用して読ませて頂きましたところ、これが立岩出身で、千体仏を刻み、全国を行脚し萬民を救済した「木食円空」や「淨円」等と同じく彼の偉大な木食仏海上人の生涯記録誌でありました。

この記録誌を手がかりに、調査を進めました。その結果、風早三十三観音菩薩とその霊

場を見出すことができたのです。この霊場があとで、北条市のハイキングコースとなり、オリエンテーリングのチェックポイントとなり、また、北条市文化財巡りのコースにも加味せられ、観音菩薩や地藏菩薩の研究者にとっては、身近にあつて然も手頃な拝観研究仏像となり、そのうえ、宝暦三年癸酉（一七五三年）正月吉祥日、本願主、木食仏海、自作の三十三観音菩薩霊場巡拝路の版木も探し当てることができたのであります。（これがその版木で印刷した巡拝路です。）

このように古文書を読み、仏像などを拝観する機会に参加者と共に数多くめぐり合わせました。これらを通して祖先崇拜の心を養い、市内の文化財保護を始め、体力づくり、人の輪づくりなど、北条市文化教養活動向上のために微力を捧げることができたのであります。

神主が仏像の研究をしたり、神道人に仏像のお話をする、それは筋違いも甚だしいのでありますが、しかし、仏像を拝観し、それによって和やかな心、素直な心、慈悲深い心、などを養い、両親をいたわる、私達の周囲には、神様、仏様、ご先祖様などが、いつもおいでになって、我々をじつと静かに見守って下さっているのであるという事を知り、また知らしめることが大切ではないでしょうか。

最近若者の間には、このような事柄が次第次第に薄らいで、隣は何をする人ぞと、すれっからしい、ぎすぎすして排他的な心のすさびが大手を振って、まかり通っているのではないだろうかと思われるのではないのです。

仏海上人が精根こめて刻みあげた観音菩薩のうしろに立っている舟型光背には、朱の漆で「多田屋精左エ門」とか「伊吹屋庄右エ門」ただ単に「施主 シブヤ」等と楷書で書かれています。その文字を読めば「あ、このお方は〇〇家の祖々父の人だ」とか「あ、あの家なんだ」などと、自分が自分の目で見、確かめることができるのです。

仏海上人は、お米やお麦など主食を断って木の根や草の葉つ葉を食べながら苦難に苦難を重ねて開眼し、萬民を救わんものと一刻一刻心を込めて千体仏や観音菩薩を刻みあげたその仏像を拝観し、直接手で触れてみて始めて仏海上人の心や人となりを感じとられ、その当時の「みたま」が、私達を静かに見守って下さる。そしてその中で生かされ、生きているのであると言う素朴な情緒を育てる。それは宗教人の行う教化活動の一面ではないかと思うのであります。

北条市庄の薬師堂内には、国指定の重要文化財「木心乾漆菩薩立像」「木造菩薩立像」、二体の立像が安置されています。二体共に平安初期の頃より長い長い時間を経過して今日

に到った等身大の実に立派な立像で一見してそのお姿に圧倒され、然も慈悲深い「まなざし」また、左膝をほんの僅かに曲げてお立ちになる腰から下にまとった衣の付け方など、どなたがご覧になっても「あゝ何と美しい線や襷ひだだろう」と称賛され近代美の追従できないお姿には「雅」みやびの心が伺はれ、これこそ情操教育の源ではないだろうかと思われました。勿論、人間十人十色、それぞれ違った見方、考え方、受取り方がありますでしょう。然しながら、素直な気持でこれらの仏像を拝したのである事には間違いないと私は確信したのであります。この素直な気持で拝した「素直な気持」それそのものが、人間本来の姿であり、かつまた、人間本来の心根ではないだろうかと思うのです。

このような、さゝやかな活動を皆で共々おし進め、素直な心の輪づくりに取組んだ次第であります。

以上私が実践して参りました、教化活動らしいものを紹介させて頂きました。
ご静聴有難うございました。

(愛媛県 國津比古命神社 宮司)

伝えよう古里の文化伝統

村田和之

私達は神世より生まれ育ち現在があります。そして四季折々の中で自然の恩恵を受け自然と共に生き、すばらし伝統文化を生み出し自然と共存し今に受け継ぎ伝えてまいりました。

今日は或る小さな一村社の宮司の奮闘、蘇る古里の情熱あふれる生きざまをお話し申し上げ皆様方のご批判ご指導を賜わりたいと思います。

さて私達日本民族は他の国と違い日本で生まれ育ったすばらしい文化を後世に伝える習性を持っていると思います。

今から十九年前、その宮司の奉仕する地域では伝承文化として受け継ぎ伝えておりました木遣り歌も、とうとう一人の古老只一人となっておりました。

昔の秋祭りのご神幸祭では大勢の氏子達が歌っておりました木遣歌。危機を感じた宮司、地域に伝わる文化を消してはならじと一人、三年間もの歳月をかけ、伝統文化を伝えるべ

くその古老を説得、遂に数人の若者等に伝え教えて頂くことに成功したのであります。宮司は早速平成元年、保存会を設立、少しづつ会員を増やし、ことあるごとに地域の木遣を歌ったのであります。

以来秋祭りには子供御輿をかつぐ子供達のかけ声に一段と力強い活気が生まれたことは言う迄ありません。

地域で一人寂しく受け継いできました木遣歌は一変し平成六年には、とうとう小学校の全児童迄大きく広がってきたのであります。

当時の小学校の校長先生が宮司を訪ね、何か地域に伝わっている伝承芸能を小学校の生徒に取り入れてみたいとの申し出に宮司は二つ返事で承諾、小学校に出向き指導致しました。それから四年後の平成十年、広島市内の先生が集い研修する教育研究大会開催の折、アトラクションで子供達は多くの先生達の見守る前で木遣歌を力強く披露したのであります。

市内各地より参加されていました先生は、地域に開かれた教育、児童に地域の文化伝統を取り入れた教育に目を見張り、その様子は広島市の教育委員会に迄聞き及ぶこととなったのであります。

そしてその波及効果はとどまることを知らず遂に大舞台迄進み、昨年十月全国大会出場

の名誉を受けたのであります。

第十一回地域伝統芸能全国フェスティバルひろしま、第三回地域伝統芸能による豊かなまちづくり大会ひろしま。二〇〇三年ひろしま日本のまつり全国大会と名打った桧舞台での出演披露となったのであります。

百人近い小学六年生全員による力強い晴れ姿、何とすばらしい光景でありましょうか。地域で一人守り伝えていた小さな小さな伝統文化が一人の神主の努力により見事に大きく花開き小学生に受け継がれて全国大会に迄出演できたのであります。

名付けた平成十年の教育研究大会での研究テーマは「できた、やった、わかった、喜びのある授業づくり」と云うもので、見事にその成果が花開いたのであります。

今でも六年生は新入生に又、五年生に恒例行事として、その木遣歌を教え伝えております。今では子供達は、只木遣り歌を歌い伝えるだけにとどまらず、木遣歌の意味、本歌、歴史等に関心を持ち研究するようになりました。宮司は校長先生の要請に喜んで説明に参上していることは云う迄ありません。

今から約五〇〇年前、室町時代に一時中絶した伊勢のご遷宮を再興する為、ご用材やお白石持行事、お木曳行事の時木遣歌が生まれ歌い継がれている木遣歌、全国各地より参加

し見学していた先人達が各地方に持ち帰り古里の歌詞を作り節を変え里歌よろしく今日に伝えていた木遣歌。授業時間何げなく話す宮司の言葉の中で「お伊勢さん」と度々話す言葉に「お伊勢さん」とは何ですかとの質問に苦笑いしながら喜んで答える宮司。言うは安く行うは難し、先達、佐古幸嬰先生は言われました、口先だけ上手に話しても何の意味もない「無言実行」あるのみに。「神様は見てござる」。私達は「ことだま」により相手の心を振り興すべく使命を持っています。

神社はたとえ小さくとも、地域のリーダーシップを取り多くの人達が相集い、協議し古里に伝わる、文化伝統を再興し今日に伝えてきたのであります。

私達神主は、地域の指導者であり、日本民族の心を伝える先達でなくてはなりません。

諸先生のご活躍をお祈り申し上げ、最後に地域で歌い伝えています木遣歌を披露し今日の私の責を終えたいと思います。

イヤー めでためでたが（トコセ、ハリセ）

三つ重なりて、ありや庭にゃ鶴亀、やんせ五葉の松（ソリヤ、ヤットコセ、ヨーイヤナ、アレワイセ、コレワイセエ、サア、ナンデモセ）

まかるちがえし
死道反

山本行恭

我が庭の初穂捧げて来む年の 稔り祈りつ五十鈴の宮に（昭和天皇御製）

昭和六十三年秋、病床にあられた陛下は、御身を思うより先に、
“今年の出来具合はどうか？”とお尋ねになられたと承っております。

五穀の豊穡は、単に食物が取れることを祈るのみならず、生産の尊さを示しています。
そこに人民の心を豊かにする生業があります。

椿大神社は、過去数百年の間、この生産という誠に大切且つ、尊い神事に携わることが叶わなかったのです。私どもは今秋に御鎮座二千七年を迎えますが、栄枯盛衰の歴史を辿る時、天正年間の織田信長勢による、紀伊長島一向一揆平定の際の攻防を忘れてはならないのです。椿大神社の別當寺、大日寺・阿弥陀寺に四百名の僧が居たようですが、全てが討ち死にをしたのみならず、常念坊・百万念坊の大僧正が、生きながら即身成仏をした墓も残されております。その後寺は絶えてしまったのですが、広大な跡地は特別の目当ても

ないままに野放図にされ、いつしか周辺の農民が営む農業用水の溜池にされたようです。しかし一向に水が溜らずいつも空っぽになってしまいうので、住民からはカライケと呼ばれるようになったのです。遂に住民は不要な物などを捨ててしまいうゴミ捨て場と化し、実生の松が茂り家畜や動物も捨てられてしまいう惨状となったのであります。

昭和五十年、私どもの奉賛会総裁より、県花、花菖蒲一千株を奉納するから、との話しが持ち上がりましたが、そのような場所もなく、途方に暮れていたところ、明治四年の廢藩置県により取り上げられていた別當寺跡地が浮かび上がったのであります。早速総代と共に話しを取りまとめ、ついに椿大神社所領として活用することになったのです。しかし、菖蒲だけ植えるのは勿体ないことから、永い間途絶えていた御田植祭を復興することにしたのであります。

私どもの御祭神・猿田彦大神は祓いの神としてその御神威誠に宏大なものがあられますから、血塗られた土地を大祓いしてお清めするために「二十八宿の祓い」を深夜に行うことになりました。御承知の方もいらつしやいますが、二十八宿の祓いとは、東西南北の定められた角度範囲を更に七区分してお清めする作法であります。今でこそ女性の身だしなみとされている化粧を施し、頬紅を塗り、口紅をさし綺麗に整えたのであります。元來化粧

とは、洋の東西を不問、土着原住民が顔料を塗り非常に美しい色彩を施し、土着の神の前で踊り祝う行事を垣間見ることがありますように、化粧とは最大の魔除けにもなるのであります。

斯様なことで深夜の祓いは約二時間程に亘りましたが、先ずは四百名の僧の御霊を和めつつ、血生臭い邪氣を大祓いに祓い清め、中絶以来百五年振りの「御田植祭」を復興することになったのであります。

田舞・田楽など田植えに併せて歌舞をするための大テント（高さ約十五メートル程）を職員の人力により立てておったのです。既に棟に差し込まれた柱の一部も、次の柱が差し込まれる寸前に、あろうことか穴から外れて倒れてきたのであります。後ろ向きに太い長い柱を押し上げていた矢先に、倒れてきた柱が私の頭部を直撃したのであります。瞬間の事とて殆んど覚えておりませんが、目から火花を発しその場にしゃがみこんだあと、テント外に飛び出した時、頭部から血が流れ出しました。四百年前の僧の御霊は未だ完全に和められていなかったのでしょうか、血を血で洗う結末となったのであります。しかし、復興第一回の御田植祭は好天に恵まれ、多勢の参拝者と東京赤坂の芸妓連などにも御奉仕いただき盛大に開かれたのを、私は病院のベットから見ていたのです。

爾来、年毎の御田植祭も絶えることなく、氏子総出のお祭りとなり、神宮にも一俵奉獻させていただいております。

穢土が浄土とは仏教用語ではありますが、穢れた土地も清めれば浄らかな土地と化すのであり、神道では死道反（まかるちがえし）と云うのであります。常に私どもの周囲にまつわる穢れを大祓に祓い清めることにより、何事も素晴らしいものになる事を改めて思い知らされた次第であります。

須く地を祓い清めて一切を浄化するのが私どもの大使命と捉えております。

（三重県 椿大神社 宮司）

明治天皇と神宮大麻奉斎

芦原高穂

神宮大麻奉斎の意義について些か申し上げる為には、この制度が生まれた明治という時代を検証する必要があるのではないかと思います。

その時代背景に潜む神宮大麻を祀る必要性というものを理解しなければ、神宮大麻奉斎の今日的価値は理解できないのではないのでしょうか。

さて、この明治時代を生んだ徳川幕府の鎖国政策から、一転して国交を開き、通商条約の不等等さに耐えながら、近代国際社会の一員として、変貌を遂げる事が出来たのが、明治の時代といえるでしょう。

国家を背負い、正に武器を使わない戦争といわれる外交を有利に運ぶためにも、当然国民としての意識の高揚と、それは正に紐帯ともいえる強い絆が必要でありました。

しかし、この国民意識は自然発生的に生じることを期待することは出来ません、これを醸成するためには、国民全部に行き渡る教育が必要でありました。

明治政府は明治五年学制布告を發布致します。身分階級性別にかかわらず一定年齢に達した児童は、必ず教育を受けることを国民に知らしめたわけです。

明治天皇には、当初よりこの教育を通じて、国民が自立し、幸福な生涯を遂げるべく心痛められ、統治の上での大いなる課題でありました。

諸外国との交通通商によつて多くの外国物資の流入や多様な考え方の広がり、当然予測されたことではありますが、そのために我が国の独自性が失われていくのではないかと、うご心配が明治天皇をはじめ教育家の中にも危惧する声が根強く存在したのです。

明治五年の学制の發布により、義務教育の実施に向けて動き出しますが、その根底は森有礼ら、欧米の学校教育をまねたもので、学校の地域の負担などの問題とも相俟つて、いたく不評を買いましたが、しかし、四民平等のもとともかくも義務教育による学校制度が、出発したわけです。

そのころ明治天皇におかせられましては、明治五年～十八年にかけて数度に亘り北は北海道南は九州に到るまで巡幸され、各地では必ずと言っていいほど小中学校をご視察になりました。

陛下は各地の小中学校を視察され、その感想を側近であった元田永孚に語っておられ、

これは後に『聖旨教学大旨』として保存されましたが、現状の教育の問題として二点示されました。

その第一は欧化に流され、忠孝仁義など東洋の人倫の道がかけており、このままでは、いずれ君臣の義、親子の信が失われることになる。幼少のころよりしつかり教えなければならぬといふ指摘になりました。

その第二は学校での授業内容が高尙すぎて現実への適応性がない、習ったことを学校からうちへ帰っても發揮できないではないが、家に帰り本業を盛大にする様でなければならぬといふ指摘遊ばされました。

事ほど左様にこの明治十年代の急激な欧化思想は教育にも大きな影響を与え、まさに宸襟を悩ますところとなりました。

そうしたことから当時の元老伊藤博文にもその点に対する御下問があり、伊藤は謹んで『教育議』として奏上したのでした。

伊藤はその中で、維新以来、人情は浮薄、廉恥の心を失い、礼讓廃れ、倫理が乱れ、過激な言論が横行、あげくに国体を破壊しようとするものまで現れる現状の認識はもつともであります。これらの諸弊は時世の変化であつて、教育はその副因にすぎず、封建鎖国

の風雅破れ、人身が放縦で気ままになったところへ欧州の過激な民権思想が流入してきたからであります。

これら諸弊を矯正するには教育も大切であるが、それがすべてではない、又、急激な効果を求めてはいけない、さらに弊害を救わんとして国家の大方針をみだりに変更して、旧幕時代の陋習を再び招来することがあってはならない。さらに国教を建立することはもともと浮華なることであると論じました。この場合の国教とは国の宗教ではなく、歴史伝統文化を反映させた教えですが、後日優秀なる指導者の出現によるべきで、政府が管掌すべき事にあらず、青少年に至っては、いたずらに天下国家を論ずるよりも、欧米の進んだ科学を学びこれを実際に用いる方途を期するべきであるとなりました。

こうした政府要人の教育改革に対する消極的な姿勢に対し、明治天皇は当時の宮内庁でできることをしようと言うことになり、その叡慮によって編纂されたのが幼学綱領でした。文明開化の時代にあつて維新の遂行を先頭切つて導いていた伊藤にとつては時代の逆流を最も恐れていたもので、当たり前だったのかもしれない。

明治天皇御製

いつわりの世をまだ知らぬ幼子が

心や清きかぎりなるらぬ

この明治十六年一月全国の学校はもちろん、一般国民にも配られた幼学綱領は、「教学の要は本末を明らかにする」こととし、仁義忠孝の志を教えずして知識才芸に走ると人徳を失い学んだ成果をも傷つける。仁義忠孝という本を棄て知識才芸という末に走ることとなる。

それによりいたずらに競ひ仕舞いに相争うこととなりそれはやがて天下争乱となり、その時仁義忠孝の道がなければ争乱を止める事ができようか。

何も知らない幼児に道德の道を説き理解させればそれは習性となり道德を涵養することによって、風俗は正されて立派な人格を陶冶できる。

そのために孝行、忠節、和順、信義、貞操、廉潔ほか二十の徳目をあげて身を修める道德とした。側近として仕えた元田永孚は個人道德、国家道德、社会道德をつくさんとしたのでした。

そして明治十九年明治天皇は東京帝国大学に行幸され、法、理、工、医学の設備はあつても、伝統に基づく国学儒学および道德を学ぶ設備のないことを深く憂慮せられ、元田永孚に命じて、教育勅語の編纂、渙発があつたのです。

明治天皇の御聖慮を明らかにするために長々と教育の変遷をもうしあげました。

一方でこの時代、神祇官などの神社制度の変遷も目まぐるしく、明治四年の神宮大麻海内遍布の号令のもと、国民等しく伊勢の神宮を中心として、全国津々浦々に至るまで、新たに奉製された天照皇大神宮と記された大御璽としての神宮大麻は、「治教を明らかにして、以て惟神の大道を宣揚する」として大教宣布が布告され、「神社は国家の宗祀」との根本方針により、頒布がはじまりました。

明治五年の神宮大麻が奉製されるに当り、頒布御璽奉行式の北小路大宮司の祝詞には

天皇乃大命乎以弓天乃益人達爾朝爾夕爾皇大御神乃大前乎慎敬比拜令給布戸為斯弓

とありますように、明治天皇の御聖旨によりまして始められたことは明らかであります。が、その背景とするところは、やはり先に述べました教育勅語の渙発に至る経緯と軌を同じくするものと確信するわけです。

しかし、この問題の難しさは、やはり、浄土真宗各派やキリスト教の排斥と受け止めた諸外国の批判を受けることになったり、法理論としての信教の自由という理論の台頭により、政府の関与が徐々に少なくなり、神宮奉斎会が、全国神職会に頒布を依頼するということになりました。

それにより、神宮当局が直接的に全国の神職に頒布を依頼することとなりましたが、忘れてはならないのが、なんと申しまして明徳天皇の大御心であります。

神風の伊勢の内外のみやばしら

動かぬ國のしづめにぞたつ

あまてらす神の御光ありてこそ

我が日のもととはくもらざりけり

きたるべき国際社会の一員として、単にアジアの一国である我が国の独立を守るといふより、欧米列強との違いを認識し、単に科学技術の発展のみに心を奪われることなく、国家の大倫、人としての人倫の道を明らかにしてその自立した国家社会を永遠に伝えていくと言ふ大きな目的を達成するためには、教育の面での大方針の確立が必要不可欠のものであります。

そして、神棚に神宮大麻を奉斎すること、単に個人の家としての守護というよりも、その神宮大麻を奉斎した神棚を通じて、国民の心の絆として、その連帯と祖国への誇りを現実の形にしたいと思われたのではないかと、はなはだおそれ乍ら拝察申し上げるわけであります。

その後神祇官などの諸制度は幾たびかの變遷を経ますが、神宮が奉製し、全国の神職が頒布に従事するという手法は変わることなく現在まで至っているのです。

敗戦後の神道指令により教育勅語は廃止され、まさに明治天皇の憂慮された人倫を教育の基礎に置く仕組みが解体の憂き目を見て、ために教育界の混乱は、戦後六十年の常の姿と言つても過言ではない状態となりました。

しかし、神道指令によつて神宮神社が国家との結びつきを表面上絶たれたようにも見えました、大麻頒布は逆に戦前から国家との關係を薄めてきたために、占領軍の干涉するところとはならず、家庭の祭祀としての神棚は温存されたわけです。

価値觀の混乱とも言つていいと思いますが多様化した考え方の中で、教育勅語の復活はなかなかすすまない状況にあることは皆様もご承知のことと存じますが、そうした戦後の教育の荒廃を嘆きつつも、經濟發展を遂げることが出来たのは、この神宮大麻頒布を通じて家庭における祭祀が継続され、法制上の根柢を失いながらも、地域の習慣として根付くことで、国民の間の結びつきを強化する上で重要な働きがあつたのだと確信しております。神棚を祀り、国家の宗祀としての伊勢の大神を身近に感じること、国家国民としての自覺を促し、民族の誇りと次世代への責任を自覺することができないかと思いま

す。

(北海道 旭川神社 宮司)

親孝行したい時に親はなし

佐古 一 洵

今時代は、大きく変わりつつあります。現代っ子の一番好きなことわざは「棚から牡丹餅」、反対に一番嫌いな諺は「石の上にも三年」だそうです。どうやら子供たちは楽をして安すきにつき、我慢・忍耐が苦手なようです。

又世相が変わったことのひとつに、親孝行があります。昔「親孝行したい時に親はなし」でしたが、今は「親孝行したくないのに親がいる」です。数年前NHK全国作文コンクールの最優秀作に選ばれたものに、荒木忠夫さんの『心の中のふるさと―天草島』があります。この作文は「親孝行」の大切さをしみじみと感じさせられる実話であります。その概要をご紹介します。

私が少年時代の頃、天草の島はどこも貧しかった。私の家は零細の農家で八人兄弟。姉も兄も中学卒業と同時に島から出て行った。口減らしのためだ。

中学一年生のとき春の遠足があった。待ちに待った遠足の朝、母が悲しそうな顔をして私に弁当を渡す。弁当の中身はサツマイモだけだと告げる。蚊のなくほどかすかな声で「かんべんして」といったようだ。母は目に涙をふくませながら私の手を強くにぎって離さない。母の手はブルブルとふるえている。

私は母をののしり、母の手をおもいつき振り払った。その反動で母はよろけた。でも私は母にかまわず泣きながら走った。しばらく走ったところで後ろを振り返ってみた。母は地面に泣き伏していた。

遠足の弁当の時間、私は天神山の山頂の藪の中にいた。クラスみんなが私をさがしている。その声を遠くに聞き、私は藪にひそんでいた。空腹には勝てず私は泣きながらイモをかじった。自分の涙でイモがびしょぬれになっているのがなさけなかった。

家に帰ってから私は母をののしり責めた。母がどれほどつらい思いをしているかなど、中学一年生の私には理解できなかったのだ。

中学三年生になり、高校進学を間近にひかえた頃、担任の先生の勧めもあり、私は島の高校ではなく、熊本市内のK高校を目ざしていた。そのため必死になって勉強もしてきた。十二月のある日、父と母は私をいろいろ端に坐らせ「熊本の高校はあきらめてくれ」と告

おまえのまじゅうのしあわせ
おまえのうたをきかたう
おまえのうたをきかたう

げた。「おまえを熊本に下宿させる費用がない。島の高校ならなんとかなる。島の高校でがまんしてくれ」と両親は私に頼みこむ。

私は父と母を大声で罵倒した。それ以来、私は家族の誰とも口をきかなくなった。あんなに熱を入れていた勉強もほっぽりだした。重苦しい毎日が続いた。そして年が明けて元旦となった。

島を離れ、社会人として働いている姉と兄が帰省してきた。毎年、家族全員で行なっている初詣でも私は参加しなかった。元旦の朝からふとんをかぶって寝ていた・・・。

目をさますと、まくらもとに十枚たらずの年賀状が置いてある。いちばん下にあった年賀ハガキを見て私はドキンとした。同じ家に住む母からのものだった。ハガキにはこう書いてあった。

「おまえに『明けましておめでとう』というのはつらい。でも母さんは、おまえが元旦の日に家族の前で笑いながら『おめでとう』といってくれている夢を何度もみたよ。

おまえがまだ小さい頃、おまえが泣き出すと、母さんは子守唄を歌っておまえを泣きやました。でもいまはもうおまえに歌ってやれる子守唄がない。どうしたらいいのかわからない。母さんはほんとうに困ってるよ。こんどはおまえのほうから母さんに『親守唄』を

歌ってほしいよ」

ハガキを読み終えた十四歳の私は、大声をあげて泣いた。中学三年生の反抗期の私に向けて母が歌ってくれた「心の子守唄」だったのだ。

このとき、はじめて私は親の気持ちがあった。私は、とび起きてふとんをキチンとたたんだ。申しわけないという気持ちでいっぱいになった。

あれから二十年ほどの歳月が流れた。私は結婚をして子どももできた。両親は島で元気にくらしているようだが、しばらく会っていない。

ある晩、中学三年生になる我が家の長男がつむじを曲げた。ささいなことが原因だ。長男は「お父さんもお母さんもボクのことなんかわかってくれないんだ！」と大声で私たちをののしり、自分の部屋へこもってわんわんなきだした。私は自分の少年時代を思いだした。こうして何回となく親にくってかかったものだ。

そういえば、あんなにめんどろくをかけた親にろくに親孝行をしていない。「子をもって親の恩を知る」という諺があるが、いまの私はその心境である。

荒木さんの作文の要旨は以上ですが、後日談があります。ご両親は最優秀作に入賞した

荒木さんの作文の朗読をNHKテレビで見っていたのです。ご両親は大声をあげて泣いたそうです。お父さんが泣いたのはこのときがはじめてだそうです。苦しかった、悲しかった昔を思い出すと感動の涙がとめどもなく流れてしまうのでしょうか。

荒木さんは、すばらしい親孝行をしたと思います。

父母死して後は 孝をつくす事なりがたきを

かねてよく考え 後悔なからん事を思うべし

「孝行しよう」と気がついたとき、親はこの世を去っているものだ。親が生きているうちに親孝行をしておけ、そうでないと後悔するから」という貝原益軒の教訓です。

私のことを申して恐縮ですが、私の母が九十四歳で身罷つてはや六年。年の経過と共に、親の有難さ尊さが身に染む今日この頃でございます。恥ずかしながら今思えば、家では以心伝心の思いもあり、あまり母とは会話を交わさずつつけんどうで、親孝行らしい孝行は何もせず過ごして参りました。年老いた母はさぞ寂しかったろうと、もう少し優しく親孝行をしていればよかったと後悔しております。

人間生活の原点は家庭であります。『教育勅語』にも、その最初に「父母に孝に兄弟に友に夫婦相和し」とあります如く、一番大切なものが親孝行であります。

かの明治維新前の幕末、松下村塾で数多くの優れた立派な人物を育てられました吉田松陰先生も、『士規七則』の第一番目に

一凡そ生まれて人と為れば、宜しく人の禽獸に異なる所以を知るべし。蓋し人に五倫あり、而して君臣父子を最大と為す。故に人の人たる所以は、忠孝を本と為す。

と、忠義と共に孝行の大切さを力説されているのであります。

すなわち、我々人間の全ての道・道徳は「お父さんありがとう！お母さんありがとう！」から始まるのであります。

“人生百行孝に如くはなし”

“世の中に親に孝ある人はただ 何につけても頼母しきかな”

どうぞ「孝行したくないのに親がいる」と言わず、「親孝行したい時にも親がいる」と思
い、親孝行を心行くまでしていただき、親御さんを喜ばしてあげてくださいますよう、お
願い申し上げます。

(京都府 松尾大社 宮司)

神道講演構成法

神道講演の大先達、渡辺武清先生を始め、野村清臣先生、宮地保先生、河本眞澄先生、石井寿夫先生、佐古幸嬰先生など神社界のために一生を捧げられた大先生が神去りまして久しい、先生の教えの万分の一でも恩返しできればと門下生は各地で祈りの庭のひろがりをお願い神明奉仕に励んでいます。講演内容を組立てる構成法を参考迄に佐古先生の「庭のおしえ」より抜粋し、神道講演の手引きにしてみました。

「論」と「証」

一般には序論、本論、結論からなる三分法が主ですが「序」「論」「証」「結」の四分法からなる構成法の必要性を説かれています。

それは、本論をさらに分析して「証」を独立させ「論」の正しさを証明する。

「論」で神道の古典を引用し大綱をしめし、その真実性を証明するために具体的な例話「証」を語る。

内容として

I 何のために語るか（祈願）

- 1 神命をかしこんで立つ
- 2 まず祈れ
- 3 正しい志を
- 4 まじめな生活を
- 5 話は生きている

II 何を語るか（内容）

その一 体験を語る

- 1 体験を語る
- 2 体験を反省する
- 3 二つの「門」

- ① 自然のいのちのなかに神様を見る
- ② 人間のいのちのなかに神様を見る

その二 講演の内容

1 岩戸を開け、門にとどまるな

2 位に中す

3 講録をつくる

① 話の材料を集める

② 話の材料を選ぶ

③ 話をまとめる

④ 特に切り捨てについて

Ⅲ いかに語るか（表現）

1 わかりやすく語る

① 話はわかりやすく

② 自分の言葉で語る

③ 抽象的な論理よりも具体的な事実を

④ 話には“うねり”を

2 至誠をもって語る

① 主催者にも聴衆にも深い感謝を

② 至誠をもって語る

③ 遺言の覚悟

3 自然に語る

① 講録をはなれて

② 自然に語る

③ 個性ある語りぶりを

以上、紙面の都合で構成法を簡単に記して見ました。詳細については各地で活躍している門下生、又は、事務局迄お尋ね下さい。

第二十回神道講演全国研修大会 島根大会の記録

於 出雲大社

名 譽 会 長

矢田部正巳

(神社本庁総長)

顧 問

阿部 信

(神社本庁長老)

々

工藤 伊豆

(神社本庁長老)

々

永江 則英

(鳥取県神社庁庁長)

々

千家 尊祐

(島根県神社庁庁長)

々

湯浅 正敬

(岡山県神社庁庁長)

々

追林 昌弘

(広島県神社庁庁長)

々

上田 俊成

(山口県神社庁庁長)

々

真弓 常忠

(住吉大社宮司)

々

大野 俊康

(前靖國神社宮司)

々

大宮 四郎

(忽那島八幡宮宮司)

々

黒岩 龍彦

(宮崎神宮宮司)

々

大 会 会 長

矢野 憲一

(元神宮禰宜)

実 行 委 員 長

千家 尊祐

(出雲大社宮司)

実 行 副 委 員 長

村田 和之

(長束神社宮司)

実 行 委 員

佐古 一洌

(松尾大社宮司)

々

渡邊 知宣

(正野神社宮司)

々

芦原 巖夫

(旭川神社名譽宮司)

々

二橋 一彦

(砥鹿神社宮司)

々

藤井 昭彦

(神宮禰宜)

々

秋野 義正

(神明社宮司)

々

谷田 勉

(桜山八幡宮宮司)

々

中野 幸彦

(多賀大社宮司)

々

大野 順弘

(檀森神社宮司)

々

落合 偉洲

(久能山東照宮宮司)

事 務 局 長

木下 鎧二

(大江八幡宮宮司)

生 寫 經 和

(松尾大社権宮司)

事務局員

畠田 明彦

(松尾大社権禰宜)

々

村田 和弘

(長束神社権禰宜)

々

村田 佳子

(長束神社権禰宜)

神道講演全国協議会 役員名

顧	問	阿部 信	神社本庁長老	幹	事	藤井昭彦	神宮禰宜
顧	問	工藤伊豆	神社本庁長老	幹	事	谷田 勉	櫻山八幡宮宮司
顧	問	真弓常忠	住吉大社宮司	幹	事	中野幸彦	多賀大社宮司
顧	問	大野俊康	前靖國神社宮司	幹	事	大野順弘	檀森神社宮司
顧	問	黒岩龍彦	宮崎神宮宮司	幹	事	落合偉洲	久能山東照宮宮司
顧	問	矢野憲一	元神宮禰宜	幹	事	木下鎧二	大江八幡宮宮司
会	長	村田和之	長束神社宮司	幹	事・監査	芦原高穂	旭川神社宮司
副	会	長 佐古一洌	松尾大社宮司	事務局長	生寫經和	松尾大社権宮司	
幹	事	長 渡邊知宣	正野神社宮司				
幹	事	芦原嚴夫	旭川神社名譽宮司				
幹	事	二橋一彦	砥鹿神社宮司				
幹	事	秋野義正	神明社宮司				

平成十六年七月現在

あとがき

神職に講話が求められ、平成十年、第十四回京都大会より「神社本庁直轄研修」平成十四年、第十八回鹿児島大会より「神社本庁主催」の研修会扱いとなり従来の様式と異なり、一神主が自由に参加できるよう門扉が開かれたことは神社界に新しい一石を投じたといえるであろう。一見すると全国大会はレベルを高く感じ誤解しやすいが雄弁を参加条件には含んでおらず誰とて参加することができる。昔から心の禊をするために参加し神主としての誇りと指命、責任を感じるよう心していたが、ようやく多方面にその意を汲んで頂き、初参加者が目立つようになった。

平成元年より毎年一回全国大会を開催する運びとなり今年は早くも二十回目を迎えた。全国大会の会場を引き受けるのは初めての出雲大社、大きな節目に相応しい大社、この上ない喜びである。大会会長に千家尊祐宮司、寛大な心でお引き受けを頂き、七月十三日より十五日迄二泊三日壮観な社務所を開放、開講式集合写真には千家達彦教統、又、山口県上田俊成庁長、島根県青木義興、角河和幸副庁長と重臣がご参列花を添えて頂いた。参加

者は四十八名、又、大社国学館生の聴講、記念講演には「神道及び出雲雜感」と題して権宮司の千家和比古先生、朝六時半より夜九時迄過密スケジュールにも負けず真剣に取り組まれたことは今後の神明奉仕に必ず役立つものと確信しています。

今回、全国大会は二十回と言うことで十五回以上参加された人に感謝状を贈呈しました。十九回は古川雅恵、十七回は徳久豊彦、大宮四郎、十五回は河野誠、渡辺知宣、村田和之の六名でしたが私達の大先達でありました大宮四郎先生が十月二十五日八十八歳で帰幽され痛恨の極みです。諸兄には先人達を見習い後に続くよう研鑽されることを望みます。

第二十回神道講演全国研修大会開催にあたり神社本庁、出雲大社、又、中国地区各県神社庁、及びご協賛頂きました著名神社、当会事務局、役員各位に紙面を借りまして厚く御礼申し上げ挨拶いたします。

平成十六年初冬

第二十回神道講演全国研修大会

島根大会実行委員長

村田和之

講話集 国引の集ひ

—第二十回 神道講演全国研修大会 講話集—

発行 平成十七年八月一日

編集者 装幀者 神道講演全国協議会事務局

印刷所 呉市広白石一—二—三四
製本所 株式会社 ユニックス

発行所 神道講演全国協議会

〒六六〇〇四 京都市西京区嵐山宮町三 松尾大社社務所内

TEL (〇七五) 八七一—五〇一六 FAX (〇七五) 八七一—三四三四

落丁・乱丁の場合はお取り替えいたします

